

たにふんぼぐん
カヤガ谷墳墓群

おおたにふんぼぐん
大谷墳墓群

つぼいせき
坪井遺跡

－小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅳ）－

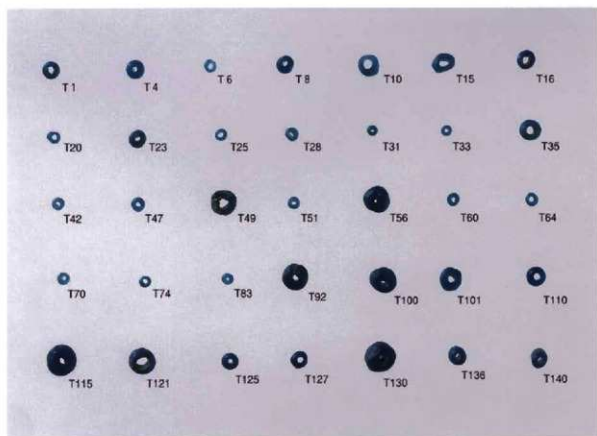
2003年3月

兵庫県教育委員会



第1 中世墓出土
陶器 (越前焼)

11



2号墓 第2主体部 出土
ガラス小玉



第1支群 1号墓
第1主体部全景（西から）



第2支群 1号墓第1主体部全景（北から）



第3支群 全景（北から）



第3支群 2号墓全景（南東から）



2号墓第1主体部 埋葬人骨出土状況（西から）

例 言

1. 本書は、兵庫県出石郡出石町持狭に所在するカヤガ谷墳墓群・大谷墳墓群、ならびに宮内に所在する坪井遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査ならびに整理作業は、国土交通省（調査当時は建設省）豊岡工事事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 本書に使用した方位は、国土座標Ⅴ系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。また方位はカヤガ谷墳墓群が座標北、他は磁北を指す。
4. 本書に掲載した図版のうち、図版1の地図は国土地理院発行200,000分の1地勢図「鳥取」を、図版2の地図は同院発行25,000分の1地形図「江原」「出石」を使用した。また個別の遺構図は、現地でも調査担当者が実測した図面を基に作成した。
5. 遺物は種別ごとに、掲載順の通し番号を付している。金属器にはF、石器にはS、玉類にはTを冠して区別した。なお土器実測図は、断面の塗り分けによって、白抜き：弥生土器・土師器、黒塗り：須恵器、網かけ：陶器を表現している。
6. 写真図版として掲載した写真のうち、遺構写真は調査担当者が撮影したものである。遺物写真は柳イーストマンに撮影を委託した。
7. 遺物のうち金属器の保存処理は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。
8. 本書の執筆は、藤田 淳、鈴木敬二、柏原正民が担当した。執筆分担は目次に記している。
9. 坪井遺跡出土の人骨については、田中良之氏に分析・鑑定いただいた。また小野川放水路事業における調査で出土した木製品の年輪年代測定について光谷拓実氏、樹種同定について伊東隆夫氏にそれぞれ分析いただき、その成果を掲載した。
10. 本書の編集は増田麻子の補助を得て、柏原がおこなった。
11. 本報告にかかる出土遺物ならびに記録写真、関係書類は兵庫県埋蔵文化財調査事務所および兵庫県教育委員会倉住分館において保管している。
12. 発掘調査および報告書作成にあたって、下記の方々よりご協力ならびにご指導を賜った。記して感謝いたします。

小寺 誠、薮木幸治、大森 円、金 零賢、半沢直也、舟橋京子

本文目次

第1章 調査の経過

第1節 事業全体の経過	柏原正民	11
第2節 カヤガ谷墳墓群	柏原	11
第3節 大谷墳墓群	鈴木敬二	21
第4節 坪井遺跡	鈴木	31
第5節 整理作業	柏原	51

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境	鈴木	61
第2節 歴史的環境	柏原	61

第3章 カヤガ谷墳墓群

第1節 概要	柏原	71
第2節 遺構	柏原	71
第3節 遺物	柏原	101
第4節 小結	柏原	22

第4章 大谷墳墓群 第1・2支群

第1節 概要	藤田 淳	24
第2節 遺構	藤田	24
第3節 遺物	藤田	28
第4節 小結	藤田	30

第5章 大谷墳墓群 第3支群

第1節 概要	鈴木	32
第2節 遺構	鈴木	32
第3節 遺物	鈴木	34
第4節 小結	鈴木	40

第6章 坪井遺跡

第1節 概要	鈴木	41
第2節 遺構	鈴木	42
第3節 遺物	鈴木	45
第4節 小結	鈴木	50

第7章 坪井遺跡2号墓 第1主体部出土人骨	53
九州大学大学院 比較社会文化研究院基礎構造講座 田中良之	
九州大学大学院 比較社会文化学府博士課程 舟橋京子	
第8章 まとめ	
第1節 尾根上平坦面の埋葬主体と丘陵斜面の埋葬主体	鈴木 53
第2節 カヤガ谷墳墓群出土の越前焼について	柏原 58
第9章 砂入・袴狭・入佐川遺跡出土木材の年輪年代	80
独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 光谷拓実	
年輪年代測定結果に対するコメント	藤田 80
第10章 袴狭遺跡出土木製品の樹種	81
京都大学 木質科学研究所 伊東隆夫	
兵庫県教育委員会 藤田 淳	

挿図・表目次

第1図 カヤガ谷墳墓群 出土ガラス小玉 法量分布グラフ	20
第2図 高杯 (29) 表面	28
第3図 金属器 (F6) X線写真	30
第4図 1号人骨残存歯式	33
第5図 2号人骨残存歯式	34
第6図 3号人骨残存歯式	37
第7図 主成分得点 (男性)	38
第8図 主成分得点 (女性)	38
第9図 2-1-1号頭蓋 (正面観)	58
第10図 2-1-1号頭蓋 (側面観)	58
第11図 2-1-1号頭蓋 (上面観)	59
第12図 2-1-2号頭蓋 (正面観)	59
第13図 2-1-2号頭蓋 (側面観)	59
第14図 2-1-2号頭蓋 (上面観)	59
第15図 2-1-3号頭蓋 (正面観)	70
第16図 2-1-3号頭蓋 (側面観)	70
第17図 2-1-3号頭蓋 (上面観)	70
第18図 2-1-1号上肢骨	70
第19図 2-1-1号下肢骨	70

第20回	2-1-2号上肢骨	071
第21回	2-1-2号下肢骨	071
第22回	2-1-2号妊娠・出産痕	071
第23回	2-1-3号上肢骨	071
第24回	2-1-3号下肢骨	071
第25回	2-1-1号第11胸椎骨折：正面観	072
第26回	2-1-1号第11胸椎骨折：側面観	072
第27回	2-1-1号第11胸椎骨折X線像：正面観	072
第28回	2-1-1号右橈骨骨折：側面観	072
第29回	2-1-1号右橈骨骨折X線像	072
第30回	2-1-2号副鼻腔炎	072
第31回	袴狭道跡出土木製品の顕微鏡写真(1)	091
第32回	袴狭道跡出土木製品の顕微鏡写真(2)	091
第33回	袴狭道跡出土木製品の顕微鏡写真(3)	091
第34回	袴狭道跡出土木製品の顕微鏡写真(4)	091
第35回	袴狭道跡出土木製品の顕微鏡写真(5)	091
第36回	袴狭道跡出土木製品の顕微鏡写真(6)	091
表1	大谷墳墓群第1・2支群 概要表	011
表2	頭蓋骨計測値(男性)	051
表3	頭蓋骨計測値(女性)	061
表4	固有ベクトル(男性)	067
表5	固有ベクトル(女性)	067
表6	上肢	067
表7	下肢	067
表8	歯冠計測値	068
表9	被葬者間のQモード相関係数	069
表10	出土土器 法量表	091
表11	出土金属器・石器・玉類 法量表	091
表12	年代測定結果一覧表	091
表13	曲物の樹種と結合方法、木取りの比較(有孔曲物底板も含む)	091
表14	袴狭道跡出土木製品の樹種一覧	091
表15	木器・年代・遺物名ごとの使用樹種	091
表16	木器使用樹種一覧	091

巻頭図版目次

カラー写真図版1 カヤガ谷墳墓群	カラー写真図版3 大谷墳墓群
上：第1中世墓出土 陶器（越前焼）	上：第3支群 全景（北から）
下：2号墓 第2主体部出土 ガラス小玉	下：第3支群 2号墓全景（南東から）
カラー写真図版2 大谷墳墓群	カラー写真図版4 坪井遺跡
上：第1支群 第1主体部全景（西から）	2号墓第1主体部 短葬人骨出土状況
下：第2支群 第1主体部全景（北から）	

図版目次

図版1 遺跡の位置
図版2 周辺の遺跡
図版3 小野川放水路事業関連 全面調査位置図
図版4 カヤガ谷墳墓群 調査区位置図
図版5 カヤガ谷墳墓群 全体図
図版6 カヤガ谷墳墓群 2号墓 平面図
図版7 カヤガ谷墳墓群 2号墓 第1主体部・第2主体部
図版8 カヤガ谷墳墓群 2号墓 第3主体部・第4主体部
図版9 カヤガ谷墳墓群 2号墓 第5主体部・第6主体部
図版10 カヤガ谷墳墓群 2号墓 第7～9主体部
図版11 カヤガ谷墳墓群 2号墓 第10主体部・第11主体部
図版12 カヤガ谷墳墓群 3号墓 平面図
図版13 カヤガ谷墳墓群 3号墓 第1主体部
図版14 カヤガ谷墳墓群 3号墓 第3～5主体部
図版15 カヤガ谷墳墓群 3号墓 第3～5主体部（断面）・第2主体部
図版16 カヤガ谷墳墓群 3号墓 第6～8主体部
図版17 カヤガ谷墳墓群 3号墓 第6～8主体部（断面）・第7主体部
図版18 カヤガ谷墳墓群 第1中世墓
図版19 カヤガ谷墳墓群 第2中世墓
図版20 大谷墳墓群 第1支群 調査区位置図、全体図
図版21 大谷墳墓群 第1支群 1号墓 第3主体部、2号墓 第1～3主体部
図版22 大谷墳墓群 第1支群 1号墓 第1主体部
図版23 大谷墳墓群 第2支群 全体図、1号墓 第2主体部・土器棺
図版24 大谷墳墓群 第2支群 1号墓 第1主体部

- 図版25 大谷墳墓群 第3支群 調査区位置図
- 図版26 大谷墳墓群 第3支群 調査前地形図
- 図版27 大谷墳墓群 第3支群 全体図
- 図版28 大谷墳墓群 第3支群 調査区内断面図
- 図版29 大谷墳墓群 第3支群 墳丘部分断面図
- 図版30 大谷墳墓群 第3支群 1・3・4号墓 平面図
- 図版31 大谷墳墓群 第3支群 1号墓 第1主体部
- 図版32 大谷墳墓群 第3支群 4号墓 第1主体部・第2主体部
- 図版33 大谷墳墓群 第3支群 2号墓 平面図・墳丘上遺物出土状況図
- 図版34 大谷墳墓群 第3支群 2号墓 第1主体部
- 図版35 大谷墳墓群 第3支群 2号墓 第2・第3・第4主体部
- 図版36 大谷墳墓群 第3支群 C地点 全体図・地形測量図
- 図版37 坪井遺跡 調査区位置図
- 図版38 坪井遺跡 西区 全体図
- 図版39 坪井遺跡 西区 調査区内断面図
- 図版40 坪井遺跡 西区 1号墓 第1主体部
- 図版41 坪井遺跡 東区 全体図
- 図版42 坪井遺跡 東区 1号墓 第1主体部
- 図版43 坪井遺跡 東区 1号墓 第2主体部
- 図版44 坪井遺跡 東区 1号墓 第4主体部・第5主体部
- 図版45 坪井遺跡 東区 2号墓 第1主体部
- 図版46 坪井遺跡 東区 2号墓 第1主体部蓋石検出・除去状況図
- 図版47 坪井遺跡 東区 2号墓 第1主体部埋葬人骨検出状況図①
- 図版48 坪井遺跡 東区 2号墓 第1主体部埋葬人骨検出状況図②
- 図版49 坪井遺跡 東区 2号墓 第2主体部
- 図版50 坪井遺跡 東区 2号墓 第3主体部
- 図版51 坪井遺跡 東区 2号墓 第4主体部
- 図版52 坪井遺跡 東区 2号墓 第4主体部墓壇平面図
- 図版53 坪井遺跡 東区 3号墓 第1主体部
- 図版54 カヤガ谷墳墓群 出土遺物 土器
- 図版55 大谷墳墓群 第1・2支群 出土遺物 土器
- 図版56 大谷墳墓群 第3支群 出土遺物 土器
- 図版57 坪井遺跡 出土遺物 土器①
- 図版58 坪井遺跡 出土遺物 土器②・石器
- 図版59 カヤガ谷墳墓群、坪井遺跡 出土遺物 金属器
- 図版60 大谷墳墓群 出土遺物 金属器
- 図版61 カヤガ谷墳墓群 出土遺物 玉類①
- 図版62 カヤガ谷墳墓群 出土遺物 玉類②

写真図版目次

写真図版1 カヤガ谷墳墓群

- 上：調査前全景（北東から）
- 中：確認トレンチ（南西から）
- 下：3号墓 人力掘削風景（北東から）

写真図版2 カヤガ谷墳墓群

- 上：2号墓 第1主体部 全景（南西から）
- 中：2号墓 第2主体部 検出作業（南東から）
- 下：2号墓 第3主体部 全景（南西から）

写真図版3 カヤガ谷墳墓群

- 上：2号墓 第4主体部 検出状況（南西から）
- 中：2号墓 第6主体部 全景（南西から）
- 下：2号墓 第11主体部 全景（西から）

写真図版4 カヤガ谷墳墓群

- 上：3号墓 全景（北東から）
- 中：3号墓 第1主体部 全景（南東から）
- 下：3号墓 第1主体部 土器出土状況（南西から）

写真図版5 カヤガ谷墳墓群

- 上：3号墓 第2主体部 全景（南から）
- 中：3号墓 第3・第4主体部 全景（北東から）
- 下：3号墓 第3～5主体部 全景（北東から）

写真図版6 カヤガ谷墳墓群

- 上：3号墓 第5主体部 全景（西から）
- 中：3号墓 第5主体部 土器枕検出状況（北東から）
- 下：3号墓 第5主体部 土器枕検出状況（東から）

写真図版7 カヤガ谷墳墓群

- 上：3号墓 第6主体部 全景（南西から）
- 中：3号墓 第7・8主体部 全景（西から）
- 下：3号墓 第8主体部 土器枕検出状況（西から）

写真図版8 カヤガ谷墳墓群

- 上：第1・第2中世墓 全景（南西から）
- 中：第1中世墓 全景（南西から）
- 下：第2中世墓 竪検出状況（南西から）

写真図版9 大谷墳墓群 第1・2支群

上：遠景（空撮 西から）

下：遠景（空撮 北から）

写真図版10 大谷墳墓群 第1・2支群

上：調査区全景（北から）

中：調査区全景（西から）

下左：第1支群調査前（第2支群から）／下右：第2支群調査前（第1支群から）

写真図版11 大谷墳墓群 第1支群

上：全景（北から）

中左：南北土層断面（南西から）／中右：1号墓土層断面（東から）

下左：1号墓全景（西から）／下右：1号墓溝（北から）

写真図版12 大谷墳墓群 第1支群

上：第1主体部全景（西から）

中左：第1主体部墓壁断面（東から）／中右：1号主体部墓壁断面（南から）

下左：第1主体部棺断面（西から）／下右：第1主体部棺検出面遺物出土状況（西から）

写真図版13 大谷墳墓群 第1支群

上：第3主体部全景（西から）

中左：第3主体部墓壁断面（南から）／中右：第3主体部墓壁断面（西から）

下左：第3主体部棺断面（西から）／下右：第3主体部棺内遺物出土状況（西から）

写真図版14 大谷墳墓群 第1支群

上：主体部全景（西から）

中左：第1主体部墓壁断面（北西から）／中右：第1主体部全景（東から）

下左：第1主体部棺断面（西から）

写真図版15 大谷墳墓群 第1支群

上左：第2主体部棺断面（西から）／上右：第2主体部全景（東から）

中：第3主体部全景（南から）

下左：第3主体部棺断面（西から）下右：円形土壇（北から）

写真図版16 大谷墳墓群 第2支群

上：全景（空撮 北から）

中左：2号墓南北土層断面（北東から）／中右：1号墓南北土層断面（東から）

下左：2号墓周辺表土直下遺物出土状況（北から）／下右：2号墓周辺表土直下遺物出土状況（北から・近接）

写真図版17 大谷墳墓群 第2支群

上：1号墓第1主体部全景（北から）

中左：1号墓第1主体部棺断面（西から）／中右：1号墓第1主体部全景（北東から）

下：1号墓第1主体部棺検出面 遺物出土状況（北から）

写真図版18 大谷墳墓群 第2支群

上1左：1号墓第1主体部墓壁断面（西から）／上1右：1号墓第1主体部墓壁断面（北東から）

上2左：2号墓第1主体部棺断面（西から）／上2右：土坑1断面（西から）

下1左：土器棺検出状況（北から）／下1右：土器棺検出状況（北から）

下2左：土器棺身検出状況（東から）／下1右：土器棺身検出状況（西から）

写真図版19 大谷墳墓群 第3支群

上：全景（北から）

下：東側調査区全景（北西から）

写真図版20 大谷墳墓群 第3支群

上：1号墓 第1主体部 検出状況（南東から）

中：1号墓 第1主体部 全景（南東から）

下：1号墓 全景（南東から）

写真図版21 大谷墳墓群 第3支群

上：1号墓 第1主体部 セクション南壁（南から）

中：1号墓 第1主体部 全景（南から）

下：1号墓 全景（南から）

写真図版22 大谷墳墓群 第3支群

上：2号墓 全景（南東から）

中：2号墓 第1主体部 検出状況（南東から）

下：2号墓 第1主体部 南側土器群 検出状況（南東から）

写真図版23 大谷墳墓群 第3支群

上：2号墓 第1主体部 南側土器群 検出状況（北西から）

中：2号墓 第1主体部 木棺検出状況（南東から）

下：2号墓 第1主体部 木棺検出状況（南西から）

写真図版24 大谷墳墓群 第3支群

上：2号墓 第1主体部 全景（北西から）

中：2号墓 第1主体部 完掘状況（北東から）

下：2号墓 第1主体部 完掘状況（南西から）

写真図版25 大谷墳墓群 第3支群

上：2号墓 第2主体部 検出状況（南東から）

中：2号墓 第2主体部 完掘状況（南西から）

下：2号墓 第3主体部 検出状況（南から）

写真図版26 大谷墳墓群 第3支群

上：2号墓 第3主体部 完掘状況（北から）

中：2号墓 第4主体部 検出状況（南東から）

下：2号墓 第4主体部 完掘状況（南東から）

写真図版27 大谷墳墓群 第3支群

上：3号墓 第1主体部 検出状況（北から）

中：3号墓 第1主体部 完掘状況（北から）

下：4号墓 第2主体部 検出状況（南から）

写真図版28 大谷墳墓群 第3支群

- 上：4号墓 第2主体部 完掘状況（南から）
- 中：4号墓 第1主体部 検出状況（北西から）
- 下：4号墓 第1主体部 完掘状況（北西から）

写真図版29 坪井遺跡

- 上：空中写真（遠景、斜写真）
- 下：空中写真（全景、真上から）

写真図版30 坪井遺跡

- 上：調査地遠景 調査前状況（南西から）
- 中：此隅山城期 盛土面検出状況（南西から）
- 下：此隅山城期 盛土面検出状況（南から）

写真図版31 坪井遺跡

- 上左：西区 此隅山城期 盛土検出状況 東西方向セクション／上右：西区 此隅山城期 盛土検出状況 南北方向セクション
- 下：西区 1号墓 第1主体部 全景（東から）

写真図版32 坪井遺跡

- 上：東区 1号墓 第1主体部 全景（東から）
- 下：東区 1号墓 第2主体部 全景（西から）

写真図版33 坪井遺跡

- 上：東区 1号墓 第4主体部 全景（西から）
- 下：東区 1号墓 第5主体部 全景（東から）

写真図版34 坪井遺跡

- 上：東区 2号墓 第1主体部 石棺蓋石（西から）
- 下左：東区 2号墓 第1主体部 石棺蓋石（北西から）／下右：東区 2号墓 第1主体部 石棺蓋石（東から）

写真図版35 坪井遺跡

- 上：東区 2号墓 第1主体部 石棺蓋石 上層撤去後（西から）
- 中：東区 2号墓 第1主体部 石棺蓋石 上層撤去後（北西から）
- 下：東区 2号墓 第1主体部 南西隅小石棺（西から）

写真図版36 坪井遺跡

- 左：東区 2号墓 第1主体部 人骨検出状況（東から）
- 右：東区 2号墓 第1主体部 人骨検出状況（西から）

写真図版37 坪井遺跡

- 上：東区 2号墓 第1主体部 人骨検出状況（北から）
- 中左：1号および3号人骨上半身（東から）／中右：1号および3号人骨 頭～胸部（東から）
- 下左：2号人骨頭部付近（西から）／下右：各人骨腰部付近（東から）

写真図版38 坪井遺跡

- 上左：東区 2号墓 第1主体部 3号人骨とりあげ後 1～2号人骨状況（東から）
- 上右：東区 2号墓 第1主体部 3号人骨とりあげ後 1～2号人骨状況（西から）

中：東区 2号墓 第1主体部 3号人骨とりあげ後 1～2号人骨状況（北から）

下：東区 2号墓 第1主体部 3号人骨とりあげ後 1～2号人骨状況（南から）

写真図版39 坪井遺跡

上：東区 2号墓 第1主体部 3号人骨とりあげ後 1～2号人骨状況 1号頭部付近（東から）

中：東区 2号墓 第1主体部 3号人骨とりあげ後 1～2号人骨状況 1号腰部付近（東から）

下：東区 2号墓 第1主体部 3号人骨とりあげ後 1～2号人骨状況 2号頭部付近（西から）

写真図版40 坪井遺跡

上：東区 2号墓 第1主体部 2～3号人骨とりあげ後 1号人骨状況（東から）

中：東区 2号墓 第1主体部 2～3号人骨とりあげ後 1号人骨状況（西から）

下：東区 2号墓 第1主体部 2～3号人骨とりあげ後 1号人骨状況（北から）

写真図版41 坪井遺跡

上：2号墓 第1主体部 2～3号人骨とりあげ後 1号人骨状況 1号頭部～腰部（北から）

中：2号墓 第1主体部 2～3号人骨とりあげ後 1号人骨状況 1号脚部（北から）

下：2号墓 第1主体部 人骨とりあげ後棺内状況（北から）

写真図版42 坪井遺跡

上：東区 2号墓 第1主体部 人骨とりあげ後 棺内状況（東から）

下：東区 2号墓 第1主体部 人骨とりあげ後 棺内状況（西から）

写真図版43 坪井遺跡

上：東区 2号墓 第2主体部全景（西から）

下：東区 2号墓 第2主体部全景（東から）

写真図版44 坪井遺跡

上：東区 2号墓 第2主体部 南西部 2号土器棺検出状況（南から）

中：東区 2号墓 第2主体部 北端部 1号土器棺検出状況（南東から）

下：東区 2号墓 第2主体部 北端部 1号土器棺検出状況（南東から）

写真図版45 坪井遺跡

上：東区 2号墓 第3主体部 全景（東から）

中：東区 2号墓 第3主体部 土器棺検出状況（東から）

下左：東区 2号墓 第3主体部 土器棺検出状況（東から）

下右：東区 2号墓 第3主体部 土器棺検出状況（東から、近接）

写真図版46 坪井遺跡

上：東区 2号墓 第4主体部全景（西から）

下：東区 3号墓 第1主体部全景（東から）

写真図版47 カヤガ谷墳墓群 土器

写真図版48 カヤガ谷墳墓群 土器

写真図版49 大谷墳墓群 第1支群 土器

写真図版50 大谷墳墓群 第2支群 土器

写真図版51 大谷墳墓群 第3支群 土器

写真図版52 大谷墳墓群 第3支群 土器

- 写真図版53 坪井遺跡 土器
写真図版54 坪井遺跡 土器
写真図版55 坪井遺跡 土器・スラッグ
写真図版56 カヤガ谷墳墓群、坪井遺跡、大谷墳墓群 金属器
写真図版57 カヤガ谷墳墓群 玉
写真図版58 カヤガ谷墳墓群 玉

第1章 調査の経過

第1節 事業全体の経過

小野川放水路事業は、円山川の支流である出石川に注ぐ3本の小河川－小野川（下流での名称は六方川）・袴狭川・入佐川を対象とする河川改修工事である。これら河川は、出石郡出石町の北部に所在する。小野（六方）川は出石町奥小野から豊岡市との境界をなす丘陵の裾野を、また袴狭川・入佐川は子盗（此瀧）山の南北裾野をそれぞれ取り巻いて西流する。3つの河川は流域面積が狭いうえに、周囲の土地よりも高い丘陵の裾野を流れることから、たびたび水害を引き起こしてきた。

これらの状況を改善するため、昭和61年より小野川放水路事業が開始されることになった。横溢な盆地の外縁を流れている小野川から出石川へ、直接放水できる水路を建設することに加えて、3本の河川改修と周囲の護岸、放水路の建設によって阻まれた水を調節するサイフォンの建設などを実施、周辺の水流通道を変更して水害に備える目的ですめられている。

事業の具体化とともに、事業に伴う埋蔵文化財の取扱いも本格化し、昭和62年の事業地内における確認調査を皮切りとして、順次対応を進めてきた。一連の確認調査では、3河川の流域それぞれから埋蔵文化財の存在が明らかとなったほか、河川改修にもなると急傾斜対策がとられた周辺丘陵においても、墳墓・古墳の存在が判明した。

河川の流域では砂入遺跡・袴狭遺跡・入佐川遺跡が確認され、引き続き実施された全面調査の結果、弥生時代から近世にいたる遺構・遺物が確認された。木製人形を始めとする律令祭祀具が多数出土したことから、祭祀の実態を知る手がかりを求めて、様々な検討がなされている。

第2節 カヤガ谷墳墓群

小野川の右岸は、丘陵の裾部にあたり、急な崖が河川に迫る地形をなす。小野川放水路事業の一環として、上・中流域の河川改修とともに、接近する一部の丘陵に崩落対策が講じられることとなった。

この丘陵一体には多数の墳墓・古墳などが存在することから、河川改修部分に位置する遺跡群と同様に、埋蔵文化財の対応を進めることとなった。工事計画に基づき協議した結果、大きく丘陵を開削する2箇所について、埋蔵文化財の存否を確認する調査を実施することになった。

1. 確認調査（遺跡調査番号：900120）

調査担当者：渡辺 昇・柏原正民

調査面積：53㎡

調査期間：平成2年9月17日～平成2年10月8日

小野川右岸中流における尾根筋を対象に、確認調査を実施した。掘削の対象となる尾根の先端部分を中心に、2本のトレンチを設定した。尾根の中心沿いと、尾根を横断するもので、尾根の先端に見られる平坦面で直交する。尾根筋に沿ったトレンチは全長65m・幅0.7m、また平坦面で直交するトレンチは全長13m・幅0.7mの規模を測る。すべて人力による掘削で、掘削終了後は断面ならびに平面の精査をおこない、遺構・遺物の存在に注意した。

調査の結果、木棺を直葬した主体部と考えられる痕跡のほか、内部から越前焼の甕を埋納した土壌などを確認し、埋蔵文化財の存在が明らかになった。

2. 確認調査（遺跡調査番号：910022）

調査担当者：大平 茂・柏原正民

調査面積：48㎡

調査期間：平成3年9月18日～平成3年10月2日

小野川右岸丘陵で、カヤガ谷墳墓群とカヤガ谷古墳群の中間に位置する丘陵上を対象に、埋蔵文化財の確認調査を実施した。カヤガ谷墳墓群の全面調査と同時に並行で調査をおこない、全長26m・幅1mのトレンチを尾根の中心に、全長23m・幅1mのトレンチを鞍部の中央で直交する形に配置した。掘削の結果、表土直下付近で黄褐色の地山が検出され、いずれのトレンチからも明確な遺構や遺物は検出されなかった。

3. 全面調査（遺跡調査番号：910022）

調査担当者：大平 茂・柏原正民

調査面積：466㎡

調査期間：平成3年5月24日～平成3年6月28日

平成2年度の確認調査結果に基づき、遺跡の存在する範囲について、全面調査を実施した。

作業は丘陵上に立地するため、掘削など調査に必要な作業はすべて人力で実施した。確認調査で把握した古墳の検出面まで慎重に掘り進め、遺構の検出と掘削をおこなった。また作業工程に応じて実測・写真撮影を実施・状況の記録につとめた。

また、調査区的全景写真ならびに周辺の遠景写真を撮影するため、平成3年6月27日に、ヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。作業は関西航測株式会社（当時）に業務委託した。

第3節 大谷墳墓群

大谷墳墓群は、持狭川と入佐川にはさまれた丘陵の北側斜面に位置する。これらの地点も急斜面が持狭川に迫っている。この地点においても小野川放水路事業の一環として、斜面の崩落対策が講じられることになったが、この丘陵一体には墳墓・古墳などが存在することから埋蔵文化財の対応を進めることとなった。工事計画に基づき協議を進めた結果、大きく開削する箇所について埋蔵文化財の存否を確認する調査を実施することになった。

1. 確認調査（遺跡調査番号：920360）

調査担当者：大平 茂・村上泰樹・柏原正民

調査面積：235㎡

調査期間：平成5年1月6日～3月11日

平成4年度に当該地点の確認調査を実施した。持狭川にむかって張り出した尾根上にトレンチを7本設定したが、それらのうち、古墳・墳墓が存在する可能性がある4箇所が全面調査の対象となった。この際に基準となった状況として、地形が人為的に改変され古墳が造られたことを示す平坦面が存在すること、遺物の出土が豊富なことがある。これらの4地点は西からA・B・D・C地点と命名されたが、そのうちA・B・D地点は全面調査の結果、墳墓群が検出されたため、順に第1支群・第2支群・第3支群とされた。D地点は全面調査の結果、遺構を検出することができなかった。

2. 第1・2支群 全面調査（遺跡調査番号：930081）

調査担当者：大平 茂・西口圭介・藤田 淳・鈴木敬二・岡 昌秀

調査面積：341㎡

調査期間：平成5年5月28日～8月20日

前年度の確認調査の結果に基づき、A・B地点の全面調査を実施した。調査の結果、A地点は第1支群、B地点は第2支群とした。調査地は丘陵上に立地するため、掘削など調査に必要な作業はすべて人力で実施した。また作業工程に応じて実測・写真撮影を実施し、状況の記録につとめた。

さらに調査区的全景写真ならびに周辺の遠景写真を撮影するため、平成5年7月29日および9月10日にヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。作業は株式会社バスコに業務委託をおこなった。

3. 第3支群他 全面調査（遺跡調査番号：930194）

調査担当者：大平 茂・西口圭介・藤田 淳・鈴木敬二・岡 昌秀

調査面積：353㎡

調査期間：平成5年12月21日～平成6年3月1日

前年度の確認調査の結果に基づき、今度はC・D地点の全面調査を実施した。調査の結果、埋葬主体などの遺構を検出したD地点を第3支群とした。C地点においては土器や金属器（耳環）などの遺物は出土したものの遺構を検出することはできなかった。このため大谷墳墓群には含まれないものとして、支群名は与えなかった。この地点も丘陵上に立地するため、掘削など調査に必要な作業はすべて人力で実施した。また作業工程に応じて実測・写真撮影を実施し、状況の記録につとめた。

第4節 坪井遺跡

坪井遺跡は、袴狭川と入佐川にはさまれた丘陵の頂上および南側斜面に位置する。この丘陵は東西方向に長く広がっているが、この丘陵の尾根筋に沿って約1km東側に進めば、中世の山名氏の居城である此隅山城が存在する。また遺跡が立地する丘陵南側斜面は入佐川に面しているが、北側斜面と比べて傾斜がきわめて急である。この地点においても小野川放水路事業の一環として、斜面の崩落対策が講じられることになった。この工事範囲内において、此隅山城に関係する曲輪等の遺構が存在する可能性が想定されたため、工事計画に基づき協議を進めた結果、現地形を大きく改変する箇所について埋蔵文化財の存否を確認する調査を実施することになった。

なお当該遺跡の名称は、以下の変更がある。確認調査は「入佐川遺跡」発掘調査の一部として、また全面調査においては当初は此隅山城関連の曲輪の検出を目指したため、「此隅山城跡」発掘調査という名称で実施した。発掘の過程で墳墓を検出したため、平成7年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が刊行した「年報」においては、現地形の小学名を用いた「北山墳墓群」とした¹⁾。

しかし、平成11年度に兵庫県教育委員会が刊行した「兵庫県遺跡地図（発掘調査の手引・遺跡地名表）」²⁾においては、墳墓から曲輪まで含めた遺跡の名称を「坪井遺跡」として取り扱っている。したがって今後の遺跡名は「坪井遺跡」で統一することとし、本報告書においても「坪井遺跡」の名称で報告することとした。

1. 確認調査（遺跡調査番号：940298）

調査担当者：大平 茂・中村 弘・鈴木敬二・岡 昌秀・服部 寛

調査面積：95㎡

調査期間：平成7年1月10日～3月13日

平成6年度に当該地点の確認調査を実施した。付近に此隅山城があることから山城の曲輪等、遺構の存在を想定したこと、また古墳等の存在する可能性を考慮したため、坪掘りによる調査では不十分と考え、丘陵南斜面に試掘トレンチを7箇所設定し、西から順に1～7トレンチとした。

これら7箇所のトレンチのうち、遺構の存在を確認したのは1トレンチのみである。1トレンチは坪井遺跡の西区にあたる。ここでは尾根筋を削平して、その上に盛土することにより平坦面を造成するものであった。また2・3トレンチではこのような盛土層を確認できなかったが、工事範囲隣接地に曲輪または古墳と考えられる平坦面の存在を確認した。この平坦面は盛土なしで削平のみで造成された可能性があり、その範囲は工事範囲まで広がってくる可能性が高いと判断された。

2. 全面調査（遺跡調査番号：950121）

調査担当者：大平 茂・鈴木敬二

調査面積：986㎡

調査期間：平成7年5月2日～平成8年2月5日

前年度の確認調査の結果に基づき、確認調査1～3トレンチ部分の全面調査を実施した。1トレンチの周囲を「西区」、2・3トレンチの周囲を「東区」とした。

遺跡は丘陵上に立地するため、掘削など調査に必要な作業はすべて人力で実施した。また作業工程に応じて実測・写真撮影を実施し、状況の記録につとめた。さらに調査区的全景写真ならびに周辺の遠景写真を撮影するため、平成7年6月29日および8月23日にヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。この作業はアジア航測株式会社に業務委託をおこなった。

調査の結果、西区では山城の曲輪を造成するための盛土を検出した。また盛土の下層の地山面において木棺墓を1基検出した。

東区においては地山面において木棺8基と石棺墓1基を検出した。またこの他に木棺墓1基が工事範囲外に存在する状況を確認し、合計10基の埋葬主体を確認した。これらの埋葬主体は、調査地の地形状況から判断して3つのグループに分けられるものと考えられ、それぞれを1～3号墓とした（図版41）。石棺墓においては、3体の埋葬人骨を検出した。3体の残存状況は極めて良好であったため、その調査にあたって田中良之教授（九州大学大学院 比較社会文化研究院基層構造講座）の指導を依頼したところ、夏季のご多忙な時期にもかかわらず、こちらの調査日程にあわせて遠路九州から出石までご来訪頂いた。ご指導がなければ埋葬人骨の調査は極めて困難なものであったことを肝に銘じつつ、あらためて感謝の念を示したい。

註 1) 大平 茂 他「北山墳墓群」『平成7年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（1996）

2) 兵庫県教育委員会編『兵庫県遺跡地図（発掘調査の手引き・遺跡地名表）』（2000）

第5節 整理作業

小野川放水路事業関連の調査で出土した遺物は、平成2年度より整理作業が開始された。大量の木製品が出土した河川流域の調査を先行して実施、小野川・袴狭川・入佐川流域でおこなわれた調査成果の公開を重ねてきた。今回の報告書作成に関する整理作業は、平成13年度から14年度にかけて、埋蔵文化財調査事務所で行った。

具体的な作業としては、平成13年度に一部未洗浄土器の水洗と出土位置の注記、接合復元ならびに遺物実測をおこない、平成14年度は遺物の写真撮影ならびに遺構図の補正、トレースとレイアウトを実施した。また金属器については、平成13年に保存処理を所内で実施した。出土品の整理作業と並行して、報告書の執筆ならびに編集作業を順次実施し、ここに調査の成果を公にすることができた。

13年間に及ぶ小野川放水路事業に関連する埋蔵文化財発掘調査の整理作業は、本報告書の刊行をもって、ひとつの区切りをむかえたことになる。

整理作業担当者 平成13年度

(調整事務担当) 整理普及班	主任調査専門員	池田正男
	主査	岡田章一
	主査	委田淳子
(整理作業担当) 調査第4班	主査	藤田 淳
	調査第1班	主査 鈴木敏二
	調査第3班	主任 柏原正民
(金属器保存処理担当) 整理普及班	主査	加古千恵子

整理作業担当者 平成14年度

(調整事務担当) 整理保存班	主任調査専門員	池田正男
	主査	村上泰樹
	技術職員	岡本一秀
(整理作業担当) 普及活用班	主査	藤田 淳
	調査第3班	主査 鈴木敏二
	調査第2班	主任 柏原正民

整理技術嘱託員 増田麻子・藤川紀子・喜多山好子・鏡子ふさ恵・早川聖紀子・中田明美・前田千栄子・横山キクエ・小寺恵美子・岡井とし子・前田恭子

なお、これまでに小野川放水路事業に関連する埋蔵文化財発掘調査の記録として、以下の報告書が刊行されている。

藤田 淳 編『砂入遺跡』兵庫県文化財報告第161冊 兵庫県教育委員会 (1997)

鈴木敏二 編『袴狭遺跡』兵庫県文化財報告第197冊 兵庫県教育委員会 (2000)

中村 弘 編『入佐川遺跡』兵庫県文化財報告第229冊 兵庫県教育委員会 (2002)

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境

カヤガ谷墳墓群・大谷墳墓群・坪井遺跡はいずれも兵庫県出石郡出石町に所在する。出石町の中心部から約3km北に位置する。この位置は出石町の北西部に相当し町境の向こう側は豊岡市である(図版1)。豊岡盆地は円山川の下流付近に位置しているが、この盆地の東部にある比較的大規模な谷を中心に袴狭遺跡群が存在する。袴狭遺跡の、西を除く三方を丘陵が取り囲んでいるが、このような丘陵上に、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓が多数存在する(図版2)。ちなみに丘陵の眼下の沖積平野には袴狭遺跡群(袴狭遺跡・砂入遺跡・入佐川遺跡から構成される)がみられる(図版3)。

この谷の地形をより詳細に見てみると、谷の周辺の平野には六方川・袴狭川・入佐川と3つの河川が東から西へと流れている。このうち六方川は田多地(ただち)・安良(やすら)近辺で北流し、豊岡市の市街地付近で円山川に合流する。いっぽう中央部を流れる袴狭川と、最も南の入佐川はすぐに合流し、円山川の支流である出石川に合流する。

カヤガ谷墳墓群は六方川北側の丘陵の南向き斜面に立地する。また袴狭川と入佐川の間には標高約78mの丘陵が存在する。大谷墳墓群はその丘陵の北側斜面の小規模な尾根上にあつて、麓に袴狭川を望む。また坪井遺跡は同じ丘陵の頂上付近からやや南側斜面上に立地し、眼下に入佐川を望むことになる。なお坪井遺跡等が立地する丘陵の東端は「下坂」という峠を形成し、現在は出石市街地と袴狭・口小野方面を結ぶ県道が通っている。この峠の更に東側には国指定史跡・此隔山城が立地する丘陵に続いている。この峠は現在では県道・土取り・宅地造成により地形が改変されているが、本来は更に高い峠であったことが想定される。したがって此隔山城から坪井遺跡にかけては現在よりも一連とまではいかなくとも、一体感のある地形であったと考えられる。

第2節 歴史的環境

報告の対象となる、出石町北東部の袴狭から宮内にかけての一带は、平野部に砂入・袴狭・入佐川遺跡をはじめとする多くの遺跡が存在するほか、丘陵部にも数多くの古墳が知られている。

周辺の遺跡については、これまでの当事業に関する報告書でも触れられているため、本書では報告する遺跡と同時代である弥生末～古墳時代の古墳・墳墓を中心に述べることにする。

報告する古墳群が存在する出石町袴狭・宮内は、出石町の北部に当たる。市町境界をなす丘陵を隔てた豊岡市森尾市字尾には、紀年銘鏡を出土した古墳時代初頭の古墳として知られる森尾古墳がある。尾根上に位置する方墳で、出土遺物などから3世紀後半～4世紀前半の古墳と考えられ、但馬を代表する前期古墳と位置づけられている。「□始元年」の紀年銘を持つ三角縁神獣鏡は、近年の分析によって、中国「新」代の方格規矩四神鏡と確認された。

出石町と豊岡市の境をなす神美から袴狭にかけての丘陵には、森尾古墳以外にも多数の墳墓・古墳が存在し、いくつかは発掘調査によって実態が把握されている。谷を挟んで森尾古墳の対岸に位置する丘陵上には、北浦古墳群を中心とする数多くの古墳が存在する。これらは丘陵を階段状に造成した木棺墓・石棺墓が中心をなす、古墳時代前期の古墳群である。また豊岡中核工業団地が建設されている丘陵に立石墳墓群・立石古墳群、さらに長谷と倉見集落を隔てる尾根上にハナ古墳群などが立地する。

出石町域では六方川(小野川)の右岸にあたる安良から田多地集落にかけて、古墳の集中が認められ

る。これらの丘陵は良質な花崗岩の風化バイラン土を産することで知られており、昭和30年ごろより積極的な土取りの対象とされた。その過程で、古墳の存在が明らかとなり、そのいくつかは調査を待たずまま消滅している。下安良城山古墳(4)は1966年の土取作業中に発見され、兵庫県教育委員会が調査をおこなった。丘陵上において3基の組み合わせ式箱形石棺を検出、変形四脚礎をはじめ多数の遺物が出土した。周辺には5基前後の古墳が存在すると見られ、安良古墳群(5)を構成する。また近接する田多地古墳群(6)も、採土のために切り出された崖面から経塚が発見されたことを契機として、1981年に出石町教育委員会が発掘調査をおこなった。その結果、4基の多体埋葬する古墳を検出、5世紀前半を中心とする多数の副葬品が出土した。さらに同丘陵の南斜面に当たる六方川右岸には、田多地小谷古墳群(8)・田多地引谷墳墓群(10)・カヤガ谷古墳群(12)が存在する。

田多地引谷墳墓群は、弥生時代末～古墳時代に営まれた墳墓・古墳群で、1988年に出石町教育委員会によって発掘調査された。尾根の上に41基の主体部が造られ、平坦や区画溝によって12のグループを構成する。珠文鏡や銅鏡、鉄製品、玉類など、多様な副葬品が出土したが、なかでも7号墓第3主体部から出土した五銖銭の存在は、当時の交流を示すものとして注目される。

カヤガ谷古墳群は横穴式石室を有する古墳時代後期の古墳群で、1990年に出石町教育委員会が発掘調査をおこなった。石室は、竪穴系横穴式石室と呼ばれる特殊な形態をなす。

墳墓・古墳群はさらに六方川上流側へと連なり、今回報告するカヤガ谷墳墓群(1)・カヤガ谷横穴(13)・6世紀後半に造営された方袖式横穴式石室の窪谷2号墳(14)などが存在する。また小野集落をはさんで対岸に迫る丘陵上には岩谷古墳群(17)、新宮谷古墳群(18)などが知られるほか、小野小学校の造成の際にも古墳時代の遺物が出土(16)しており、周辺に古墳の存在が想定されている。

袴狭川沿いの子登(此隅)山には、中世の但馬守護である山名氏の本拠として知られる此隅山城(24)があるが、南に派生する丘陵の一つには弥生時代の墳墓である御原敷遺跡(23)が存在する。1985年に発掘調査がおこなわれ、弥生時代後期末の木棺墓群が、尾根上で複数基検出されている。

此隅山城から南に伸びる丘陵の付け根、下坂とよばれる小さな峠沿いには、下坂横穴(20)が存在する。7世紀前半ごろから築造を開始された横穴墓で、地下式横穴に近い形態が報告されている。同丘陵の先端にかけて、尾根筋ならびに南北斜面にも数多くの墳墓や古墳が存在する。尾根の北側斜面には今回報告の対象とした大谷墳墓群(2)が、尾根筋から北側斜面には坪井遺跡(3)が存在する。丘陵上を階段状に造成して木棺・石棺を直接埋納する形態が主をしめるなか、坪井遺跡には横穴墓の存在も知られている。

此隅山城の南麓山麓に広がる宮内屋敷遺跡(27)では、中世の遺構や遺物が大量に出土しており、中世の但馬における初期城下町・守護所の実態解明に迫りうる成果が期待されるが、同遺跡の南部に位置する宮内黒田遺跡(30)・出石神社境内(28)・宮内遺跡(29)において、弥生時代後期～古墳時代初期の遺物が多数出土している。また入佐川沿いの入佐川遺跡(22)からは、中流域で掘立柱建物群が確認されているほか、自然流路の堤防上から古墳時代前期の土器が大量に出土するなど、至近に古墳時代集落の存在が想定できる。

このほかに墳墓・古墳以外で当該時期の遺物を出土した遺跡は、六方川沿いの田多地小谷遺跡(6)、袴狭川沿いの袴狭遺跡(19)、出石川の鳥居橋付近に鳥居遺跡(31)などが存在するが、流路による包含層から出土した遺物が中心で、実態については不明な点が多い。

註 文中のカッコ数字は、図版2の遺跡番号と一致する。

第3章 カヤガ谷墳墓群

第1節 概要

出石郡出石町袴伏字カヤガ谷に所在する。小野川に突き出す形で派生する小規模な尾根の上に築かれ、南側には小野川を挟んで砂入遺跡を望む。周辺には弥生～古墳時代の墳墓・古墳が数多く存在し、西側300mの尾根にはカヤガ谷古墳群、東側300mにはカヤガ谷横穴がそれぞれ立地する。

平成2年度に確認調査を行なった結果、尾根筋を中心に弥生時代末～古墳時代の墳墓と中世の遺構の存在が明らかとなり、平成3年度には全面調査を実施した。

また事業地に隣接する尾根筋の北側450mは、出石町教育委員会が並行して調査をおこなっている。

墳墓は尾根筋を占める形で3基が存在する。尾根の高所から順に、1号墓・2号墓・3号墓と呼称して、調査を進めた。

1号墓は平成4年度に出石町教育委員会が調査¹⁾した。4mを超える割竹型木棺の1号主体部を中心に、7つの主体部が存在する。2号主体部は精美な組み合わせ式石棺で、朱が施された棺内側から2体の人骨が検出された。他の主体部はいずれも箱式石棺を直葬する。墳丘の背後には順切をつくり、尾根と墳丘を隔てている。遊台形に成形する大規模なもので、1号墓だけでなく墓域全体を区画する溝と考えられる。

2号墓は、11基の主体部で構成される。尾根の高所を取り囲む形で存在するが、配置は不規則で、全体に小規模なものが多い。大半が組み合わせ式の箱形木棺を直葬しているが、木棺痕跡を検出できなかったものもある。

3号墓は尾根の中心部分をカットした平坦面に築かれ、長大な主体部が切り合って存在する。主軸を尾根筋と直交または並行に向け、組み合わせ式の箱形木棺を直葬している。また尾根の先端付近にも、小規模な木棺が2基存在する²⁾。

また2基の中世遺構を検出した。3号墓の平坦面上端、2号墓の墳墓カット面に沿って存在する。第1中世墓は円形の深い土壇で、内部からは越前焼の壺が関係の状態で出土した。第2中世墓は浅い皿型の墓壇で、4個の大きい環を方形に並べていた。

注1) 小寺 誠「補遺(考古編)」『出石町史 第4巻』出石町(1993)

2) なお、調査の過程では、認識した順に墳墓ならびに主体部の名称を与えていたが、報告書の作成に際して、地形等の状況や遺構の配置状況などを勘案した結果、遺構番号を変更した。従前の報文等とは、遺構の名称に変更があるが、本書の記述を持って正とする旨、ご了承願いたい。

第2節 遺構

1. 2号墓(図版6)

墳墓は墳丘と主体部から構成される。盛土が検出できなかった点や、各所に尾根の起伏をとどめ大きな造成は認められない状況から、丘陵の裾を整形し、わずかな整形を加えた程度の墳丘と考えられる。周溝も存在せず、1・3号墓とは、尾根筋を直交する格好に削り込んだカット面で区画されていた。主体部は小野川に面した南側斜面を中心に分布し、急斜面に位置する一部の主体部が、崩落によって本来の状況が失っている。

木棺の痕跡は、南西の半分が遺存する。平面は長方形で、遺存する長軸は0.82m、幅は中央と推定される部位で0.62mをそれぞれ測る。断面は方形で底面もほぼ平坦、最深部における深さ0.45mである。底面において小口板の痕跡は認められない。埋土は中央付近が2層の並行堆積、斜面側の棺側部周辺には小規模な堆積がある。

墓塚から出土した遺物は弥生土器の甕（2）である。

第4主体部（図版8 / 写真図版3）

尾根筋の中央に位置する。墳丘の中央からやや南寄りて検出され、東側斜面には第5～9主体部が密集するが、西側斜面は空閑となっている。組み合わせ式箱形木棺を直葬して埋葬主体とする。

検出した墓塚の平面は方形だが、斜面下方にあたる南西部分は上面が流出していびつな形であった。長軸を尾根の軸線と直交の北西に向ける。長軸の全長は2.15m、短軸は0.62mを測る。底面はほぼ平坦で、西に向かって緩やかな傾斜を持つ。断面は逆台形で、検出面からの深さは0.28mである。埋土は棺の北側を中心に遺存する淡褐色シルトである。

木棺の痕跡は、墓塚のほぼ中央で検出された。上面を流失するほか、部分的に攪乱の影響を受けるなど、平面は不整な長方形を呈する。北西の棺尻に乱れがあることから、長軸は推定で1.50m、短軸は棺の中央部分で0.50mである。また遺存する断面は方形で、周壁は直立する。最深部での深さは0.25mを測る。底面はほぼ平坦で小口板の痕跡は認められなかった。埋土は中央付近に淡灰褐色シルト質中砂、底部の棺側部付近には茶褐色シルト質細砂が堆積する。

墓塚ならびに木棺痕跡ともに、遺物の出土は認められなかった。

第5主体部（図版9）

墳丘の南側斜面の中腹で検出した。西3.0mに第4主体部、尾根の上部には7～9主体部が密集して存在する。組み合わせ式箱形木棺を墳丘に直接埋葬している。

墓塚は不整な方形で、長軸を尾根の軸線と並行の北東に向ける。長軸の全長は2.35m、短軸は1.07mを測る。底面は棺の側部に向かって楕円状になり、検出面からの深さは最深部で0.55mである。埋土は淡い黄褐色シルト質細砂で、北辺の中央付近上面から土器が出土した。一部は棺内に落ち込んでいる。

木棺の痕跡は、墓塚のほぼ中央で検出された。長方形で、長軸は1.88m、短軸は0.56mをそれぞれ測る。断面は方形で、周壁は直立する。底面は墓塚より一段低く、最深部での深さは0.37mである。底面はほぼ平坦で、小口板の痕跡は認められない。埋土は2層の並行堆積である。

墓塚の上面において、遺物が出土した。弥生土器の甕（3）である。

第6主体部（図版8 / 写真図版3）

墳丘の南側斜面の中腹に位置する。西4.5mに第5主体部、斜面上部の北2.5mには7～9主体部が密集して存在する。組み合わせ式箱形木棺を墳丘に直接埋葬している。

墓塚は方形で、長軸を尾根の軸線と並行の北東に向ける。長軸の全長0.91m、短軸0.44mを測る。底面は棺にむかってわずかに楕円状をなす。検出面からの深さは最深部で0.43mである。埋土は明茶褐色シルトで、東隣付近の上面から土器がまとめて出土した。

木棺の痕跡は、墓塚のほぼ中央で検出された。長方形で東側小口がわずかに広い。長軸は0.70m、短

軸は0.29mをそれぞれ測る。断面は方形で、周壁は直立する。底面は墓壇より一段低く、棺痕跡の上面から最深部での深さは0.18mである。埋土は2層の並行堆積である。底面はほぼ平坦で、両小口には小口板を挿入した長方形の土坑がある。規模（全長・幅・深さ）は、東側が0.28m・0.32m・0.08m、西側が0.23m・0.30m・0.08mである。いずれも淡褐色シルト質細砂が堆積していた。

墓壇の内部から、遺物が出土した。弥生土器の甕（4）である。

第7主体部（図版10）

尾根筋の中央よりやや南寄りに位置する。第8・第9主体部と近接するが、直接の切り合いは持たない。組み合わせ式箱形木棺を墳丘に直接埋葬する。

墓壇は方形で、尾根の軸線と直交する北西に長軸を向ける。長軸の全長は1.67m、短軸は0.72mを測る。底面は平坦で、周壁も直立する。埋土は淡褐色シルト混じり細砂、検出面からの深さは最深部で0.55mある。

木棺の痕跡は、墓壇のほぼ中央で検出された。長方形で、長軸は1.40m、短軸は0.38mをそれぞれ測る。断面は方形で、周壁は直立する。底面は墓壇よりわずかに低く、最深部での深さは0.32mである。埋土は中央が2層の並行堆積で、底部付近の棺側部には小規模な堆積がある。淡褐色シルト質細～中砂の内部からは土器が出土した。底面はほぼ平坦で、小口板の痕跡などは認められなかった。

木棺の埋土上面より遺物が出土した。弥生土器で、小型の広口壺（5）である。

第8主体部（図版10）

尾根筋の中央よりやや南寄りに位置する。第7・第9主体部と近接し、9号墳とは墓壇の一部が切り合う。墓壇の北辺が9号墳の墓壇ならびに棺痕跡の上面を切っていることから、9号墳の築造後に埋納されたことがわかる。組み合わせ式箱形木棺を墳丘に直接埋葬する。

墓壇は方形で、長軸は尾根の軸線と並行の北東に向ける。長軸の全長1.21m、短軸0.70mを測る。底面は棺に向かって緩やかな傾斜状をなし、周壁は南北と東が斜め上方に開く一方、西は直立する。検出面からの深さは最深部で0.38mある。埋土は黄褐色シルト～シルト質細砂で、南辺の上面から土器が出土した。

木棺の痕跡は、墓壇のほぼ中央で検出された。長方形で、長軸は0.77m、短軸は0.42mをそれぞれ測る。断面は方形で、周壁は直立する。底面は墓壇より一段低く、底面はほぼ平坦で、小口板の痕跡などは認められなかった。埋土は3層が並行に堆積する。最深部での深さは0.22mである。

墓壇の埋土上面から出土遺物は、弥生土器の甕（6）である。

第9主体部（図版10）

尾根筋の中央よりやや南寄り、第7・第8主体部と近接して位置する。組み合わせ式箱形木棺を墳丘に直接埋葬する。8号墳に南部を切られて墓壇ならびに棺痕跡の一部を失う。

墓壇は方形で、長軸は第8主体部と同じく、尾根の軸線と並行の北東に向けるが、いくぶん北寄りとなる。長軸の全長は1.06m、短軸は遺存する部分で0.50mを測る。底面は平坦で、周壁が斜め上方に開く。検出面からの深さは最深部で0.82mある。埋土は黄褐色細砂混じりシルトである。

木棺の痕跡は、墓壇のほぼ中央で検出された。長方形で、長軸は0.73m、短軸は遺存する範囲で0.35

mをそれぞれ測る。断面は方形で、周壁は直立する。底面は墓壇より一段低く、最深部での深さは0.32mである。埋土は中央に2層、棺側部にわずかな堆積が認められる。

墓壇ならびに木棺痕跡ともに、遺物の出土は認められなかった。

第10主体部（図版11）

墳丘の北側斜面中腹で検出した。南東6.5mに第4主体部、尾根の中央を挟んで南部には7～9主体部が存在する。周辺はある程度の流失を想定させる検出状況だが、木棺痕跡を確認できない堆積状況から、土壌墓と判断した。

平面は方形を呈し、長軸を尾根の軸線と並行の北東に向ける。北西部分は樹木の攪乱を受けて消失する。長軸の残存長は1.38m、短軸は0.59mを測る。底面はほぼ平坦で、断面は周壁が上方へ開く逆台形をなす。検出面からの深さは0.33mである。埋土は北側周壁沿いに淡褐色シルト質細砂が堆積、中央部分は3つの棺の北側を中心に遺存する淡褐色シルトである。棺の痕跡を示す堆積は認められなかった。

墓壇中央付近の埋土から、弥生土器の甕（7）が出土した。

第11主体部（図版11／写真図版3）

尾根筋の中央より北寄り位置し、北東には、1号墓との境界をなすカット面がある。周辺は地形変化が著しく、主体部の北半分を流失する。組み合わせ式箱形木棺を直葬して埋葬主体とする。

墓壇は、長軸を尾根の軸線と直交の北西に向ける。本来は方形を呈すると考えられるが、斜面に突き出す恰好の北西部分を中心に、流失が著しい。残存する規模は、長軸が1.07m、最大幅が1.55mである。底面はほぼ平坦で、断面が逆台形、最深0.46mを測る。埋土は茶褐色シルト質細砂で、南周壁付近のわずかな部分にだけ遺存する。

木棺の痕跡は、墓壇と同じく北西部分を大きく流失する。遺存する部分から、長方形を呈すると考えられ、残存規模は長軸0.98m、短軸0.47mである。断面は方形で、周壁は直立する。最深部での深さは0.13mである。底面はほぼ平坦で小口板の痕跡などは認められなかった。埋土は淡灰色シルトで、底部付近には灰褐色シルト質細砂が堆積する。

墓壇ならびに木棺痕跡から、遺物の出土は認められなかった。

2. 3号墓（図版12）

標高20.0～21.0mに位置し、墳丘と主体部から構成される。盛土は認められず、中央には尾根を削り出した平坦面が存在する。平坦面の範囲は南北15.5m・東西10.8mにおよび、周囲の斜面も幅1.0m前後の範囲で整形される。2号墓との区画は、尾根筋を直交して配したカット面によっており、周溝は存在しない。主体部は尾根中央の平坦面に6基・尾根の先端部へと連なる斜面に2基存在する。平坦面に設けられた主体部は3基づつが密着し、切り合いを見せる。

墳窟をなすカット面は、それぞれの群の境界で屈曲を見せる。また尾根の下方面にある2つの主体部は、尾根の鞍部に不規則な形で設けられていた。

なお、墳丘上で検出された遺物はない。

第1主体部（図版13／写真図版4）

調査区では最も尾根の先端に近い箇所で見出された。尾根筋の中央からやや北寄りの斜面に位置する。東には第2主体部が存在するが、3号墓の中心をなす平坦面とは10mの距離を持って立地する。組み合わせ式箱形木棺を直接埋納している。

墓壇は方形で、長軸を尾根の軸線と直交の北西に向ける。長軸の全長は2.74m、短軸は1.03m、検出面からの深さ0.42mをそれぞれ測る。底面はほぼ平坦で、周壁は直立する。埋土は上下2層に分かれ、硬泥じりのシルト系堆積で構成される。

木棺の痕跡は、墓壇のほぼ中央で見出された。平面は整美な長方形で、長軸2.21m、短軸0.52mである。断面はU字形をなし、直立した周壁が底面付近で丸みを帯びる。最深部での深さは0.28mを測る。底面は平坦で、小口板の痕跡は認められない。埋土は棺側部から底面にかけてレンズ状に堆積し、さらに中央付近で2層の並行堆積となる。北西隅の底面上では、金属器を見出した。

木棺痕跡の側面にへばりつく形で、弥生土器の甕（8）が出土した。本来は墓壇または棺の上面におかれていたものが、棺内へと落ち込んだのであろう。また木棺痕跡の北東底面からは、鉄製のヤリガンナ（F1）が出土した。

第2主体部（図版15／写真図版5）

調査区の南西部分で見出された。3号墓の平坦面と1号墓の中間にあたる、尾根筋のほぼ中央に位置する。組み合わせ式箱形木棺を直接埋納している。

墓壇は方形で、長軸を尾根の軸線と直交の北東に向ける。長軸の全長1.02m、短軸0.67m、検出面からの深さ0.22mをそれぞれ測る。底面はほぼ平坦で、周壁は直立する。埋土は淡茶褐色シルト系の堆積である。

木棺痕跡は、墓壇のほぼ中央において見出された。小規模で、長軸0.79m、短軸0.34mである。周壁はわずかに聞き気味で、逆台形の断面をなす。最深部での深さは0.12mを測る。埋土は淡茶褐色ロームブロック混じりシルトである。両小口の底面上において、小口板を埋め込む土坑を見出した。規模（全長・幅・深さ）は、東側が0.28m・0.14m・0.13m、西側が0.26m・0.29m・0.10mである。いずれも淡茶褐色シルトが堆積していた。

墓壇ならびに木棺痕跡から、遺物の出土は認められなかった。

第3主体部（図版14・15／写真図版5）

尾根筋の中央を削り込んで形成した平坦面上にある。尾根の先端に近い位置にあり、第4・第5主体部と切り合いを持つ。それぞれの墓壇を切っていることから、3つの棺でもっとも後出で造られたものであろう。組み合わせ式箱形木棺を墳丘に直接埋納する。

墓壇は方形で、尾根の軸線と並行する北東に長軸を向ける。南西部分は後世の擾乱によって大きく乱されているが、墓壇の北東部分が第5主体部の墓壇と第4主体部の上面を切っていることから、それぞれに後出することがわかる。

遺存する部分の長軸の全長は2.24m、短軸は1.95mで、比較的正方形に近い。底面は平坦で、周壁も直立する。埋土は茶褐色シルト質細砂。検出面からの深さは最深部で0.15mある。

木棺痕跡は墓壇のほぼ中央で見出された。長方形で、北西部分を後世の擾乱で乱されている。長軸

1.66m、短軸0.51mで、周壁は直立する。底面は墓壇より一段低く、最深部での深さは0.18mである。埋土は黄褐色シルト質細砂のみで構成される。底面は平坦で、小口板の痕跡などは認められなかった。

墓壇ならびに木棺痕跡から、遺物の出土は認められなかった。

第4主体部（図版14・15／写真図版5）

尾根筋の中央に形成された平坦面上に、第3・第5主体部と切り合って存在する。切り合いの前後関係から、3棺では中間に造られたと考えられる。組み合わせ式箱形木棺を墳丘に直接埋葬する。

墓壇は方形で、長軸は尾根の軸線と並行する北東に向ける。南西部は後世の擾乱による影響で、一部が消失する。第3主体部に墓壇の南東辺を切られ、北東部分は第5主体部の墓壇を切る。遺存する部分の長軸の全長は3.05m、短軸は1.60mを測る。底面は棺よりも一段浅い。短軸方向は平坦だが、長軸方向では第5主体部を切る北側が深く、墓盤層を穿つ南に向かって浅くなる。周壁はいずれの部位も直立する。埋土は棺の上面に淡茶褐色シルト～シルト質細砂・灰褐色シルト質細砂が並行して堆積し、南側では棺の側部に淡茶褐色シルト～シルト質細砂・灰褐色シルトが堆積する。検出面からの深さは、最も深い南端部分で0.22mある。

木棺の痕跡は、墓壇のほぼ中央で検出された。長方形で、北西部を後世の擾乱で乱されている。長軸2.24m、短軸0.55mで、周壁は直立する。底面は墓壇より一段低く、最深部での深さ0.25mである。埋土は黄褐色シルト質細～中砂のみで構成される。底面はほぼ平坦で、小口板の痕跡などは認められなかった。

墓壇ならびに木棺痕跡から、遺物の出土は認められなかった。

第5主体部（図版14・15／写真図版5・6）

尾根筋を造成した平坦面に、第3・第4主体部と切り合って存在する。3つの棺では最も先に造られたと考えられる。組み合わせ式箱形木棺を墳丘に直接埋葬する。

墓壇は方形で、長軸は尾根の軸線と並行する北東に向ける。北西部は第3主体部ならびに第4主体部に切られて、消失する。長軸の全長4.25m、遺存する最大幅1.73mを測る。周壁は斜め上方へ緩やかに立ち上がり、平坦な底面をなす。検出面からの深さは0.15mで、木棺部分が深くなる2段墓壇を呈する。埋土は淡黄褐色シルト質細砂である。

木棺痕跡は、墓壇のほぼ中央で検出された。長方形で、北西部を第4主体部に切られることで消失する。遺存する長軸2.11m、短軸0.81mで、周壁は直立する。底面は墓壇より一段低く、最深部での深さは0.25mである。棺側部に小規模な堆積が見られるものの、埋土は基本的に茶褐色シルト～シルト質細砂と、茶褐色シルト質細砂の並行堆積である。底面はほぼ平坦で、南東小口から0.65m西で小口板の掘り方を検出した。長楕円形をなし、規模（全長・幅・深さ）は、0.59m・0.20m・0.25mを測る。掘り方の西辺中央には、半円の拡張部分を設けて、体～底部を打ち欠いた土師器甕を配置していた。土器枕として用いられたもので、頭部が接する部分の口縁を打ち欠いている。掘り方の埋土は、小口板・土器棺ともに茶褐色シルト泥じり細砂である。小口板の掘り方は反対側にも存在した可能性があるが、確認できなかった。

木棺痕跡から、土器枕として用いられた土師器の甕（9）を検出した。他に遺物はなかった。

第6主体部 (図版16・17/写真図版7)

尾根筋を削って形成した平坦面のはほぼ中央に位置する。第7主体部と切り合いを持ち、後出することがわかる。木棺を墳丘に直接埋葬する。

墓壇の平面は整った方形で、尾根の軸線と直交する北西に長軸を向けている。南辺が第7主体部の墓壇を切って造られている。長軸の全長は4.56m、短軸は2.14mで、平坦面では最も尾根の高所側にあたり、底面は傾面と同じく北東から南西に向かって傾斜を持つ。周壁は南・東辺が直立に近く、北・西辺は緩やかに上方へ開く。埋土は淡茶褐色角礫混じりシルト、検出面からの深さは最深部で0.15mある。

木棺痕跡は、墓壇のはほぼ中央で検出された。長軸2.26m、短軸0.68mと、墓壇に対していくぶん小さい。断面は底部付近が緩やかなU字形を呈し、箱式木棺と判断するには矛盾もある。底面は墓壇より一段低く、最深部での深さは0.35mである。埋土は小規模な4つの土塊がレンズ状の堆積をなす。底面は長軸方向においてはほぼ平坦で、小口板の痕跡などは認められなかった。

墓壇ならびに木棺痕跡から、遺物の出土は認められなかった。

第7主体部 (図版16・17/写真図版7)

尾根筋を削って形成した平坦面上に位置する。第6・第8主体部とそれぞれ切り合い関係を持ち、第6主体部に先行、第8主体部より後に造られている。木棺を墳丘に直接埋葬する。

墓壇は平面が方形で、長軸は尾根の軸線と直交の北西に向ける。東隅を中心とした北辺の半分を第6主体部によって切られる。長軸の全長5.82m、残存する最大幅3.10mである。周壁は斜め上方へ緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。検出面からの深さは0.22mで、木棺部分に沿って一段深くなる。埋土は、上面が淡茶褐色シルト、木棺の掘り方が黄褐色シルト質細砂～淡黄褐色シルトである。

木棺痕跡は、墓壇中央からやや南寄りに位置し、主軸もいくぶん北東に振っている。長方形で、長軸は4.10m、短軸は0.68mをそれぞれ測る。墓壇より一段深く掘り込まれ、最深部での深さは0.40mである。周壁は緩やかに湾曲し、断面は「U」字形を呈する。底面はほぼ平坦で、小口板の痕跡などは認められない。埋土は茶褐色シルト質細砂である。

墓壇ならびに木棺痕跡から、遺物の出土は認められなかった。

第8主体部 (図版16・17/写真図版7)

尾根上の平坦面に、第6・第7主体部と近接して存在する。第7主体部と切り合い関係を持ち、先行して造られていることがわかる。組み合わせ式箱形木棺を墳丘に直接埋葬している。

墓壇は方形で、長軸は尾根の軸線と直交の北西に向ける。北辺を第7主体部に切られて、西隅付近を後世の攪乱によって、それぞれ消失する。長軸の全長7.75m、遺存する最大幅3.74mを測る。周壁は斜め上方へ緩やかに立ち上がり、底面は墓壇中央に向けてわずかに播鉢状をなす。検出面からの深さは0.62mで、木棺部分がさらに一段深くなる。埋土は上層が淡黄褐色シルト質細～中砂、下層が淡黄褐色～黄褐色のシルト質細砂である。木棺痕跡は下層の堆積を切り込んでいて、

木棺は墓壇のはほぼ中央に位置する。平面は長方形で、長軸6.55m、短軸0.88mを測る。長軸は墓壇いっぱいまで及ぶ、長大なものである。墓壇よりもさらに深く基盤層を穿って棺を設置しており、さらに段の側面に沿って、小段が設けられている。

周壁は直立に近く、木棺の痕跡は墓壇の下層を切り込んでいて、深さは0.74mである。埋土は基本的

に、淡灰褐色シルト質細砂・茶褐色シルトの2層が並行で堆積する。底面はほぼ平坦で、両方の小口から小口板の掘り方を検出した。それぞれ棺痕跡から1.0m内側へ入った箇所に設けられる。平面は長方形、規模(全長・幅・深さ)は、北側が0.57m・0.26m・0.14m、南側が0.60m・0.28m・0.19mを測る。北側痕跡の西辺付近から土器状として用いられた土師器甕が、南側痕跡付近から鉄刀が、それぞれ出土した。

木棺痕跡の内部から土師器甕(10)ならびに鉄刀(F2)が出土した。墓塚からの出土遺物はない。

3. 中世墓

3号墓の平坦面上に位置する。2号墓との境界をなすカット面の直下に、2基が並んで検出された。いずれも墓としての確実な証左は得られていないが、遺構の形態や遺物の出土状況から、墓として報告する。東側が第1中世墓、西側が第2中世墓で、両者の間隔は2.5mである。

第1中世墓(図版18/写真図版8)

基盤層に穿たれた袋状の土壇で、内部に完形の越前焼壺を埋納する。検出した時点において明瞭な墳丘等は確認できなかったが、斜面側にあたる北東では基盤層を土手状に成形しており、連続して土壇を覆う堆積が確認できた。墓塚の上には、黄褐色粗砂と淡黒灰色細砂混じりシルトが堆積し、さらに土壇に食い込んだ人頭大の礫を1個確認した。薄い墳丘が存在した可能性は高い。

墓塚の平面はほぼ正円形で、直径0.88mを測る。周壁は上面が裾鉢状をなし、北側に寄せて袋状に掘り込まれる。検出面からの深さは、南側のテラスまでが0.13m、北側の袋状部分では0.43m測る。

南側のテラスは掘削過程で形成されたものであり、いったん皿形の土坑を掘ったのち、改めて袋状の土壇を形成している。この袋状に掘り込まれた部分に、越前焼壺を埋納していた。土壇の内部には、土器の周囲を中心にやや粘質の淡茶褐色細砂が堆積していた。埋納壺の壺と明瞭に分離できることなどから、埋納に際して蓋を設置した可能性がある。

土器の底面には平坦な石を2石並べ、その上に壺を正置する。壺の口縁部に蓋はなく、内部は土が充填していた。内容物は遺存しておらず、土壇内にも内容物を示す特徴は見られなかった。

墓塚からは完形の越前焼壺(11)が出土した。このほかに、遺物の出土は認められなかった。

第2中世墓(図版19/写真図版8)

浅い皿状の土壇で、内部から人頭大の礫が4個検出された。検出面において、墳丘等の施設は確認できなかった。

墓塚の平面は、いくぶん南北方向に長い円形で、長軸径0.62m、直交する短軸径0.54mを測る。底面は平坦で、周壁は斜め上方に開く。検出面からの深さは0.10mである。

4個の礫は土壇の中央から、やや西寄り検出された。いずれも掘り方を設けず、底面に接して据えられる。礫は「コ」の字状に配され、東辺をなす礫の下部より鉄剣が1本出土した。土壇の性格に関わる施設と考えられるが、具体的な証左は得られなかった。土壇の埋土は、礫の内外ともに茶褐色シルト質細砂で構成されていた。

底面の直上から、鉄剣(F3)が出土した。これ以外に遺物の出土は認められなかった。

第3節 遺物

1. 土器 (図版54/写真図版47・48)

【2号墓】

第1・第3・第5・第6・第7・第8・第10主体部からそれぞれ1点ずつ出土した。いずれも弥生土器で、甕のほか小甕が1点見られた。

1 (弥生土器/甕)

第1主体部の墓壇内から出土した。口縁～頸部は完形、体部1/3、底部1/2弱が遺存する。外面には煤が付着している。

肩部から短く外反する口縁をもち、内面は平坦だが、端部付近に横ナデを加えて拡張させる。端面は方形に近い形で整える。肩部から緩やかに張り出す胴部に達し、下部は直線的に底部へ至る。平底を持つ底部付近とは、直接接合する個所が認められなかった。

外面の調整は、口縁～頸部がヨコナデ、頸部から底部にかけて縦方向のハケメである。ハケメの上端は、頸部でヨコナデに切られる。内面調整は、口縁部にヨコナデ、頸部にナデ、体～底部に斜め上方へのヘラケズリをそれぞれ施す。肩部内面では斜めケズリの後、頸のくびれに沿って指オサエを加える。口縁の成形に関わる調整と考えられる。

2 (弥生土器/甕)

第3主体部の墓壇内から出土した。口縁～頸部1/4、体部1/3、底部1/2が遺存する。

頸部は「く」の字に屈曲し、さらに口縁部で上部へ屈曲気味に拡張させる。端面には縦凹線を2条施す。肩～胴部は緩やかに張り出し、下部で直線的に底部へと至る。口縁部と胴部の径はほぼ同一だが、わずかに胴部が大きい。底部は平底で、中央に焼成前穿孔が認められる。穿孔の径は1.5cmである。

外面の調整は、口縁～肩部にヨコナデ、頸部付近で体部から連続する縦ハケメをナデ消す。頸部から底部にかけて、縦方向のハケメを施す。内面調整は、口縁～頸部にヨコナデ、肩部付近で体部～連続する横ケズリをナデ消す。肩部以下は、肩部に横、胴部に縦、底部に横方向のヘラケズリを施す。

3 (弥生土器/甕)

第5主体部の墓壇内から出土した。口縁～頸部3/8、体部1/3が遺存、底部は欠損する。外面全体に煤が付着するが、大半は剝離する。

頸部は「く」の字に屈曲し、さらに口縁部を受け口状に折り返して直立に近く形成する。端部は丸くおさめる。その後、上端はさらに横ナデ。胴部は緩やかに張り出し、最大径をなす。下部は直線的に径を減じる。

外面の調整は、口縁～肩部にヨコナデを施し、肩部付近で体部から連続する縦ハケメを切る。内面調整は、口縁～頸部にヨコナデ、肩部は横方向のヘラケズリ。頸～肩部内面では、さらに縦方向の長い指オサエを連ねる。口縁の成形に関わる調整痕であろう。

4 (弥生土器/甕)

第6主体部の墓壇内から出土した。口縁～頸部1/2、肩～胴部1/10が遺存する。器面は内外面と

もに摩滅気味で、口縁部の外側に煤が少量付着する。

口縁は短く、頸部から「く」の字に屈曲した後、上下をわずかに拡張させ、端面を作る。端面には縦凹線が2条めぐり、肩部は球形に膨らんで胴部へ至る。

外面の調整は、口縁～頸部にヨコナデ、肩部以下を縦方向のハケメで調整する。頸部ではハケメの上端がヨコナデで消される。内面調整は口縁にヨコナデ、体部以下は横方向のヘラケズリ。頸部でヘラケズリの上端をナデ消す。

5 (弥生土器/小壺)

第7主体部の木棺痕跡上面から出土した。ほぼ完形に遺存する。外面は褐灰色土で精製されるが、ほとんど剥落し、器面のいたみも激しい。

小形の壺で、縦長の楕円球をなす体部に、外方へ開く口縁がつく。口縁は外反気味で、端部付近で軽く内湾する。

外面の調整は、口縁～頸部にヨコナデ、体部にハケメを施す。器面の摩滅が顕著で、肩部でハケメの後に指ナデを施した可能性もあるが、細部の観察はできなかった。底部には板ナデによる線状の調整痕が残る。内面調整は、口縁にヨコナデ、体部～底部にヘラケズリを施す。頸部には、ナデ・指頭痕が顕著に認められる。

6 (弥生土器/甕)

第8主体部の墓室内から出土した。口縁～頸部1/2、体部3/4、底部1/4が遺存する。

頸部は短く「く」の字に屈曲して口縁をなす。端部は上下に拡張して端面を形成し、凹線が2条めぐり、さらに端面に沿って上部を直立させ、内面には等間隔に配された爪あとが見られる。肩部は球形に膨らんで胴部へ至る。胴部は口縁径よりも、わずかに大きい。下体部は直線的に平底へと至る。

外面の調整は、口縁～肩部にヨコナデ、体部に縦方向のハケメ。肩部付近で体部から連続する縦ハケメをナデ消す。底部の調整は不明瞭である。内面調整は、口縁部がヨコナデ、頸～底部がヘラケズリである。肩部付近が斜め、胴部以下が縦方向で、頸部ではケズリの上端がナデ消されている。

7 (弥生土器/甕)

第10主体部の主体部検出面から出土した。口縁部の1/6が遺存する。

頸部から短く「く」の字に屈曲した後、口縁の下端をわずかに拡張させて端面を作る。端面は平坦なままで、縦凹線は極少ない。

器面は内外面ともに、摩滅が著しい。口縁部にヨコナデを施す。頸部以下の調整は、内外ともにわからない。

【3号墓】

第1・第5・第8主体部からそれぞれ1点ずつ出土した。8は弥生土器の甕、9・10は土器杖として使用されていたもので、古墳時代前期の土器器甕である。

8 (弥生土器/甕)

第1主体部の木棺痕跡側面から出土した。口縁～体部の3/8が遺存する。外面には煤の付着が認められる。

口縁部には歪みが生じる。頸部で短く「く」の字に屈曲した後、口縁にいたる。口縁端部は上下に拡張して端面とし、縦凹線を2条めぐらせる。口縁部と胴部の最大径はほぼ同じだが、肩部の張り出しが弱い。

外面の調整は、口縁～肩部にヨコナデ、体部は縦方向のハケメを施す。煤とともに器壁の外側に剥落しているため、ハケメ痕跡は微弱な遺存であった。頸～肩部ではハケメがヨコナデに切られる。内面調整は、口縁～頸部にヨコナデ、体部付近に斜め上方から横方向へのヘラケズリ。頸部では横ハケメがわずかに遺存する。

9 (土師器/甕)

第5主体部の木棺痕跡内から出土した。口縁部の1/4と、胴部以下が欠損する。土器枕として使用される際、意図的に打ち欠かれたものである。

複合口縁をなし、頸部から短く外反した後、内湾気味に直立する。口縁端部に沿って横ナデを加えて端面を整形する。屈曲部と口縁端部の中間付近に、粘土接合痕がわずかに残る。肩部は緩やかに膨らむが、胴部は長めで、遺存する範囲においては下部にむかう光線が見られない。

外面は、口縁～肩部にヨコナデ、肩～体部にハケメの調整を施す。肩部付近で、縦ハケメがヨコナデに消される。体部は縦ハケメの後にヨコハケを加える。

内面調整は、口縁～頸部にヨコナデ、体部に斜め方向へのヘラケズリ。頸部内面ではヨコナデに先行してハケメをめぐらせ、肩部内面も横ケズリ後に指オサエを加える。口縁部を整形する際の痕跡と考えられる。

10 (土師器/甕)

第8主体部の墓室内から出土した。口縁の1/3を意図的に打ち欠き、土器枕としている。また体部下半から底部にかけての欠損も意図的な破断で、断面は水平に近い。

頸部で「く」の字に屈曲した後、直線的に口縁端部へ至る。端部はわずかに内面に肥厚気味となる。肩部から胴部にかけては、緩やかな丸みを帯びる。

外面の調整は、口縁～肩部にヨコナデ、頸部から体部にかけて横方向のハケメの後に、縦ハケメを施す。肩部付近でヨコナデが縦ハケメを消す。内面調整は、口縁部にヨコナデ、頸部以下にヘラケズリを施す。ケズリの方向は部位によって異なり、頸～肩部が横、体部が縦へ加える。頸部ではケズリの後で指オサエ・指ナデが見られるが、口縁部の成形に関わる調整痕であろう。

【第1中世墓】

11 (陶器/甕)

墓前焼で、完形の状態を保つ。墓壁の内側から据え置かれた状態で出土した。

平底から緩やかに斜め上方へ開きつつ、胴部に至る。胴部は最大径にあたり、体部の中心よりも高い位置にある。肩部は径を減しつつ直線的にのび、胴部径の1/2で頸部となる。頸部は緩やかに開き、

口縁で外方へ折り返して縁状となす。折り返した外面は平坦に整形を加える。口縁部には、やや歪みがある。

肩部に「大」様のヘラ記号がある。ヘラの順序は、人を書いた後で一を加える。

外面の調整は、口縁～頸部に回転ナデ、肩部は灰かぶりのため調整が不明瞭である。胴部以下は指ナデ・オサエの後に板ナデを加え、胴部の最大径付近には横方向へのヘラケズリを施す。底面は粗いナデで調整、側面には工具のアタリ痕がある。内面調整は、口縁～頸部に回転ナデ、体部に粗い指ナデ・指押さえを施す。底部付近はナデが認められる。

越前焼分類¹⁾の壺Cにあたり、形態からⅢ期（鎌倉後期～南北朝時代）並行と考えられる。

【包含層】

12 (須恵器/壺?)

第2中世墓の東側において、表土掘削中に出土した。底部のみが遺存する。

底部は丸みを帯びるが、中央に窪みを持ち安定する。胴部以上を欠損するため、器種の同定は困難だが、形態や器壁の厚さから壺類の底部に比定した。

外面は体部に回転ナデ、底部に回転ヘラ切り後にナデで調整する。内面は体～底部に回転ナデの後、底部中央に粗く一方向へ仕上げナデを加える。底部の中央は粘土板の充填痕跡が認められる。

2. 金属器 (図版59/写真図版56)

調査では、3点の金属器を検出した。3号墓第1主体部(F1)、3号墓第8主体部(F2)第2中世墓(F3)から、それぞれ1点づつ出土している。

F1 (ヤリガンナ)

3号墓第1主体部、木棺痕跡の北西隅にあたる底面上において検出した。鉄製で、錆びて形が歪曲するが、先端に向かって刃身の反りは確認できる。

全長は9.7cmで、先端から3.5cmの範囲で反りを見せ、片刃の痕跡が認められる。刃身の最大幅は1.6cm、厚さ0.4cmで、断面は扁平な三角形である。また基部は最大幅が1.35cm、厚さ0.60cmで断面が方形をなす。基部に木質の遺存は認められない。

F2 (刀)

3号墓第8主体部、木棺痕跡の西側面にあたる底面直上において検出した。柄元側が南側小口板痕跡に接した状態で検出された。

鉄製の刀で、刃身の中央から切先にかけて欠損する。全長は27.9cm(木質まで含む)、刃身部が21.8cm以上・基部が4.5cmをそれぞれ測る。最大幅は刃身部の2.8cmである。断面は菱形をなす。また基部の幅は2.1cmを測る。最大厚は刃身の中央で0.55cm、基部の厚さは、0.25cmである。

刃身は両刃で断面が変形、遺存する範囲において反りが見られない。柄元は錆の激着が顕著で、鈎の存在や、着装の様子は確認できなかった。茎は刃身のほぼ中央につけられ、上下の両側に方形の溝が認められる。茎の断面は長方形、基部を挟み込む形で木質が付着、柄の痕跡と見られる。目釘の頭が1箇所、木質の隙間から確認できる。なお刃身において、木質の付着は確認できなかった。

F 3 (刀)

第2中世墓の底面直上で検出した。内部に据えられた礎の下部より出土している。

鉄製の刀で、茎から切先にかけての全容が遺存する。茎部と刃身の一部には、鞘と柄の痕跡と見られる木質が付着する。

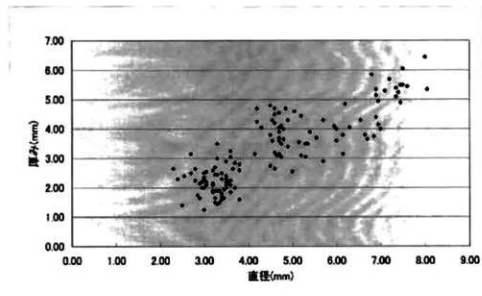
全長は26.7cmで、刃身部が21.6cm・茎部が5.1cmをそれぞれ測る。刃身の最大幅は2.65cmで、遺物全体の最大幅でもある。茎部の幅1.7cmである。また最大厚は茎部分で0.6cm、刃身の背部における厚さは柄元から刃の中央までが0.55cmで、切先に向かって薄くなる。

刃身は断面三角形の片刃で、断面は三角形を呈する。平面は背・刃ともに直線で並行に延び、刃は先端から5cm付近で曲線を描き、切先をなす。茎は背側へ偏って設けられる。刃は刃側が直角、背側はわずかに鈍角をなす。平面・断面ともに長方形で、中央に径0.65cmの目釘穴が設けられている。目釘が装着された状態で遺存する。目釘は円柱形で、長さ1.7cm・径0.6cmである。

3. 玉類 (図版61～63/写真図版57・58)

2号墓第2主体部から出土した。実測した点数は141点で、すべてがガラス製の小玉である。個々の法量については後掲の法量表(表11)に一括し、全体の傾向について触れる。

径・厚みともに、1cmを越えるものはない。最大値は径が8.05mm(T115)・厚み6.45mm(T130)、また最小値は径が2.30mm(T26)・厚み1.25mm(T130)である。厚みに対する直径の比率は、大半が1:1～1:2の間に収まり、法量は、直径3～4mm/厚み1.5～3mmと、直径4～5mm/厚み3～5mmの範囲にまとまりを見せる(第1図)。また外径の大きさに比例するもの、穴の径も0.5mm～3mmまで見られ、外形の半分にまで径がおよぶものもある。



第1図 カヤガ谷墳墓群 出土ガラス小玉 法量分布グラフ

平面形は円形を指向するが不揃いで、穴が通る上下の面も丸く盛り上がるものが多い。側面形は、円柱から球形に近いものまで、バラツキが大きい。

色調はすべてコバルトブルーを呈するが、明瞭な透明を呈するものは少なく、黄褐色の不純物を内包するものが目立つ。また一部の玉において、整形時の引きのばしによる痕跡とみられる気泡、ならびに微弱な条線が、側面に沿って認められる。

註 1) 田中照久「越前焼の歴史」『越前古陶とその再現-九右衛門窯の記録』出光美術館 (1994)

第4節 小結

カヤガ谷墳墓群では、小野川に突き出す小規模な尾根の上から、弥生時代末～古墳時代の墳墓2基を検出した。また、墳墓に切り込んで、中世墓を2基検出した。第1中世墓では、円形の深い土壌の内部から越前焼壺が完形の状態で出土している。

1. 弥生～古墳時代の墳墓群について

尾根の上部から1・2・3号墓（1号墓は出石町教育委員会によって発掘調査）があり、1号墓の背後には深い堀切を設けて、墓域を明確に区画する。

2号墓は11基の埋葬主体で構成される。ほとんどが組み合わせ式箱形木棺で、墳丘の各所に散在して検出された。中心的な主体部はなく、主軸方向も周囲の地形に準拠するだけで規則性を持たない。遺物には、第2主体部から出土したガラス小玉のほか、7基の埋葬主体から出土した供獻土器がある。土器は肥厚する口縁の外面に擬凹線を配する弥生土器で、いずれも後期の所産である。細部の特徴から、ある程度の時期差が窺える。

最も古式な形態は、上下に拡張した端面に明瞭な擬凹線を配する6（第8主体部出土）で、後期の前葉に比定した。第6主体部出土の4も若干後出する要素はあるものの、後期の前半で捉えておきたい。第3主体部で検出された2は、直立気味の口縁端面と擬凹線から、中期の中葉と考えられる。3（第5主体部出土）は口縁部を直立させ、端面に擬凹線は見られないが、形態から後期の中～後葉に比定した。第1主体部出土の1は、口縁端部を肥厚させるもの、擬凹線が消失してヨコナデ調整を施す後期の後葉の特徴を持つ。第10主体部出土の7も、遺存状態は悪いが同時期であろう。

以上を整理すると、2号墓は弥生時代後期に築造され、埋葬主体は8→6→3→5→1（→7）の順で設けられたと考えられる。尾根の中央から斜面に埋葬地を広げた傾向をうかがえる。

3号墓は尾根中央と南側斜面に埋葬主体がある。尾根中央では、造成して確保した平坦面に集中して埋葬する。主軸方向を尾根筋と並行または直交に向け、木棺の規模も2号墓より大きい。また、尾根の南側斜面では、2基の木棺を検出した。平坦面から距離を持ち、小規模で主軸の規則性も欠くなど、一連とは考えがたい。

出土遺物は土器3点のほか、第1主体部からヤリガンナ、第8主体部から鉄刀が出土した。第5・8主体部では、土器杖として土器の甕を使用する。第5主体部出土の9は複合口縁の甕で、5世紀前半でも、新しい時期と捉えておきたい。第8主体部出土の10は、布留式土器の特徴である「く」の字口縁を有する。口縁端部の肥厚がわずかなことや、甕で肩の形態から、5世紀中葉頃と考えられる。

他の平坦面に位置する主体部は、遺物が出土しないため時期比定できないが、墓域の切り合いによって前後関係を見ることはできる。墳丘では、主体部が第3～5と第6～8の2群に分かれて存在する。

前者では5→4→3/後者では8→7→6の順で築造されている。また斜面に位置する第1主体部では、棺側において口縁端面に擬門線を配置する弥生土器が出土した。後期の古い段階に位置付けられ、平坦面に作られた主体部とは、築造時期にも隔たりが指摘できる。

以上の検討から、3号墓は2時期の埋葬主体で構成され、南側斜面には弥生時代後期の、尾根の平坦面には5世紀中葉を初現とする埋葬主体が立地する。

出石町教育委員会が調査した1号墓も加えて、3つの墓は2号墓→1号墓→3号墓の順で造営されたことが明らかとなった。時期的に先行する2号墓は、尾根を大きく改変することなく、地形に沿って小規模な埋葬主体が設けられる。一方3号墓は、尾根の中央を大きく造成し、主体部の規模も大きく、主軸を揃えるなど規則的な埋葬が見てとれる。両者の違いは、弥生墳墓と古墳の特徴が表出したものと考えられる。なお、3号墓の南斜面に2号墓と共通する埋葬主体が分布することについて、2号墓から連続して墓域が広がっていたものが、3号墓の平坦面造成によって分断された可能性もあるが、調査では証左を明らかにできなかった。

2. 中世の遺構について

3号墓の平坦面上から2基検出した。内部からはそれぞれ、埋納された土器や方形に組み合わせた鏝などを検出した。

第1中世墓では、内部から完形に遺存する陶器壺が出土した。周壁を袋状に張りくはめて納め、底部は板石で安定を図っていた。また堆積状況から、薄い墳丘の存在が考えられる。収められた壺は越前焼で、鎌倉後期～南北朝時代の所産である。壺は遺存せず、内部は土壌が口まで充滿していた。土器内の土壌を洗浄したが、内容物の検出には至らなかった。

以上の検出状況から、軽塚または中世墓と考えられる。壺が細頸で、軽塚の外容器とは考えがたいため、火葬骨もしくは骨化した状態の遺骸骨だけを納めた中世墓に比定した。

第2中世墓は方形に組んだ鏝が内包され、その底面から鉄刀が出土した。第1中世墓との位置関係から中世墓に比定したが、上面が割平を受けているため不明な点が多い。

第4章 大谷墳墓群 第1・2支群

第1節 概要

大谷墳墓群第1支群・第2支群は室町時代の守護大名、山名氏の居城がある此隅山から、西へ向かってくぼし状に長く延びる尾根の北面に立地する。二つの支群は尾根の西端に近い支尾根に隣り合って並び、尾根沿いの斜面下には袴狭川が小さな流れを西へ運んでいる。第1支群で127㎡、第2支群で214㎡を調査した。

上流側（東側）の第1支群では、支尾根の後縁上に2基の墳墓が並ぶ。斜面下方側が1号墓、上方側が2号墓である。1号墓では地山を削平して造成した「コ」字形の平坦面に、3基の主体部がある。2号墓では地山の造成は明らかでないが、やや平坦となったところと同じく3基の主体部がある。1号墓は前面が崖崩れによって失われており、2号墓は調査区の外に遺構が続いていることから、本来の主体部の数はこれよりも多くなる可能性がある。6基の主体部のうち、棺の判明する5基はいずれも木棺直葬である。

遺物は1号墓第1主体部、2号墓周辺、および流土から土器（13～22）が、1号墓第3主体部と2号墓第3主体部から鉄器（F4～F7）が出土している。

下流側（西側）の第2支群では、支尾根の後縁上を中心に2基の墳墓と土器棺1基、土坑2基が発見された。墳墓は第1支群と同様、下方側が1号墓、上方側が2号墓である。1号墓では地山を削平した狭い緩斜面に1基の主体部がある。2号墓では地山の造成は明らかでなく、斜面に1基の主体部がある。1号墓は全城が調査区内にあるが、2号墓は調査区の外に遺構が続いている。主体部はどちらも木棺直葬である。

遺物は土器棺に使用されたもの2点（25・26）と1号墓第1主体部から土器（27）と鉄器（F8）が、2号墓西側の流土から土器（28～30）が出土している。

第1支群・第2支群から出土した土器は弥生時代後期後半～庄内併行期に位置づけられるものが大半で、他に古墳時代中期の須恵器と近世の土器がある。

第2節 遺構

1. 第1支群1号墓

斜面を削平して前面がやや開き気味の「コ」字形の平坦面（幅約8m、長さ3m以上）を造成し、平坦面の奥に沿って幅約0.4m、深さ約0.1mの浅い溝を巡らせている。斜面の削平は平坦面より1.5mほど高い位置から2段に行われており、上側はやや緩やかな、下側は急な角度が付けられている。

主体部は3基で平坦面の北東に集中し南西は空白部がある。完存するのは第1主体部のみであり、崖崩れのため、第2主体部は棺の一角が失われ、第3主体部は墓壁の一角が残るにすぎない。第1主体部と第2主体部は長軸を支尾根の主軸に対してはほぼ直交させる。

第1主体部（図版22）

平坦面の南東隅に近いところにあり、周溝を切って平坦面の外に墓壁の一部がはみ出している。墓壁の大きさは長さ2.31m、幅1.1mで、それほど大きなものではない。深さは中央部で約1mあり、第1・第2支群の中では最も深い。断面形は箱形に掘削され、西側が東側よりも約0.05m深い。

棺は木棺で墓壇の上面から約0.65mの深さのところで見出された。検出面では棺の周囲に破砕された土器が撒かれており、接合すると1個体の甕となった(14)が、すべての破片は揃わなかった。土器が撒かれている位置は、北西隅を除く3つの隅と中央部の両脇である。また、この甕の破片は棺内底部中央および棺の裏込めからも若干出土している。

棺の大きさは長さ1.62m、幅は中央部で0.4m、東側が0.1mほど幅狭くなっており、深さは0.25mである。棺内の遺物は先述した甕の破片以外は見られなかった。

第2主体部 (図版21)

第1主体部の斜め前面にあり、平坦面からは東へはみ出すような位置である。墓壇の南西隅がわずかに残存するに過ぎないので、深さが0.5m以上ということ以外は規模など不明である。主軸の方向は第1支群、第2支群の他の主体部と同じく東西方向と考えておきたい。

第3主体部 (図版21)

第1主体部の斜め前面、3基の中で最も平坦面の中央に近いところにある。北東隅から北辺の大半が崖崩れで失われているもの、およその規模は推測できる。

墓壇は長さが2.65m、深さは0.55mあり、幅はおおよそ1.5mと推測される。その南辺には浅く2段に掘り下げられた部分がありつく。東西2.1m、南北0.7mほどの範囲で、深さは1段目が約0.15m、2段目が約0.2mである。

棺は約0.2mの深さで確認することができ、長さ2.05m、幅0.7m、深さは断面図からみて0.4 m以上である。

遺物は棺底近くからヤリガンナ1点(F6)と小片が出土したが、棺内西側というだけで正確な位置は不明である。

2. 第1支群2号墓

1号墓ほど明瞭な平坦面の造成は認められないが、主体部付近の緩やかな傾斜が背後でやや急傾斜に転じること、主体部を囲むように小さな段があるようにも見えることから、簡単な造成はおこなわれた可能性がある。その範囲はおおよそ幅8m、長さ2mほどと考えられる。

主体部は3基でおおむね等高線に平行する東西方向に主軸を向け、千鳥風に配置される。第1主体部と第2主体部は切り合っており、第2主体部のほうが新しい。棺の検出は墓壇を1段掘り下げて行ったが、断面ではいずれも棺が墓壇の検出面まで立ち上がっている。したがって墳丘の流出が推定される。また、やや西に離れた位置に土坑1があるが、本墳墓に伴うものかどうかは不明である。

遺物は表土直下から地山までの20cmほどの間で土器(15~18)が出土した。個々の破片の位置を記録して取り上げたわけではないが、甕(18)はちょうど第1主体部の上あたりから、潰れたような状態で出土している。したがって墓壇内に破砕して供献されたものとは考えにくい。また、墳丘の流出も考慮されることから、上方からの流れ込みとも考えられる。

第1主体部 (図版21)

南東隅から南辺にかけて調査区外に延びる。墓壇の大きさは長さ19mほど、幅は1mほどと推定され

る。深さは0.5m以上である。

棺は長さ1.1 m以上、幅0.43m、深さは墓壇の検出面から測って0.5mである。

遺物は棺の上面から壺底部(16)が出土しているが、先述の壺と同じこの主体部に確実に伴うとは言えないので、2号墓出土土器として扱う。

第2主体部 (図版21)

第1主体部を切っており、南東隅は調査区外に延びる。墓壇の大きさは長さ約2.03m、幅は西端で0.7 m、東側はこれより広く1 mほどと思われる。深さは0.3m以上である。

棺は長さ1.5m、幅約0.5～0.32mで東側が少し幅広いのは1号墓第1主体部と同様である。深さは墓壇の検出面から0.3mである。

墓壇内、棺内とも遺物は出土していない。

第3主体部 (図版21)

第1主体部の前面を少し斜めにずれた位置にあり、ほぼ同程度の規模である。墓壇の大きさは長さ2.1 2m、幅は中央部で0.7mあるが両端はこれより少し狭まっている。残存する深さは0.3m弱で、第1主体部や第2主体部に比べて浅い。これはより斜面下方に近い位置にあるため、土の流出が多かったためと考えられる。

棺は長さ1.7m、幅約0.4mであるがこころもち東側が広い。深さは墓壇の検出面から0.3m弱である。

棺内より鉄製の破片(F7)が出土し、確認調査時にこれと同一個体と思われる破片(F4)と鉄製の鉄製品(F5)が出土している。

土坑1 (写真図版15)

ほぼ円形の土坑で径約1.1m、深さは0.2mある。底は斜面に沿った南北方向は傾斜があるが、東西方向は平坦である。遺物は出土していない。

3. 第2支群1号墓

約20度の傾斜をもつ斜面を削り、幅約3 m、長さ15mほどの範囲を約10度の緩傾斜面になっている。第2支群1号墓のような傾斜のない平坦面ではなく、溝も掘削していないので範囲は不明確である。そのほぼ中央に主軸を等高線に平行させた1墓の主体部がある。

第1主体部 (図版24)

墓壇は長楕円形に近い隅丸の長方形で長さ3.2m、幅1.46m、深さは斜面の上側で0.9m、下側で0.35mである。1段に掘削され、底はほぼ平らである。

木棺は斜面上側の墓壇上面から約0.7mの深さのところ検出した。検出面では棺の周囲に破砕された土器が敷かれており、接合すると1個体の壺となった(27)が、すべての破片は揃わない。土器が敷かれている位置は、棺中央部の両脇と南東隅である。棺の南側の土器は口縁部から体部中央付近までを含む最も大きな破片で、口縁部を上に向けて置かれていた。棺の両脇に最も多くの土器が敷かれていることは、第2支群の1号墓第1主体部と共通する。

なお、断面図を見ると棺の上面と破砕土器の検出面は同一ではない。調査時において棺の平面形を確認できたのは破砕土器が供献された面であるが、実際の棺の上面はこれより10cmほど高い位置にある。これは棺を置いてその半分ほどの高さまで埋めたところで土器の供献が行われたことを示す。

棺は舟底状木棺¹⁾で横断面形は重なる「U」字形である。底には中央部を中心に赤色顔料が塗られている。棺の長さは2.4m、幅は東側が広く0.48m、中央部付近から西端に向かって次第に先細りとなる。しかし、西端についてはこれより少し手前で止まるのを見落とした可能性もある。西側は棺を確認できたレベルから棺底までの深さが浅く、棺の正確な平面形と縦断面形の確認は不十分であった。深さは0.22mである。

棺内には鉄器が副葬され、供献土器の体部破片2点が落ち込んでいた。鉄器は刀子状鉄製品1点(F8)と不明の小片2点である。刀子は棺の南東隅付近、他は中央付近から出土した。

3. 第2支群2号墓

調査区の上端で主体部の一部が確認されたにすぎず、墳丘の造成については不明である。周辺の地形にも何らかの改変を行ったような状況は認めにくい。

主体部は1基で等高線に平行する方向に主軸を向ける。棺の検出は墓壙を1段掘り下げて行ったが、高さを考慮すると少なくとも棺は墓壙の検出面まで立ち上がっている。したがって墳丘の流出が推定される。

遺物は2号墓西側の調査区際で、表土直下から須恵器(29・30)と近世の土器(28)が出土した(写真図版16最下段)。須恵器は他の墳墓の時期から考えて、2号墓に伴うものではなく上方からの流れ込んだものと考えたが、偶然にしては少し不自然な感がある。

第1主体部 (図版23)

南側面から東短辺が調査区外に延びる。墓壙の大きさは長さ1.6m以上、幅0.85m、深さは地山面から0.22mである。

棺は長さ1.1m以上、幅0.34mで、深さは0.1mしか確認できていない。

遺物は出土していない。

4. 第2支群土器棺 (図版23)

1号墓の東側約2.5mのところにある。甕を斜めに寝かせて置き、脚部を取り外した高杯を被せて蓋とする。高杯はほとんど割れていなかったが、甕は口縁部から体部中程にかけての破片が割れて落ち込んでいた。

掘り方は埋土の判別が困難で、地山面に達してかろうじて底のみ確認できた。甕の中には何も残っていないかった。

5. 第2支群土坑

土坑1 (写真図版18)

2号墓第1主体部のちょうど真下あたりにある。付近は等高線の間隔がわずかに広がっている。主軸が等高線に平行する浅い土坑で、長さ1.4m、幅0.6mである。斜面の上層は若干の掘り込みがあるが、

斜面下方側はほとんど掘り込まれていない。主体部の痕跡とも考えられるが、遺物も出土しておらず明確に墳墓と判断できる根拠は無い。

土坑2

2号墓第1主体部の西側約4mのところであり、標高は等しい。一辺1.6mのほぼ正方形を呈する土坑である。棺の痕跡は確認できず、遺物も出土していない。これもやはり墳墓と判断できる根拠は無い。

第3節 遺物

1. 土器 (図版55/写真図版49・50)

出土土器には遺構から出土したものと、そうでないものがある。

【第1支群】

1号墓第1主体部から出土した土器には弥生土器の台付き鉢(13)と甕(14)がある。13は墓壁埋土から出土した台付き鉢の底部であり、1号墓に伴うというより、埋土に混入したものであろう。体部外面はハケの後ヘラミガキを施し、内面はヘラミガキである。14は複合口縁の口縁部外面を横ナデする、いわゆる「ナデ甕」である。棺の周囲に破砕して供献されていたが、すべての破片が揃うわけではなく、体部の約1/5が欠落する。複合口縁部は短くやや内傾してたちあがる。底部は明瞭な平底である。器面の調整は、体部外面がハケ(あるいはナデ)で、内面はケズリである。口縁部内面にはナデを施す。体部外面の下半にはススが付着している。

2号墓周辺から出土した土器には弥生土器の壺(16・18)と鉢(17)、底部の小片(15)がある。既述のように2号墓は墳丘の流出が想定されるので、これらの土器が2号墓と確実に共存するとは言えない。16は壺あるいは鉢の底部でわずかな突出がある。外面はハケの後ヘラミガキで、内面には右回転のハケと中央付近の指頭圧痕がはっきりと残る。17は平底で緩く外反する口縁部を有する鉢である。口縁部外面は横ナデし、体部外面はヘラケズリの後ヘラミガキである。内面はナデ調整する。18は扁球形の体部をもつ壺で、底部は大きく突出し、葉脈と板の痕跡が残る。体部外面(下半)の調整はハケの後ヘラミガキを施すが、上半は不明。内面はハケと思われる。

このほかの第1支群から出土した土器は、1号墓の平坦面流入土あるいは1号墓と2号墓の間の斜面から出土した。したがって、本来は2号墓もしくはより上方の未調査部分から転落したものである。弥生土器の壺(19~22・24)と甕(23)がある。19は直口壺で口縁端部を軽くつまみ上げる。外面はハケ調整で、体部内面はヘラケズリを施す。脚台のつく可能性がある。20は無頸鉢で口縁部に形骸化した2条の腰凹線をめぐらせる。外面の調整は不明であるが、内面は横方向のヘラミガキを施す。外面は赤彩されている可能性がある。22と胎土が類似しており、同一個体の可能性があるが、実測図では口径を少し小さく復元している。同一個体ならばいわゆる「コーヒーカーップ形土器」²⁾となろう。22は把手付きの鉢である。底部は小さく突出する。体部内外面ともヘラミガキを施す。21も22と類似した底部破片である。内面に粘土を充填した跡が観察される。23は甕である。外面の調整は縦ハケ、体部内面はヘラケズリを施す。口縁端部は欠損している可能性があり、まだ上に延びるかもしれない。24は平底の壺底部破片であろう。

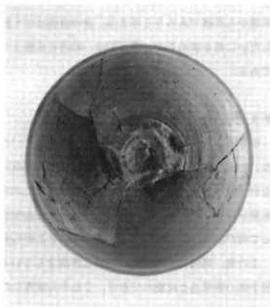
【第2支群】

土器棺に転用されていた土器には弥生土器の高杯(25)と甕(26)がある。25は垂下する後をもつ高杯で、杯下半は直線的で小さく、口縁部は屈曲して外反気味に長く延びる。外面はハケの後ヘラミガキを行い、内面はハケで仕上げる。脚柱部以下を削り取って蓋としている。26は「く」の字状の口縁をもつ甕である。外面はハケ調整し、口縁部を横ナデで仕上げる。内面はヘラケズリを施すが、屈曲部に鋭さはない。底部は丸底気味の尖底である。

1号墓第1主体部出土の土器は棺周囲に破砕して供献された弥生土器の甕1点(27)のみである。27は広口甕で、若干下膨れの体部から外反して口縁部が延び、端部をこころもち上下に拡張させる。底部は尖底であるが、わずかながら平坦部を残す。体部外面の調整はタタキの後ヘラミガキで仕上げるが、中央よりやや下方にはハケメが認められる。口縁部は横ナデする。内面はハケあるいはナデと思われるが、丁寧さはなく粘土粒の接合痕跡が残る。第1支群1号墓第1主体部の甕と同じく、すべての破片は揃わず、口縁部の大半と体部の小片を欠く。

2号墓周辺からは須恵器の高杯(29)・甕(30)と、近世のものと思われる土師器の甕(28)が出土している。須恵器も2号墓に伴うものではないであろう。29は須恵器の有蓋高杯である。脚部は欠損するが、底部に長方形造かしの跡を3カ所とどめる(第2図)。杯身は浅く受け部は斜め上方に延びる。立ち上がりは直線的に延び、端部は内面に面を持つ。底部外面のカキメは、ケズリの範囲とほぼ重なる。30は須恵器の甕である。口縁部は「く」字状に屈曲して外方に短くのびる。底部に鳥の足状のヘラ記号が鋭く刻まれている。28は土師器の小甕である。底部は糸切りをナデ消している。底部の片寄った位置に1カ所、径3mmの穿孔がある。灯明甕であろうか。

これらの土器のうち確実に遺構に伴うものは、第1支群1号墓第1主体部の甕1点(14)、第2支群第1主体部の甕1点(27)、第2支群土器棺の高杯(25)と甕(26)各1点の計4点に過ぎない。このうち14は弥生時代後期後半～庄内併行期まで認められる形態である。底部の状況などから庄内前半期までとしておきたい。25～27は「く」の字状口縁と底部の尖底化、高杯杯部の形態から庄内併行期でも後半であろう。遺構外では16・18が弥生時代後期後半～庄内併行期、その他は弥生時代後期後半(20・22)と庄内併行期(19)などが混在するように見受けられる。また、29はTK47型式に伴行する時期が考えられ、30も同様としておきたい。



第2図 高杯(29)裏面

2. 金属器 (図版60/写真図版56)

すべて主体部に伴うものと考えられる。

F 6 (ヤリガンナ)

第1支群1号墓第3主体部の棺内西半から出土した小型のヤリガンナである。残念ながら詳細な出土位置は不明である。出土時はほぼ完存しており、長さ10.4cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmである。整理作業中に先端部が紛失したため、平面形はX線写真と保存処理前の記録にもとづいて復元した(第3図)が、刃先の断面形まではわからない。基部の断面は破損面で確認すると、少し厚みのある長方形である。木質や布の付着は認められない。

この他、第3主体部棺内からは小鉄片が2点出土しており、1点には平織りの布が付着している。織りの密度は1cm四方あたり6本×6本である。これらはヤリガンナから剥落したものかもしれないが、はっきりとした剥落の痕跡はなかった。

F 4・F 7 (剣)

F 7は第1支群2号墓第3主体部の棺底付近から出土した。両端を大きく欠損する。断面は薄い凸レンズ状である。F 4は確認調査時に出土した破片で、F 7と同じ断面形をしているが少し幅広い。接合しなかったが同一個体とみなしうる。二つを足した長さは8cm以上あり、おそらく20~30cm程度の鉄剣となろう。

F 5 (鎌)

確認調査時ではあるが、F 7・F 4と同じ主体部から出土したと判断できる。形態から鉄鎌であろうと考える。身の断面はごく薄い凸レンズ状、くびれ部からしだいに幅を狭めるが、断面形は一般的な鉄鎌よりも薄い長方形で、特異な形態である。

F 8 (刀子状鉄製品)

第2支群1号墓第1主体部の棺内に副葬されていた鉄製品である。長さ14.5cm、幅1.3cm、厚さ0.2cmである。一端(図面上端)は尖っておらず放物線状に丸みをもっている。もう一端は刀子の先端を思わせるが、刃は無い。出土時には3つに割れていたため、その断面を観察したが全体に薄く、刃縁と背縁の区別がなかった。ゆえに刀子状の鉄製品と呼んでおく。丸みがあるほうの側の一側縁には約6.5cmにわたって布が回り込むように付着しており、そこから少し間をおいて細い糸が密に巻かれている。

この他、同棺内からは小鉄片が2片出土している。剥落した破片のようなものであるが、出土位置は刀子状の鉄製品とは離れており、これから剥落したものではない。



第3図 金属器
(F 6) X線写真

註 1) 石崎善久「舟底状木棺考-丹後の剣状式木棺」『京都府埋蔵文化財論集』第4集(2001):P.67~78

2) 肥後弘幸「コーヒーカップ形土器器考」『京都府埋蔵文化財論集』第4集(2001):P.115~122

第4節 小結

大谷墳墓群第1支群・第2支群は弥生時代後期後半～庄内併行期に営まれた小規模な墳墓群である。至近距離にある第1支群と第2支群で調査した4基の墳墓は、いずれも木棺直葬の主体部をもつものであるが、それぞれ少しずつ様相が異なる。4基のうち全容を知りうることは第2支群1号墓しかなく、限られた条件の中であるが比較をしておきたい。表1にはそれぞれの主体部の一覧表を示す。

まず、墳丘に関しては、第1支群1号墓のみが地山整形の明確な平坦面を造成し、溝を巡らせるのに対して、他の墳丘は不明瞭である。但馬地域の弥生墳墓では尾根を直線的な溝あるいは段差で区画して、墳丘とする例が多く見受けられる。第1支群1号墓のように「コ」字形とする例は少なく、立石墳墓群や妙楽寺墳墓群などでは尾根後縁から外れた斜面地に造成された墳墓に認められるようである。第1支群1号墓でも尾根後縁は曖昧であり、地形の状況によって造成の方法を違えるのであろう。

主体部はほとんどが箱形木棺と思われたが、第2支群1号墓の1例だけ舟底状木棺であった。唯一、棺底に赤色顔料が認められたこと、単独埋葬であることなど、幾つかの相違点はあるが、他の主体部と隔絶した差は無い。

副葬品に関しては、第1支群1号墓第3主体がヤリガンナ、同2号墓第3主体が鉄剣、第2支群1号墓第1主体が刀子状鉄製品とごく少量の鉄製品を分有する。特定主体部への集中は認められない。

墓域内破砕土器供献は第1支群1号墓第1主体と第2支群1号墓第1主体で行われており、これも調査した中では特定の墳墓に集中することは無い。また、第1支群2号墓周辺で出土した土器や1号墓平坦面流入土から出土した土器の残存率からみて、破砕土器以外の供献をした墳墓が調査区外に存在するのかもしれない。

以上のように、大谷墳墓群第1支群、第2支群で発見された4基の墳墓は、わずかな相違点を持ちつつも特にどれかが突出することがない。互いの関係はほぼ対等であったと言える。また、地山成形による墳丘造成、舟底状木棺の存在、墓域内破砕土器供献、鉄製品の副葬など但馬・丹後地域の弥生墳墓の特色を顕著に認めることができる。

これらの墳墓の築造順序については、土器の検討から、第1支群→第2支群1号墓と土器棺という関係が成り立つ。

表1 大谷墳墓群第1・2支群 概要表 ()は残存値

支群	墳丘	墓槽の規模 (m)			単の規模 (m)			副葬品	備考		
		主体部	長さ	幅	深さ	長さ	幅			深さ	
第1支群	1号墓	地山を掘り出して平坦面を造成し、溝を巡らせる	第1主体部	2.31	1.10	1.00	1.82	0.46~0.36	0.25	棺蓋面に破砕土器供献(美)	
			第2主体部			(0.50)					
			第3主体部	2.65	(1.20)	0.55	2.65	0.70	(0.40)	ヤリガンナ	
	2号墓	不明瞭	第1主体部	(1.87)	(0.90)	(0.50)	(1.1)	0.43	(0.50)		
			第2主体部	2.03	0.70~0.84	(0.30)	1.50	(0.5)	~0.32	(0.30)	
			第3主体部	2.12	0.54~0.70	(0.28)	1.70	0.42~0.40	(0.28)	鉄剣・鉄鏡	
第2支群	1号墓	緩やかな平坦面を造成	第1主体部	3.20	1.46	0.9~0.35	2.40	0.48~0.30	0.22	刀子状鉄製品 舟底状木棺・棺底に赤色顔料・棺蓋面に破砕土器供献(美)	
	2号墓	不明瞭	第1主体部	(1.60)	0.85	(0.22)	(1.10)	0.34	(0.10)		
	土器棺								美を身とし、高坏で蓋をする		

第5章 大谷墳墓群 第3支群

第1節 概要

平成4年度の確認調査を実施した際にC地点・D地点とされた箇所について、平成5年度に全面調査を実施した。

C地区においては墳墓を築いたような平坦面や埋葬主体などの遺構は検出できなかった。土器などの遺物もほとんど出土していないが、表土内から耳環が1点出土している（F15）。

D地区においては4基の墓を検出し、全面調査終了後には名称を「大谷墳墓群 第3支群」とした。検出した墓は、北側から順に1～4号墓とした。1・2・4号墓はいずれも尾根筋を削平して平坦面を作り出し、平坦面上に埋葬主体（箱形木棺墓）を築いている。埋葬主体の数は1号墓が1基、2号墓が4基で、4号墓は少なくとも2基以上存在している。これに対し3号墳は傾斜地に箱形木棺墓1基を設けたのみという簡素なものであった。

1号墓は尾根の先端に立地し、第3支群のなかで最も北側に位置する。標高は約13.5mである。尾根の先端をカットして平坦面を作り出している。平坦面背後の斜面の法尻に最大幅0.85mの溝を掘削し、墓域の境界としている。また、この溝とは別に、半円形のプランで平坦面を取り囲む最大幅0.35mの溝が、その内側に掘られている。1号墓に配された埋葬主体は、箱形木棺墓1基のみである。

2号墓は尾根の中央部に位置し、標高は約15.5mである。1号墓と同じく尾根筋を削平して平坦面を作り出し、そこに4基の木棺墓を配している。平坦面背後の斜面の法尻に溝を掘削し墓域の境界としている。溝のプランは直線的である。

3号墓は尾根の西側斜面上に位置し、標高約16.5mである。他の墓とは異なり平坦な墓域を持たない墓である。木棺墓を1基設置しており、その主軸は等高線の方角と一致している。

4号墓は第3支群において最も南に位置し、標高は約18.5mである。尾根をカットして平坦面を作り出し、そこに2基の木棺墓を配している。4号墓の平坦面は調査区外までひろがっているため、主体部の数はさらに増える可能性がある。

第2節 遺構

1. 1号墓（図版30上）

尾根の先端を平らに削平して築いた墓で、標高は約13.5mである。規模は尾根筋方向の北西—南東方向が約4.5m、尾根筋に直行する北東—南西方向が約8mである。1号墓上に半円形のプランで最大幅0.35mの溝が掘られている。また平坦面と斜面の境目には最大幅0.85mの溝が掘られ、墓域の外郭を区画している。

第1主体部（図版31）

1号墓に設けられた唯一の主体部で、テラス状に整地された墓域の西側縁辺付近に配置された木棺墓である。墓の平面形はほぼ長方形で、規模は長さ2.95m、幅1.49m、深さは0.76mである。木棺は箱形木棺で規模は長さ1.94m、幅0.43mである。木棺の小口の幅は北側の方がやや広い。被葬者は北向きで頭位で埋葬されたと考えられる。床面上においては木棺の構造を示す小口板や側板等の痕跡は認め

られなかった。木棺内の床面上で鉄釘（F9）および弥生土器片（33）を検出した。

2. 2号墓（図版33上）

1号墓の南東側に近接しており、尾根筋を平らに削平して築かれている。標高は約15.5mである。規模は尾根筋方向の北西—南東方向が7.5m、尾根筋に直行する北東—南西方向が約8.5mである。平坦面と斜面との境目には幅約1mの溝を掘削し、墓域の内外を区画している。2号墓には木棺墓が4基存在する。

第1主体部（図版34）

テラス状に整地された2号墓の最も南側に配置された木棺墓である。墓域の平面形は隅丸の台形状を呈しており、規模は長さ2.40m、幅1.92mで、深さは1.30mである。木棺は箱形木棺が用いられており、その規模は長さ1.50m、幅0.63mである。被葬者は木棺幅の広い方の北東側頭位で埋葬されたものと考えられる。床面上においては木棺の小口板や側板の痕跡は認められなかった。墓域内で鉄鏃（F10）、ヤリガンナ（F11）および弥生土器片（34）が出土した。

また墓域南東隅に隣接した墓域外の旧地表面において破砕土器群を検出した（図版33下）。土器群は弥生時代後期後葉の土器で構成されているが、完形の状態では検出できたものは一点もなく、すべての遺物が細かく破砕された状態で検出した。隣接する破片が必ずしも接合しないこと、および破片をすべて接合しても完形に復元できない遺物が多く、破片が遠距離まで飛び散っている状況が想定される事等から、これらの土器群は、完形の状態では検出された土器が土圧で破壊されたのではなく、2号墳の被葬者の埋葬終了時に土器を破砕したものと考えたい。器種構成は大半が器台であり、その他に少量の高杯が含まれる。

第2主体部（図版35）

2号墓内の最も北側に配置された木棺墓である。墓域のみ検出したが木棺のプランは検出できなかった。墓域の平面形は隅丸長方形で、規模は長さ2.15m、幅1.18m、深さは0.55mである。

第3主体部（図版35）

2号墓内において最も尾根の先端に近い位置に配置された木棺墓で、第1・2主体部と比べてやや小型である。墓域のみ検出したが木棺のプランは検出できなかった。墓域の平面形は隅丸長方形で、規模は長さ1.40m、幅0.81m、深さは0.35mである。墓域内で鉄鏃（F12）が出土している。

第4主体部（図版35）

2号墓の最奥部に位置しており、4基の主体部の中で最も規模の小さな主体部である。長さ1.22m、幅0.73mと小規模な墓域にもかかわらず、旧地表面からの深さが1.17mと非常に深いことが特色で、実際作業員が掘削作業を行うのも困難なほどであった。平面形は不定形であるが床面が整った長方形を呈していることから、元来は長方形を志向しておきながら、地形条件等の影響で歪みが生じたものと考えられる。墓域内でヤリガンナ（F13）および弥生土器片（35）が出土した。

3. 3号墓 (図版30中)

大谷墳墓群第3支群が立地する丘陵の南西側斜面に位置する木棺墓で、標高約16.5mである。他の墓とは異なり、尾根筋ではなく斜面に立地している。また他の墓のように大規模な平坦地を造りだして墓域とすることはなく、傾斜の緩い位置に木棺墓1基をなんとか納めたというような状況である。墓域の主軸をほぼ南北方向に置いているが、これはほぼ等高線の方角と一致しており、なるべく傾斜が緩く墓域を掘削しやすい場所を選んだ結果であると考えられる。墓域を検出したものの木棺の痕跡は認められなかった。

4. 4号墓 (図版30下)

調査範囲内において最も南側で、かつ最も標高の高い場所に位置する墓である。標高は約18.5mである。1号墓・2号墓と同様に尾根筋を削平し、テラス状に整地して墓域としたものである。調査は4号墓の北半部のみを調査し、残りの部分は南側の調査対象範囲外に広がっている。従って今回検出した2基の主体部の他にも主体部が存在する可能性がある。

第1主体部 (図版32)

東西並ぶように2基検出した木棺墓のうち、東側に位置する箱形木棺墓である。主体部の南東隅は調査対象範囲外に広がっている。墓域の平面形は隅丸の方形を呈しているが、その規模は長さ2.95m、幅1.62mで、検出面からの深さは0.45mである。木棺の痕跡はほぼ方形を呈していることから箱形木棺が用いられたと考えられるが、その規模は長さ2.02m、幅0.78mである。

第2主体部 (図版32)

第1主体部の西側に隣接している。墓域のみ検出したが木棺のプランは検出できなかった。墓域の平面形は隅丸長方形で、規模は長さ2.50m、幅1.25m、検出面からの深さは約0.6mである。墓域内で鉄鏝(F14)が出土している。

第3節 遺物

1. 土器 (図版56 / 写真図版51・52)

【確認調査】

31 (弥生土器/高杯)

第3支群確認調査時のトレンチで出土した土器である。小型高杯の脚部片である。成形方法については、脚部から杯部にかけて粘土紐を連続的に積み上げて一体的に成形し、その後で底部の部分に粘土を充填しているようである。器表面は縦方向のヘラミガキで調整している。

32 (須恵器/杯)

確認調査時に出土した須恵器である。底部は平底で裏面はヘラ切りのナデ調整が施される。体部は内湾しており、器表面は内外面とも回転ナデで仕上げられる。

【1号墓】

33 (弥生土器/甕)

第1主体部の木棺内で出土した甕である。口縁部は複合口縁形を呈し、口縁端部はやや外反している。口縁端部の外面には縦凹線による文様帯は存在しない。長胴形の体部の外面は、タタキで成形された後、ハケで仕上げ調整されている。体部内面は横方向にヘラケズリされている。

弥生時代後期の但馬における複合口縁を持つ甕の口縁端部外面には、縦凹線による文様帯が施されるが、この土器の口縁端部に縦凹線は認められずヨコナデ調整されている。したがって縦凹線が消滅していく弥生時代後期後葉というよりむしろ終末期の土器である。

【2号墓】

34 (弥生土器/甕)

第1主体部で出土した甕である。口縁部は複合口縁形を呈しているがその端部は直立し、高さも33の口縁端部の倍以上高いことから、在地系というよりむしろ山陰系の土器と考えられる。口縁端部の外面に縦凹線は認められないことから、弥生後期終末期の土器と考えられる。長胴形の体部の外面はタタキにより成形され、胴部上半部にタタキ痕が認められる。体部の中位から下半部にかけては縦方向のハケメによりタタキ痕は消されている。体部内面の上半部は横方向に、下半部は縦方向にヘラケズリされている。

35 (弥生土器/甕)

1m以上の深さがある第4主体部で出土した甕である。口縁部は複合口縁形を呈しているがその端部は直立し、外面に縦凹線による文様帯は施されない。口縁部は内外面とも横方向のヘラミガキで調整されている。体部は長胴形であるが、その外面は縦方向のヘラミガキで仕上げられ、体部内面はヘラケズリされ器壁が薄くなるように仕上げられている。

【2号墓 破砕土器群】

36 (弥生土器/高杯)

碗形の杯部の上に複合口縁形の口縁部が付く。口縁部は外側に開く形態を呈しており、その外面には縦凹線が1条めぐらされている。器表面の調整は内外面ともヨコナデである。杯部は上半部が丸みを帯びているが下半部の輪郭は直線的である。器表面の調整は内外面とも上半部が横方向のヘラミガキが施され、下半部は縦方向のヘラミガキにより脚部と一連の調整が施されている。脚部は別製に作られた杯部の下に接合するようにつけられている。その形態は杯部の直下から徐々に開き初め、裾部では杯部と同程度の直径になるまで開いている。器表面の調整は外面には縦方向のヘラミガキ、内面は下半部を中心にハケメで仕上げられている。脚部の中位に円孔が存在するが、その配置された間隔から円孔は4箇所あけられたと考えられる。

37 (弥生土器/高杯)

36と較べ小型の高杯である。杯部と脚の接合部の破片で、碗形の杯の底部に裾広がりの脚部がつけられる。脚部の表面調整は外面が縦方向のヘラミガキで、内面はヨコハケである。

38 (弥生土器/器台)

口縁部は受部の上につけられている。その断面形は直立気味であるがやや外反している。口縁部の外側面には2条ないし3条の擬凹線がめぐらされている。器表面の調整は横方向のヘラミガキが施されている。受部も直線的であるがやや外反している。器表面の調整は内外面ともヘラミガキが施される。脚部の形態は短い脚柱部から裾部に向かって徐々に広がっていく。脚部の器表面の調整は外面が縦方向のヘラミガキが施され、内面は上半部がヘラケズリ、裾部周辺は横方向のハケメが施されている。

外面に施されたヘラミガキは口縁直下から裾部にいたるまで一続きに施されており、受部と脚部が一体になるように仕上げられている。

39 (弥生土器/器台)

38と同様、幅の広い口縁に擬凹線がめぐらされるタイプの器台である。脚部と受部まで復原できたが口縁部の破片は検出できなかった。受部の形態は直線的で、その上方に口縁部が続く。脚部の形態は細く短い脚柱部から裾部に向かって徐々に広がっていく。器表面の調整は、外面は縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面は横方向のヘラケズリを施している。

40 (弥生土器/器台)

38・39とはほぼ同様の形態の器台であるが口縁部の作り方が38と異なっている。38の口縁部は、製作段階において、受部の上端よりもさらに上に幅広い口縁を、粘土粗を載せることにより成形されているようである。しかしこの器台に関してはそればかりではなく、受部の下方まで粘土を足して口縁部を垂下させ、口縁全体を拡張させて端部に幅広い文様帯を形成させている。このように拡張された文様帯に描かれた文様は上下2条ずつの擬凹線、およびそれらの間の粗い波状文により構成されている。口縁部の形態については38の器台と較べて外反の度合いがより強くなっており、文様帯の施文と合わせて口縁部がより目立つような形態と言える。

また38の器台と較べて受部と口縁部の境界部の屈曲は強くない、むしろ受部から口縁部までをひと続きに成形し、口縁部を垂下させることにより受部と口縁部の境界を際立たせている。口縁部の器表面の素地は内外面とも横方向のヘラミガキで調整されている。

受部は直線的であるがやや曲線的に外反している。受部から脚柱部にかけての器表面は縦方向のヘラミガキで調整している。外面に施されたヘラミガキは口縁直下から脚柱部にいたるまで一続きに施されており、受部と脚部が一体になるように仕上げられている。

41 (弥生土器/高杯)

小型高杯の脚部の破片である。形態的には脚柱部から裾部にかけて緩やかな広がりを見せている。脚柱部は中実で細く仕上げられている。器表面の調整は外面が全面的に縦方向のヘラミガキが施される。

42 (弥生土器/器台)

口縁部部の外面に6条の擬凹線が巡らされている。口縁部は40の器台よりもさらに外反の度合いが強い。40の器台のように口縁部を垂下させるというように極端に口縁部を拡張させた痕跡は認められない。しかし口縁部下端と受部上端の間は明瞭な稜線が形成されており、口縁部の端面を文様帯として

際立たせるよう成形されている。また40の器台と同様、受部と口縁部の境界部の屈曲は強くない。

受部は直線的であるがやや曲線的に外反している。受部から脚柱部にかけての器表面は縦方向のヘラミガキで調整している。また脚部には円孔があげられているが、その配置間隔から当初は3箇所の円孔があげられていたものと考えられる。また受部から脚部にかけて器表面は縦方向のヘラミガキが施されている。外面に施されたヘラミガキは口縁直下から裾部に至るまで一続きに施されており、受部と脚部が一体になるように仕上げられている。

43 (弥生土器／器台)

器台の脚部の破片である。口縁部までは復元できなかったが、脚部の形態および器表面の調整方法から38と同様の口縁部を持つ器台と考えられる。

脚柱部から裾部にかけて、器表面の外面には縦方向のヘラミガキが施され脚柱部から裾部に至るまで一体となるように仕上げられている。また脚部には円孔があげられているが、その配置間隔から当初は4箇所の円孔があげられていたものと考えられる。

44 (弥生土器／器台)

口縁部の破片で、受部から脚部までの復元はできなかった。口縁部の形態については、他の器台と比べて受部との境界が不明瞭な点が特徴である。口縁部の下端を三角形に肥厚させることにより受部との境界としている。口縁部の外側面には特に文様や擬凹線等は描かれていない。口縁部の器表面は横方向のヘラミガキが施されている。

45 (弥生土器／高杯)

高杯の杯部のみの破片で、脚部までは復元できなかった。杯部は丸味を帯びた椀形を呈している。器表面の調整は、外面は横方向のヘラミガキが施された後に斜め方向のヘラミガキで仕上げられる。内面は横方向のハケメで調整される。

46 (弥生土器／高杯)

高杯の杯部のみの破片である。口縁部は短く直立し、底部にかけて緩いカーブを描いている。器表面の調整は内外面ともヘラミガキが施されている。

【包含層】

47 (弥生土器／甕)

甕の口縁部の破片である。4号墳の表土内で出土した。複合口縁を呈しており口縁部の外側面には2条の擬凹線がめぐらされている。

48 (弥生土器／甕)

甕の口縁部の破片である。2号墳の表土内で出土した。口縁部の外側面には1条の擬凹線がめぐらされている。

49 (弥生土器/甕)

2号墳周辺の表土内で出土した甕で、口縁部から体部の破片である。口縁部はやや外反し口縁部外面には2条ないし3条の縦凹線がめぐらされている。器表面の調整は外面をヨコナデで仕上げ、内面は頸部にかけて一体的に横方向のヘラミガキを施している。頸部の外面も横方向のヘラミガキで仕上げている。

体部は球形よりもやや扁平な形態を呈しており、体部上半部はやや直線的な輪郭を呈している。体部器表面の調整は、頸部から体部上半部を斜め方向のヘラミガキ、体部中位は横方向のヘラミガキ、下半部は斜め方向のヘラミガキで仕上げている。体部内面はヘラケズリの跡は見られず、指頭痕跡が多数残されている状況である。

50 (弥生土器/甕)

甕の口縁部の破片である。4号墳と2号墳間の斜面の表土中で出土した。球形の体部に外反する口縁部がつく。口縁部の器表面の調整は、外面は指オサエで整形した後に縦ハケで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げている。体部の器表面は横方向のハケメで調整し、内面はヘラケズリで仕上げている。

51 (弥生土器/甕)

口縁部から体部中位までの破片である。4号墳と2号墳間の斜面の表土中で出土した。球形の体部に外反する口縁部がつく。口縁部の器表面の調整は、外面は指オサエで整形した後に縦ハケで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げている。体部の器表面は横方向のハケメで調整し、内面はヘラケズリを施した後ヨコハケで仕上げている。

52 (弥生土器/高杯)

高杯の底部から脚柱部にかけての破片である。4号墳の表土中で出土した。36と同型の高杯であると考えられる。杯部は底部の中央のみ残っており、底部は丸底で、その下に筒形の脚柱部がつけられる。脚柱部の器表面は縦方向のヘラミガキで仕上げられている。

53 (弥生土器/高杯)

小型高杯の脚柱部の破片である。2号墳周辺の表土内で出土した。

54 (弥生土器/高杯)

4号墳の表土内で検出した。36と同じ形態の高杯で脚柱部の破片である。脚柱部の上端に杯底部の破片が残されている。形態的には脚柱部から器部にかけて徐々に輪郭が広がっていく。器表面の調整は外面には縦方向のヘラミガキ、内面は下半部を中心にハケメで仕上げられている。脚柱部に円孔はあけられていない。

55 (弥生土器/器台)

口縁部の破片であるが、40の器台と同様の形態のものであると考えられる。外面には施文の痕跡が見られるが、その構成要素は口縁端部に2段の竹管文が施され、その下に波状文が接するように施されている。

56 (弥生土器/器台)

器台の脚部部の破片である。直線的な輪郭を呈している。器表面の調整は外面が縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを呈している。

57 (須恵器/杯蓋)

4号墳の表土内で検出した。体部と天井部の境界は明瞭ではない。器表面の調整は体部が回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリである。

2. 金属器 (図版60/写真図版56)

【1号器】

F 9 (釘)

第1主体部で出土した。断面が方形の釘が6本束ねられ、サビにより固着したものである。釘の長さが12.0~8.5cm、幅は1.0~0.3cmとまちまちであるが、厚さは0.5~0.3cmと比較的均質である。背面には棺材が固着していた。

【2号器】

F 10 (鏃)

第1主体部で出土した柳葉形の鏃である。鏃身部はサビが付着していたため鏃の状況は明瞭ではなかった。鏃身部の全長は6.1cmで、幅は2.0cmである。茎は断面が方形で幅0.5cm、厚さ0.3cmである。基部には木質が残存していた。

F 11 (ヤリガンナ)

第1主体部で出土した。全面的にサビに覆われていたため刃部の状況等は不明である。全長9.8cm、幅1.1cm、厚さは0.4cmである。

F 12 (鏃)

第3主体部で出土した柳葉形の鏃である。断面図に現れるように明瞭な鏃が存在するようであるが、全身を覆ったサビのためその状況は不明瞭である。鏃身部の大きさは長さ6.5cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmである。基部は断面が方形を呈しているがその規模は幅0.6cm、幅0.5cmである。茎には木質が付着している。

F 13 (ヤリガンナ)

第4主体部で出土した。刃先と身部の破片からなる。両者は接合することはないが、同一の主体部内の極めて近接した位置で出土し、幅1cm前後で、厚さ0.4と双方とも類似しているため、同一個体であると判断した。全体的にサビに覆われていたため刃先の状況は不明である。しかし刃部の断面形が「へ」の字形を呈しており、柄に近い箇所の断面形は長方形を呈していることから、刃部を形成する際にまず、当初は長方形であった刃部の断面径をへの字に曲げ、その後、刃先を研ぎ出して刃を形成したものと考えられる。

【4号墓】

F14 (鉄)

第2主体部で出土した柳葉形の鏝である。鏝身部の後端部と茎は欠損していた。全体的にサビに覆われているため鏝など表面の状況は不明瞭である。幅2.4cm、厚さ0.7cmである。

【C地点】

F15 (耳環)

C地点の北向き斜面で検出した銅製の耳環である。銅芯に金箔を巻いたものである。長径3.2cm、短径2.9cm、厚さ0.8cmである。

第4節 小結

今回の調査では、大谷墳墓群第3支群において4基の墓を検出した。4基の墓のうち、1・2・4号墓は、尾根の稜線を削平して比較的広い平坦面を作り出しており、埋葬主体はすべて箱形木棺墓である。1号墓はこのような平坦面を造成しているにもかかわらず主体部は1基しか築かれない。これに対して2号墓は4基、4号墓は少なくとも2基と、いずれも複数の主体部が存在する。

これに対し3号墓は斜面を平坦に整地することなく、箱形木棺を1基のみ埋葬している。3号墓の木棺は主軸を等高線と平行方向に向けているが、これは木棺を埋納するにあたっての掘削土量を最低限に抑え、なるべく労力をかけずに埋葬を行おうとした結果と推測される。

1・2・4号墓が築造されたのはいずれも弥生時代後期の終末段階と考えられる。各主体部間の築造時期の前後関係は、出土遺物が少ないため明瞭な結論は出せない。また3号墓についても出土遺物が存在しないため築造時期は不詳である。

副葬品は土器と鉄器（鏝とヤリガンナ）であるが、出土量は非常に少ない。主体部内に土器が副葬されたのは1号墓第1主体部・2号墓第1主体部・2号墓第3主体部のみである。また鉄器は1号墓第1主体部・2号墓第1主体部・2号墓第3主体部・2号墓第4主体部・4号墓第2主体部で検出した。

2号墓の南東隅において破砕土器群を検出した。土器群は弥生時代後期後葉の土器で構成されているが、すべての遺物が細かく破砕された状態で検出した。これらの土器群は、完形の状態で供献されたのではなく、埋葬時に土器を破砕したものと考えられる。器種構成は大平が器台であり、その他に少量の高杯が含まれる。

「C地点」において、表土内で須恵器と耳環が出土している。これらのうち須恵器は6世紀後半の所産と考えられるが、今回の調査区内には後期古墳はもちろん6～7世紀頃の遺構は存在しない。したがって今回の調査区よりもさらに標高の高い場所に未知の後期古墳が存在し、そこからC地点まで耳環と須恵器が流入してきたものと推測される。

第6章 坪井遺跡

第1節 概要

当遺跡は、全面調査時には「此隅山城跡」、平成7年度年報においては「北山墳墓群」とされた遺跡である。正式な名称については、平成11年度に兵庫県教育委員会が刊行した「兵庫県遺跡地図（発掘調査の手引・遺跡地名表）」にあわせる形で「坪井遺跡」とした。

遺跡が立地するのは、入佐川を見下ろす丘陵の背部および南側斜面である。この丘陵は粒径の粗い花崗岩から成り立っているため極めて水はけがよく、発掘調査中に大雨に見舞われた後も、排水作業をする必要が全くないほどであった。このような調査地において「西区」では主として城郭の曲輪と考えられる盛土の痕跡を検出し、「東区」では3対の遺体が埋葬された箱形石棺を中心とする墳墓を検出した（図版41参照）。

「西区」は確認調査における1トレンチにあたる。確認調査において盛土により作り出された平坦面を検出している。この尾根は東側へ伸び、「下坂」の畔をはさんで此隅山城から続いてくる尾根の先端に位置していることから、この盛土も此隅山城期のものであると想定される。また西区ではこれとは別に、盛土の下層の地山面において古墳時代の木棺墓を1基検出した。

「東区」においては地山面において3基の墳墓を検出し、計8基の木棺墓と石棺墓1基を検出した。またこの他に木棺墓1基が調査範囲外に存在する状況を確認し、都合10基の埋葬主体を確認した。

3基の墳墓は調査地の地形状況から判断して3つにグループ分けした（図版41）。すなわち東区の西端にある尾根筋に位置する木棺墓群を1号墓、東区の東端にある尾根筋に位置する石棺墓および木棺墓群を2号墓とした。またその中央に位置し、どちらの尾根にも属さない木棺墓を3号墓とした。

1号墓では4基の木棺墓を検出した。また1基の木棺墓の存在を確認した（1号墓第3主体部）が、この木棺はほぼ端部を確認したのみで、ほぼ全城が調査区外に広がっていることを確認した。

2号墓では1基の石棺墓と3基の木棺墓を検出した。石棺墓では埋葬人骨3体を検出した。この埋葬人骨に関しては、本報告書のために九州大学大学院の田中良之教授から玉編を賜った（第7章「坪井遺跡2号墓第1主体部出土人骨」）。埋葬人骨の詳細についてはこちらを参照されたい。

3号墓では木棺墓1基を検出した。

墳墓の築造のための盛土は一切おこなわず、すべて切り土により造成されている。1号墓および2号墓のいずれにおいても、尾根筋だけに最低限の面積の平坦面を作り、傾斜地には平坦面を作りさえしないなど、大規模な地形改変は行われない。このように墓域設定のための労力を最低限に抑える意図が感じられる。特に2号墓第3主体部では、当初は長方形を志向した墓域のプランが、地形に影響されてきれいな長方形を為しえないという状況が認められたが、このことも墓域区画のための労力を節約したいという意図が感じさせる。

副葬品は極めて少なく、箱形石棺墓である2号墓第1主体部の墓室内にて鉄製ヤリガンナが2点出土しただけである。これとは別に、2号墓第2主体部の床面および検出面付近において出土した土師器の壺と、2号墓第3主体部の木棺内で検出した、土師器と考えられる土師器の甕が主な出土遺物であり、須恵器は一切伴っていない。

第2節 遺構

I 西区

1. 曲輪状平坦面

確認調査において検出した「平坦面」を、全面調査においても改めて検出し直した。この平坦面は盛土により作り出されている。図版39に示した土層断面図のうち、盛土の状況が観察しやすかったのは東西セクションである。この東西セクションにおける16～17層を平坦部の縁辺に盛って堤のような構造にしており、その内側に2～15層の土を順に盛っていったものと考えられる。

南北セクションを設置した斜面はあまりにも傾斜が急であったため盛土等がかなり流出したものと考えられる。

2. 木棺墓

第1主体部（図版40）

ほぼ東西方向を向いた木棺墓で、木棺幅から東向き顔位と考えられる。墓壇の平面形は隅丸長方形で、規模は長さ2.02m、幅0.74mである。木棺は長さ1.52m、幅0.36mの長方形で、箱形木棺が使用されたものと考えられる。副葬品等の出土遺物は認められなかった。

II 東区

1. 1号墓（図版41）

東区において西側の尾根上に位置する一葬を1号墓とした。

第1主体部（図版42）

丘陵頂上付近のほぼ平坦な場所に位置する木棺墓である。主体部の北半分は調査区外に延びている。墓壇の平面形は長方形で、幅は2.7mである。木棺の平面形も長方形で、幅は0.43mである。箱形木棺が用いられたと考えられる。副葬品等の出土遺物は認められなかった。

第2主体部（図版43）

第1主体部の東側の尾根筋に位置する木棺墓である。墓壇の平面形は長方形に近い台形である。墓壇の規模は長さ2.8mで、幅は1.5mである。木棺は長さ1.8m、幅0.48mの長方形を呈している。主体部検出面を精査した際、表層においては木棺痕跡を實際よりひとまわり大きめに検出したが、墓壇床面付近において木棺の正確なプランを検出した。ひとまわり大きめに検出したのは、腐食した木棺の棺材の痕跡を、木棺のプランとして捉えたことによる。従って図版43の平面図において、墓壇内に木棺があたかも2基切り合っているかのような図になっているが、実際の本棺は内側の小さい長方形の掘方に相当する。木棺部の床面が平らである事から判断して箱形木棺が用いられたと考えられるが、小口板や側板等の痕跡は認められなかった。副葬品等の出土遺物は認められなかった。

第3主体部

第2主体部の尾根筋に位置している。この主体部はほぼ端部を確認したのみで、ほぼ全域が調査区外に広がっていることを確認した。

第4主体部 (図版44)

第4主体部と第5主体部は南向きの急傾斜地に位置する木棺墓である。墓壙を検出したものの、木棺の痕跡を検出することはできなかった。墓壙の平面形は不定形で床面は平らであることから箱形木棺が用いられたと考えられる。規模は長さが2.36m、幅は1.05mである。副葬品等の出土遺物は認められなかった。

第5主体部 (図版44)

墓壙を検出したものの、木棺の痕跡を検出することはできなかった。墓壙の規模は不定形である。規模は長さが2.62m、幅は1.07mである。副葬品等の出土遺物は認められなかった。

2. 2号墓 (図版41)

東区において東側の尾根上に位置する一群を2号墓とした。

第1主体部 (図版45~48)

この遺跡において唯一の箱形石棺墓である。尾根上で標高の最も高い位置に築かれている。石棺を納めた墓壙は、東西方向を主軸とする台形を呈している。小口の幅は東よりも西側のほうが広くとられている。その規模は長さ3.01m、最大幅1.95m、深さ1.27mの素掘りの土坑である。

石棺の規模は長さ2.22m、幅0.62mで、石棺の幅に対する長さの比は3.58である。石棺の内法は長さ1.75m、幅0.42mである。石材は在地の石材である「除石（かげいし）」が用いられている。除石とは流紋岩質凝灰岩の俗称で、出石町の北側に隣接する豊岡市の上除付近にて産出することからこの名称で呼ばれる。除石は軟らかく板状に割れる性格があるため、この石棺に用いられた石材はすべて厚さが均質で、石棺材の端面も平滑に仕上げられている。また石材の端面が平滑に仕上げられているうえ、石棺自体も隙間ができないよう丁寧に構築されていた。このため石棺内部には土砂の流入がほとんど認められなかった。

蓋石は4枚の板石で構成され、それぞれを隙間ができないように並べられている。各々の石棺の継ぎ目は3箇所あるが、それぞれに小型の板石を載せて隙間を塞いでいる。

長側石はいずれも4枚の板石を平置きしているが、粘土などによる目張りの痕跡は認められなかった。長側石の石材は最大のもので長さ0.57cm、幅0.25cm、厚さ0.10cm、最小のものは長さ0.32cm、幅0.20cm、厚さ0.08cmである。

小口、すなわち短側石は長側石の端部にはさまれるように組み合わせられ、日字形を呈している。小口の幅は西側が0.43m、東側が0.32mと西側が広い。さらに東側の小口は二枚の短側石で作られている。また西側小口付近の床面に六角形の石枕が配置されている。枕の規模は最大幅0.32m、厚さは0.04mで、石棺と同じく除石で作られたとみられる。床面には底石は設置されないが、粒径の粗い砂を一面に敷き詰めることにより棺床としている。

出土遺物は土師器壺(58)の他、鉄製ヤリガンナ2点が出土している。

第1主体部 埋葬人骨(図版47~48)

第1主体部において3体の埋葬人骨を検出した。この埋葬人骨に関しては、本報告書のために田中良之教授から玉稿を賜った(第7章「坪井遺跡2号墓第1主体部出土人骨」)。埋葬人骨の詳細についてはこちらを参照されたい。ここでは埋葬人骨検出状況の概要を示すが、人骨そのものに関する記述はすべて田中教授にご指導いただいた結果をまとめたものであることをお断りしておきたい。

埋葬人骨のうち2体は西側頭位、1体が東側頭位で埋葬されていた。西側頭位で埋葬された人骨2体のうち、南側に位置する遺体を1号人骨とし、北側の遺体を3号人骨とする。また東側頭位で埋葬された人骨を2号人骨とする。この付番は、埋葬順序が最も古いものを1号とし、その後新しくなる順に2号、3号とした。

【1号人骨】

石棺内の最も南に位置する人骨で、西側頭位で埋葬されている。全体的に南側の石棺長側石の方に寄せられている点、および2号・3号の各人骨がいずれも1号人骨の上に位置していることから、初葬の遺体と考えられる。

【2号人骨】

石棺の中央に位置しており、東側頭位で埋葬されている。左上下肢は1号人骨の上肢上に位置しており、また全体的に3号人骨の下に位置していることから、2番目に埋葬されたと考えられる。

【3号人骨】

石棺の最も北側に位置しており、西側頭位で埋葬されている。1号・2号双方の人骨の上に位置し、ほとんどすべての関節に乱れがないことから、最終埋葬の遺体であると考えられる。

このように人骨は埋葬された順に頭位を西・東・西と交互の方向を向くように配置されている。これらの人骨の中で、古く埋葬されたものは新しい遺体を安置する場所をつくるため、本来の埋葬位置から動かされている。3人の被葬者は何年か時間差をあけて、軟部が腐朽し骨格を動かせる状況になった段階で、順に埋葬されたものと考えられる。

第1主体部内 小石棺(図版45~46)

第1主体部の石棺南側に設置された小石棺である。第1主体部石棺の西部の南隣に接するように設置されている。石棺の石材は、第1主体部と同様、すべて除石が用いられている。蓋石は2枚の板石で構成されている。長側石は設置されず、第1主体部石棺の長側石の外側と墓壇の側壁を取り込み形で小石室の長側壁としている。短側石は粗く割られた石材を東西に配置している。床面には底石や障木などは施されていない。規模は長さ0.96m、幅0.34mである。小石棺内では副葬品等の出土遺物は認められなかった。

第2主体部(図版49)

第1主体部に隣接する木棺墓である。墓壇の床面において木棺の痕跡を検出した。木棺の横断面を見ると、床面が平らであることから箱形木棺を用いたと考えられる。被葬者は木棺幅の広い東側に頭を向けて埋葬されたものと考えられる。中央部の被葬者の埋葬位置のみ、床面が一段深く掘られていた。また

木棺痕跡プランの東端において、側板と小口板の組み合わせ状況を検出した。すなわち小口板を側板が挟み込む形で木棺が組み立てられていたと考えられる。

【1号土器棺】

第2主体部では副葬品は検出できなかったが、ほぼ完形に近い土器群2点を検出した。1点は墓塚の床面において検出した土師器の壺で、東向き頭位で埋葬された木棺被葬者の胸部右横の位置にあたる(62)。ほぼ完形の土師器の壺が直立するように配置され、その口縁部を別個体の甕(63)の破片で閉塞していた。このような状況から土器棺の可能性が高いと判断される。

【2号土器棺】

もう1点の土器棺は墓塚の検出面において検出した(60)。位置的には墓塚の西端にあたる。完形の土師器の壺が、口縁部を北に向けるような形で配置されていた。口縁部は別個体の壺(61)の頸部を用いて閉塞されていた(写真図版53-上左)。この土器も同様な閉塞状況を呈していることから土器棺であると考えられる。

第3主体部(図版50)

第1主体部の南西側に位置する箱形木棺墓である。平面形は長方形を意識して造られたと考えられるが、南側の長辺に硬い岩盤がかかっており、その部分のみ歪みが生じている。墓塚を検出したものの木棺の痕跡を検出することはできなかった。

主体部のはほぼ中央部で、土師器の土師器の壺2個体(62)が、口縁部をあわせるような形で配置されている状況を検出した。これらは土器棺と考えられ、第3主体部の木棺上に埋葬されたものと考えられる。副葬品等の出土遺物は認められなかった。

第4主体部(図版51・52)

第2主体部南側の急傾斜地に位置する。墓塚を検出したものの、木棺を検出することはできなかった。墓塚の規模は不定形である。箱形木棺を用いたものと考えられ、墓塚中央部より東側に小口板の痕跡とみられる溝状の掘り込みの跡を検出している。急傾斜地に墓塚を設置したため、墓塚の周囲を広範囲に造成し平坦面を作り出している(図版51)。副葬品等の出土遺物は認められなかった。

3. 3号墓

第1主体部(図版53)

1号墓と2号墓の中間の急傾斜地に位置している。墓塚を検出したものの、木棺の痕跡を検出することはできなかった。墓塚の形態は不定形であるが、床面では隅丸長方形を呈している。墓塚の北側にステップ状の平坦面が設けられていて、ここに幅約0.2mの方形の溝が3箇所掘られている。これらの溝の深さは0.1m未満である。これらは副葬品等の出土遺物は認められなかった。

第3節 遺物

1. 土器 (図版57~58)

【2号墓】

58 (土師器/甕)

第1主体部で検出した甕の口縁部である。口縁端部はわずかに内側に折り返される。器表面は内外面ともヨコナデ調整で仕上げられる。

59 (土師器/甕)

第2主体部で出土した甕の口縁部である。複合口縁形を呈しており口縁端部はわずかに外反する。器表面は内外面ともヨコナデ調整で仕上げられている。

60 (土師器/甕)

第2主体部の墓壇上面で検出したのは完形の甕で、2号土師棺に用いられたものである。口縁部は単純な口縁部の下半部に、断面三角形の突帯をめぐらせることにより、複合口縁的な外観を呈している。器表面は内外面ともヨコナデ調整で仕上げられている。体部は扁平で肩の張った卵形を呈している。器表面の調整は、外面の上半部を横方向のハケメで調整し、下半を縦方向のハケメで調整している。頸部付近はタテハケを施すことにより、頸部との接合箇所の調整としている。内面は下半をヘラケズリで仕上げ、中位から上半部にかけて板ナデで調整している。体部上半から頸部にかけては指ナデの圧痕が多数残されており、体部と頸部を焼成前に接合した際の調整痕と考えられる。

61 (土師器/甕)

上記60の甕の内部で出土した。甕の口縁部から体部上半部の破片である。口縁部は複合口縁形を呈しており、強く外反している。器表面の調整は内外面ともヨコナデである。体部は卵形を呈するとみられるが、器表面の調整は外面がヨコハケ調整し、内面はヘラケズリで仕上げている。また体部上端から頸部にかけて外面はタテハケを施すことにより、頸部と体部の接合部の調整としている。

同型式の土器は、豊岡市に所在する半坂峠古墳群・南尾根支群1号墳2号棺および4号棺に用いられた土器と、口縁部の形態および器表面の調整法が類似している。半坂峠古墳群の調査¹⁾では、2号棺と4号棺の時期について、4世紀末から5世紀初頭の年代を与えている。

62 (土師器/甕)

第2主体部の北壁付近の床面に立てられ、1号土師棺に転用されていた甕である。口縁部は複合口縁形を呈すると見られるが、口縁端部は欠損しておりその形態は不明である。器表面の調整は、頸部付近から体部上半部にかけてタテハケで仕上げ、内面はヨコナデによる調整を施している。

体部は卵形を呈している。底部は平底状であるが自立することはない。元来丸底であったものが、焼成前に粘土の重みにより平らに変形したものと考えられる。

63 (土師器/甕)

第2主体部床面において、62を転用した1号土師棺の蓋に用いられていた土器であるが、口縁部は存

在しなかった。体部の形態はほぼ球形である。断面形が方形の突帯を頸部にめぐらせているのが特徴的で、頸部の直下には刺突文が施されている。この刺突文は「ハ」の字を90度左回転させたものを、甕の肩部にめぐらせたような文様である。器表面の調整は外面の上半部から中位にかけて横方向のハケメを施し、下半部は縦方向のハケメで調整している。内面は全体的にヘラケズリの痕跡が認められる。

64 (土師器/甕)

第3主体部内で検出した土師棺に用いられていた土器である。下記66の土師の東側に配置された土器である。体部上半部の破片であるが、その形態はやや肩の張った球形を呈している。器表面の調整は、外面上半部は横方向のハケメ、外面下半部は縦方向のハケメを施している。また内面はヘラケズリで仕上げている。

65 (土師器/甕)

第3主体部内で検出した土師棺に用いられた土器である。64・66の土師の間で、双方の隙間を塞ぐような形で検出した。体部の形態はほぼ球形を呈している。器表面の調整は、外面上半部は横方向のハケメ、外面下半部は縦方向のハケメを施している。また内面はヘラケズリで仕上げている。また指頭の圧痕が、粘土の継ぎ目と考えられる位置に帯状に分布している。

66 (土師器/甕)

第3主体部内で検出した土師棺に用いられた土器である。上記64の土師の西側に配置された土器である。64・65と較べて一回り大ぶりであるが、形態的には球形の体部を持つ同型の遺物である。表面調整も前二者に共通しており、外面上半部は横方向のハケメ、外面下半部は縦方向のハケメを施している。また内面はヘラケズリで仕上げている。

【東区包含層】

67 (土師器/高杯)

高杯の杯部の破片であるが、口縁端部は存在しない。杯底部と体部の境界は明瞭な稜が形成され、底部の方が外側へ突出する形を呈している。体部から口縁部にかけてやや外反している。器表面の調整は内外面とも横方向のヘラミガキを施している。

68 (土師器/高杯)

高杯の脚部の破片である。脚端部がやや外反する形態を呈している。

69 (弥生土器/高杯)

高杯の脚柱部の破片である。直線的な筒型を呈することなく、杯部の直下から裾部にむけてなだらかに広がるような形態を呈している。外面は縦方向のヘラミガキを施している。

70 (土師器/高杯)

小型高杯の脚部の破片である。脚端部が外反する形態を呈している。

71 (土師器/甕)

甕の口縁部の破片である。口縁部は単純な形態を呈しているが、複合口縁の影響を受けていると考えられ、口縁の中位に縦い稜線が形成されている。器表面はヨコナデで調整されている。

72 (土師器/甕)

71と同種の甕の口縁部で、71よりも口縁部の外反の度合いが強い。やはり複合口縁の影響を受けていると考えられ、口縁の中位に縦い稜線が形成されている。器表面はヨコナデで調整されている。

73 (土師器/甕)

底部周辺の破片である。底部は平底気味である。器表面の調整は外面がタテハケで調整されている。

74 (土師器/杯)

体部は内湾し、口縁部は外反する。器表面の調整は内外面ともヨコナデで調整されている。

75 (白磁/碗)

体部下半は内湾するが中位はほぼ直線的である。口縁部は外反している。器表面の調整は、外面と内面上半部が回転ナデで仕上げ、外面下半部は回転ヘラケズリを施している。釉の色調はやや青味がかった灰色を呈しており、内外面とも全面的に粗い貫入が認められる。森田勉氏の編年研究に照らし合わせれば白磁D類に相当する。²⁾ これにより13世紀後半の年代が与えられる。

76 (白磁/碗)

体部は全体的に内湾するが口縁部は外反している。図の体部の体部下端から底部付近にかけては露胎である。器表面の調整は、外面の口縁部付近と内面を回転ナデで仕上げ、体部の外面は回転ヘラケズリを施している。釉には全面的に粗い貫入が認められる。上記75の白磁と同様に白磁D類に相当し、13世紀後半の年代が与えられる。

【西区包倉層】

77 (弥生土器/甕)

甕の口縁部から肩部にかけての破片である。体部上端部に注口部が認められる。破片のため注口部の全体的な形態は不明である。この部位の穴の径は約1.5cmである。

上器の体部の表面調整は、外面はタテハケ、内面は横方向のヘラケズリである。

78 (弥生土器/甕)

形態的には77の甕と類似しているが、口縁部の長さがやや短い。形態的には肩の張った長胴形を呈している。器表面の調整は、外面上半部はヨコハケ、下半部を縦方向のヘラミガキを施し、内面はヘラケズリで仕上げている。

79 (弥生土器/甕)

甕の底部の破片である。器表面の調整は外面をタテハケ、内面はヘラケズリを施している。

80 (弥生土器/甕)

甕の底部の破片である。器表面の調整は外面をタテハケ、内面はヘラケズリを施している。

81 (弥生土器/甕)

甕の底部の破片である。79・80の甕と比較して器壁がかなり薄く仕上げられている。器表面の調整は外面をタテハケ、内面はヘラケズリを施している。

82 (弥生土器/高杯)

口縁部から体部の破片である。口縁部はほぼ直立する。その下方は直線的に径を締めつつ底部に至る。器表面の調整は、内外面とも口縁部付近は横方向のヘラミガキを施し、体部から底部にかけては縦方向のヘラミガキを施す。

83 (須恵器/杯蓋)

体部は直立気味であるがやや外に開いている。天井部はあまり高くなく中央部はほぼ平らである。外面のヘラケズリは天井部中位までしか施されない。その他の部位はすべて回転ナデで仕上げられる。体部と天井部の境界は明瞭な稜を形成している。

84 (須恵器/杯蓋)

体部はほぼ直線的であるが、口縁部はやや外反する。天井部は丸いドーム形を形成しており、天井部と体部の境界にさほど明瞭な稜は見られない。

85 (須恵器/蓋杯)

立ち上がり部はあまり高くなく高さ約1.5cmで、やや内傾するものの口縁端部は直立する。当該部位の器表面はすべて回転ナデである。

86 (須恵器/高杯)

高杯の脚部の破片である。脚部は全体的に緩やかな広がりみせるが、脚端部は直立するように内側に折り返される。器表面は全体的に回転ナデで調整されるが、外面中位にカキメが施される。また縦長長方形の透かし穴が存在するが、その配置間隔から透かし穴は計4箇所あけられたものと考えられる。

87 (土師器/皿)

平らな底部に直線的に開く体部を持つ土師器の小皿である。体部はヨコナデで調整され底部は不定方向のナデが施される。底部裏面に回転糸切りの痕跡が認められる。

88 (土師器/皿)

87と同型の小皿である。やはり底部に回転糸切り痕が存在する。

89 (土師器/杯)

土師器の杯底部の破片である。底部に回転糸切り痕が存在する。

90 (土師器/杯)

土師器の杯底部の破片である。体部下端部と底部がスムーズにつながらず、底部が体部下端と較べて大きく落ち込んでおり、いわゆる「ベタ高台」と呼ばれる底部を形成している。底部裏面には回転糸切りの痕跡が認められる。10世紀頃の所産と考えられる。

91 (須恵器/杯)

杯底部の破片である。体部は下半部のみが残存しており、丸く内湾する形状を呈している。底部は平底で、裏に回転糸切りの痕跡が残されている。また体部と底部の境界には明瞭な後縁が形成されている。底部の下方に大ぶりの高台が貼り付けられている。高台は高さ約1cm、幅0.8cmである。10世紀頃の所産と考えられる。

2. 石器 (図版58)

S 1 (砥石)

台形の砥石であるが、図の右下端部は欠損している。鉄器等を研いだとみられる接触が全面的に存在するがあまり明瞭ではない。

3. 金属器 (図版59)

F 16 (ヤリガンナ)

2号墓第1主体部の墓域内で出土した。ヤリガンナの刃先で、身部は欠損している。最大幅1.1cm、厚さ0.5cmである。刃先には明瞭な鑄が形成される。また刃部の断面形が「へ」の字形を呈しており、柄に近い箇所の断面形は台形を呈していることから、刃部を形成する際にまず、長方形であった刃部の断面径をへの字に曲げ、その後、刃先を研ぎ出して刃を形成したものと考えられる。

F 17 (ヤリガンナ)

2号墓第1主体部の墓域内で出土した。ヤリガンナの刃先で、身部は欠損している。最大幅1.1cm、厚さ0.4cmである。刃先には明瞭な鑄が形成される。刃部の断面形はF 16と同様に「へ」の字形を呈しており、柄に近い箇所の断面形は台形を呈していることから、やはり刃部を形成する際にまず、長方形であった刃部の断面径をへの字に曲げ、その後、刃先を研ぎ出して刃を形成したものと考えられる。

註 1) 渡辺 昇「まとめ」『半坂峠古墳群・辻遺跡』兵庫県教育委員会 (1983) : pp.30-36

2) 喜田 勉「14-16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 (1982) : pp.47-54

第4節 小結

1. 概要

「西区」では中世城郭に伴うと考えられる盛土を検出した。盛土内で出土した遺物には弥生土器、須恵器、土師器が含まれるが、弥生土器はもちろん、須恵器は6世紀および10世紀、土師器も10世紀頃の年代が与えられるため、山城の時期に相当する遺物とは言えない。敢えて言うなら「東区」の地山直上で出土した白磁2点が14世紀後半の所産である。この時期は此隅山城の創建期にあたるが、盛土の年代としてはふさわしいものである。「西区」ではこの他に木棺墓1基を検出した。

東区では墳墓3基を検出した。1号墓を構成するのは箱形木棺墓5基で、2号墓は箱形石棺墓1基と箱形木棺墓3基で構成される。3号墓では木棺1基を検出した。これらの主体部の年代は、墓壙で出土した土器の年代から5世紀前半に位置づけられる。

2. 「西区」盛土遺構と此隅山城

西区において盛土遺構を検出した。盛土内で検出した遺物(89・90・91)から、盛土遺構は中世後期の遺構で、性格的には山城の曲輪を造成するための盛土であると考えられる。この時期の山城としては、坪井遺跡の約1km東方に存在する此隅山城との関連を無視する訳にはいかない。此隅山城は14世紀後半から16世紀中葉であり、坪井遺跡における盛土遺構も此隅山城と同時期のものであることは間違いない。

西尾孝昌氏が作成した此隅山城の縄張り図には、今回の調査で検出した平坦面が此隅山城の曲輪として表現されているが、ここでみられるような平坦面については「10m内外の小さな曲輪群は古い造りであり、南北朝期から室町期にかけてつくられたもの」としている。¹⁾

3. 「東区」箱形石棺について

東区で検出した9基の主体部のうち木棺8基で石棺1基、他の埋葬施設はすべて箱形木棺墓である。各主体部については出土遺物が少ないため詳細な年代設定が非常に困難である。これらの中において遺物が出土した主体部は、箱形石棺である2号墓第1主体部、および箱形木棺の第2主体部・第3主体部で、いずれも土師器などの土器が出土している。これらの土器は須恵器出現以前の5世紀前半に位置づけられる。

箱形石棺墓が設けられた位置は当道路が立地する丘陵の最高所である標高31.8m付近であることから、坪井遺跡における墳墓群に埋葬された最初の第1世代である可能性がある。これらの石棺墓と共存する木棺墓についてどのような階層的差異あるいは出自等の集団差があるのか現時点では明らかにできない。副葬品等の出土遺物が少ないことから、各主体部の時期差を明確に提示できないことが最大の問題である。さらに坪井2号墓第1主体部の箱形石棺では3体の埋葬人骨が検出されたが、特に新しい人骨を埋葬する空間を確保するために、古い人骨が全体的に動かされていることが判っている。この事が示しているのは、1基の埋葬主体においても複数の遺体が何年かの時間差を空けて、複数回埋葬される可能性である。このことが各主体部の時期差の設定を余計に困難にしているのである。

箱形石棺について、清家章氏は石棺の諸属性を整理しつつ型式を設定し、その型式による分類の持つ意味についての検討を加えている。²⁾ 清家氏による型式設定を用いるならば、坪井2号墓第1主体部における箱形石棺の型式は「長楕円複数型基準型」「無底石小口H字型」に相当する。前者の長楕円の構

造および棺の幅は階層差を示し、床面構造および小口の形状は集団差を示すとされる。つまり清家氏は「長側石の数は1枚タイプは複数タイプより相対的に上位にある石棺」とし、棺の幅について「幅広タイプは箱形石棺の中で階層的に上位にあたるとしている」。また床面構造等については集団差を示しているが、坪井の石棺のような無床石タイプは但馬においては標準的なタイプである。

これらの諸属性から判断すると、坪井石棺の被葬者は、但馬地域における各箱形石棺被葬者のなかで、階層的にも集団差の面においても標準的なレベルに位置づけがなされる。

4. 墳墓群の年代について

すべての主体部のうちで土器が出土しているのは、「東区」の2号墓第1主体部・第2主体部・第3主体部のみである。これらのうち土器の残存状況が良好で年代決定の参考になりそうなのは第1主体部で出土した60、および第2主体部の第2土器棺に用いられた61・62である。これらは下記に述べるとおり、南隣の入佐川遺跡で出土しており、その報告のなかで5世紀前半の年代が与えられている。また61の土器は第3章でも述べたとおり、豊岡市に所在する半坂時古墳群・南尾根支群1号墳2号棺および4号棺に用いられた土器と同型式と考えられる。特に口縁部の形態および器表面の調整法が類似している。半坂時古墳群の調査者は2号棺と4号棺の時期は4世紀末から5世紀初頭の年代を与えている。³⁾ これらのことから2号墓第2主体部についても同様に5世紀前半の年代が与えられる。

5. 入佐川遺跡との関連性について

坪井遺跡は標高29mから32mの丘陵尾根上および南向きの斜面上に立地しているが、この丘陵斜面の南側の麓には、古墳時代から律令期にかけての祭祀遺構を検出した「入佐川遺跡」が存在する。入佐川遺跡については兵庫県教育委員会が1988年から1995年まで発掘調査を実施したが、その2区D地点において古墳時代の祭祀遺構を検出した。その祭祀のスタイルとは、入佐川の旧河道の北側に設置された堤防の上を中心に、完形に近い土師器の壺・壺・高杯などが帯状に配置されるというものである。これらの土器の内部に破片化した石銅が含まれることや、焼成前に穿孔された土器が認められることなどから、何らかの祭祀儀礼が行われたものとされる。⁴⁾

この祭祀に用いられた土器と、2号墳第2主体部の床面や検出面で土器棺として用いられた土器(60・61・62)が、口縁部の形状や体部の形態などが類似していることから、祭祀を行った主宰者と、坪井の各主体部の被葬者とが同一とは断言しがたいものの年代的には非常に近く、同時代における地域の有力者の墓が入佐川遺跡を見下ろす丘陵上に存在する意義は大きい。

註 1) 西尾孝昌「第一節 此隅山城の縄張り調査を終えて」『此隅山城と有子山城(此隅山城を考える・第5集)』

出石有子山城・此隅山城の保存を進める会(1994): pp.12-19

2) 清家 卓「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』152号 古代学研究会(2001): pp.1-10

3) 渡辺 昇「まとめ」『半坂時古墳群・辻遺跡』兵庫県教育委員会(1983): pp.30-36

4) 船原正民「第3章 全面調査の概要と遺構 第3節 入佐川2区」『入佐川遺跡-小野川放水水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)』兵庫県教育委員会(2002): pp.24-25

第7章 坪井遺跡2号墓第1主体部出土人骨

第7章は公開していません

第8章 まとめ

第1節 尾根上平坦面の埋葬主体と丘陵斜面の埋葬主体

1. はじめに

本書に掲載した「カヤガ谷」「大谷」「坪井」の三つの墳墓群は、築造時期が弥生時代後期から古墳時代中期と違いがあるものの、丘陵の尾根筋を階段状に削平してその平坦面などに木棺墓や石棺墓を埋葬するという葬法が共通して認められる。このような墳墓は弥生時代後期から古墳時代にかけての但馬地域では、在地系の埋葬施設として頻繁に築かれている。

個々の平坦面には中心的な複数の埋葬施設を設け、さらに平坦面から外れた丘陵斜面にも多くの周辺の埋葬施設が設けられる。但馬地域の東隣・丹後地方においては、弥生時代後期を中心に同様な階段状の墳墓が造られるが、その被葬者について福永伸哉氏は地域の集団成員すべてが葬られたのではなく、首長周辺の階層的に限られた人々の墓域と考えるべき、と指摘している。¹¹ このように北近畿一帯において弥生後期頃からの伝統を持つ階段状の集団墓は、但馬地域においては古墳時代に入っても造り続けられ、弥生時代後期から続く葬法が長期間にわたって採用され続ける。

このような埋葬形態において、墳丘上平坦面での中心埋葬と、丘陵斜面の周辺埋葬の組み合わせ方は、各墳墓群の間に微妙な違いが存在する。この違いは本書で報告した「カヤガ谷」「大谷」「坪井」の各墳墓の間でも認められる。本稿では、まずこれらの墳墓群の墓域と主体部配置のあり方を整理する。さらに、カヤガ谷墳墓群他近隣の地域である豊岡市南東部および出石町北部における他の墳墓群の事例も提示し、地域全体における主体部および埋葬施設の配置パターンを考察する。このことにより、当該地域における支配者層の集団構成を考える手がかりとしたい。

2. 各墳墓群の墓域と主体部の配置について

①カヤガ谷墳墓群

尾根筋に3基の墳墓が築かれた。標高の高いほうから順に1・2・3号墓で、1号墓の背後には深い堀切により墓域を明確に示している。発掘調査は1号墓を出石町教育委員会が実施し、2号墓および3号墓を兵庫県教育委員会が担当した。

【1号墓】

3基の墳墓のうちで最も標高が高い場所に位置している。割竹形木棺が配置された第1主体部を中心に計7基の主体部が造られた。第1主体部の他に、第2主体部は箱形石棺墓、第3主体部は箱形木棺墓、第4・5主体部は土坑墓、第7主体部は土器棺墓で、第6主体部の形態は不明である。築造順序は(1・2)→(4・5)→(3・6・7)と考えられる。築造年代は、第2主体部が4世紀頃と報告されている。¹²

【2号墓】

1号墓や3号墓のような平坦な墓域が造られず、現地形は保たれたままの尾根の斜面に主体部が散在している。おもな埋葬主体は箱形木棺墓である。墳墓の築造時期は弥生時代後期である。埋葬主体はまず尾根の中央部に最初の主体部を造り、後に縁辺に向けて墓域を広げていったという傾向が窺われる。

【3号墓】

平坦面を造り出した尾根の中央部とその南側斜面の双方に木棺墓が造られた。尾根中央の平坦面には6基の埋葬主体（第3～8主体部）が造られる。また丘陵斜面には2基の埋葬主体（第1～2主体部）が造られる。築造年代は平坦面上の第3～8主体部が5世紀中葉から後葉、南側斜面に造られた第1～2主体部は弥生時代後期でも古い段階に位置づけられる。

②大谷墳墓群

【大谷墳墓群 第1支群】

北向きの斜面に平坦面を造成することにより2基の墳墓が築かれた。このうち北側の墳墓が1号墓で、南側が2号墓である。1号墓では第1～3主体部の2基の木棺墓が造られ、2号墓では第1～3主体部の3基の木棺墓が造られた。ただし2号墓の墓域は調査区外に広がっているため、主体部の数が更に増える可能性もある。

【大谷墳墓群第2支群】

北向きの斜面に平坦面を造成することにより2基の墳墓が築かれた。このうち北側の墳墓が1号墓で、南側が2号墓である。1・2号墓とも主体部が1基ずつしか存在しない。2号墓は墓域が調査区外に広がるため、現在の箱形木棺墓1基の他に主体部の数が増える可能性もあるが、1号墓は木棺墓1基しか存在しない。

【大谷墳墓群 第3支群】

尾根の稜線上に築かれた4基の墳墓より構成される。尾根の先端側（北西側）を1号墓とし、1号墓の南東側の墳墓を2号墓、その南側の墳墓を3号墓、さらに最も標高の高い南東側に位置する主体部を4号墓とした。1・2・4号墓は尾根上に平坦な墓域を造成しているが、3号墓は斜面をカットせずそのまま木棺を納める埋葬方法をとっている。主体部はすべて箱形木棺墓で1号墓に1基、2号墓に4基設置された。3号墓と4号墓は墓域が調査区外に広がる可能性がある。築造順序は不明で、築造年代は弥生時代後期でも終末期にあたる。

③坪井遺跡

「東区」では墳墓3基を検出した。東区のうち西側の尾根筋に位置する主体部を一括して「1号墓」、東側の尾根筋に位置する主体部を一括して2号墓とし、尾根側の谷部に位置する主体部を3号墓とした。

【1号墓】

箱形木棺墓5基で構成される。尾根上の平坦面に第1・2主体部が築かれ、その他は丘陵斜面に築かれている。築造順序および築造年代は不明である。

【2号墓】

第1主体部のみ箱形石棺墓で、第2～4主体部が箱形木棺墓である。第1・2主体部において出土した土器の年代から5世紀前半に築造されたと考えられる。第1～3主体部が尾根上の平坦面に築かれ、他は丘陵斜面上に築かれている。

【3号墓】

丘陵斜面に築かれた木棺1基を検出した。埋葬年代は不明である。

1・2号墓では尾根上の平坦面の築かれた主体部と丘陵斜面に築かれた一群に分けられる。箱形石棺

は尾根上平坦面に築かれたほか、箱形木棺でも丘陵上に築かれた1・2号墓の第1主体部は幅2m以上と大型で墓竈の平面形も長方形を呈している。その他の木棺は幅1m台のうえ平面形も不定形である。

3. 各墳墓群における主体部配置の特色

①カヤガ谷墳墓群

1号墓および3号墓は尾根筋に平坦面を造成し複数の埋葬施設を設置しており、築造時期は1号墓が4世紀代で3号墓が5世紀前半である。平坦面が造成されない2号墓および3号墓の丘陵斜面の各木棺墓は弥生時代後期に築造されている。これら二通りの埋葬方法の間には大きな時間的な隔たりが存在する。つまり、カヤガ谷の尾根を最初に墓域として利用を始めたのは弥生時代後期前半であって、2号墓から1号墓にかけての全域に木棺墓を主とした埋葬主体を設置していく。その際は尾根の中心部から縁辺へというような埋葬順序が見られる。

その後、4世紀代に尾根の比較的標高の高い位置に、狭い尾根筋を削平し平坦に造成することにより1号墓を築造する。この造成の際は弥生後期に造られた2号墳の存在は意識されていないようである。埋葬主体は溝形木棺や箱形石棺、箱形木棺などが使用される。さらに5世紀代に入り2号墓下の尾根を削平することにより3号墓が造られる。

このように各墳墓の位置の違いは、弥生時代と古墳時代という時期差を示している。

②大谷墳墓群

弥生時代後期後半の墳墓群である。いずれの主体部も箱形木棺が用いられたようである。第1・2支群において主体部はすべて尾根上平坦面に造られており、丘陵斜面では検出していない。第3支群においては3号墓の木棺1基のみが丘陵斜面上の埋葬施設である。調査範囲が尾根の先端部分しか含まれていないため、丘陵斜面の埋葬主体は調査成果より増える可能性がある。

③坪井墳墓群

東区で検出した墳墓群について、1・2号墓とも、尾根上平坦面と丘陵斜面の双方で埋葬主体が築かれている。尾根上には箱形石棺墓と箱形木棺墓が造られる。また箱形石棺墓には小石室が付設され、箱形木棺墓である2号墓第2・3主体部には木棺に加えて土器棺も埋葬されている。また尾根上平坦面に設置された木棺墓のうち、1号墓第1主体部および2号墓第2主体部は幅2m以上と大型なうえ、平面形も整然とした長方形を呈している。

これに対し、丘陵斜面に設置された木棺墓および1号墓第2主体部・2号墓第3主体部は幅1m台と規模も小さいうえ、平面形も不規則な不定形を呈している。後者は傾斜地に箱形木棺を納める際に、掘削土量をなるべく減らして必要な土作業量を最低限に抑えようと志向していたものと考えられる。これに対し尾根上平坦面は四角い箱形の棺を埋葬するために、整然とした墓竈の平面形を作りやすい立地条件といえる。ここに、埋葬地の違いによる階層的な上下関係を見出すことができると考えられる。

4. 近隣地域における事例

前節では各墳墓群における墓域と埋葬主体の配置状況について概観した。そのなかで特にカヤガ谷墳墓群と坪井遺跡においては、墳丘平坦面上と墳丘斜面の双方に主体部を築いている。このような主体部

を設置する位置の違いについて、カヤガ谷墳墓群では埋葬主体の築造時期の違いが現れており、坪井遺跡では規模と平面プランの違いが現れており、断層差を反映していると考えられる。また尾根上に築かれた主たる埋葬施設である石棺墓と木棺墓が併存する意味は現状では不明である。

こうした仮定や問題点について検討するために、各墳墓群が所在する豊岡市南東部および出石町北部における他の墳墓群の事例を提示し、検討の素材とする。

(1)土屋ヶ鼻遺跡³⁾

尾根筋を削平し、平坦地を造るなどにより10基の墳墓を築造した。このうち9基の墳墓が調査された。弥生時代後期から古墳時代中期にかけての墳墓である。おもな埋葬施設は組み合わせ式木棺で、一部に土器棺墓がある。尾根上平坦面の墓域内に、大規模な木棺墓が1・2基造られ、その隙間をやや小規模な木棺が埋めるような配置状況である。いっぽう丘陵斜面にも「弥生時代の終わりごろ」に築かれた9-1号墳や3号墓第3主体部など、墓域内の大規模な木棺と比較しても遜色ない木棺が埋葬されており、ここでは尾根上平坦地内と丘陵斜面において明瞭な時期差・階層差は見出せず、逆に首長一族内の集団による違いが表れていると考えられる。

(2)立石墳墓群⁴⁾

カヤガ谷墳墓群と同じ六方川流域に所在する墳墓群で、現在は豊岡市域に含まれる。尾根筋を削平し平坦地を造るなどにより築造され、時期は弥生時代後期から庄内倭行期が中心である。土屋ヶ鼻遺跡と同様に一つの平坦面上に比較的大規模な木棺と小規模な木棺が混在している一方で、丘陵斜面にも比較的大規模な木棺が小規模木棺を従えつつ点在する状況を呈している。したがってここでも尾根上平坦地内と丘陵斜面において明瞭な時期差・階層差は見出せず、むしろ集団差であると考えられる。

(3)田多地古墳群⁵⁾

六方川北岸に所在する墳墓群で現在は出石町域に含まれる。築造年代は5世紀前半である。6基の墳墓のうち発掘調査が行われたのは4基である。いずれの墳墓も地山を削り出して築いており、埋葬主体部は箱形石棺墓と木棺墓が主である。

発掘調査が実施された4基の墳墓のいずれにおいても、墳丘上平坦面には箱形石棺墓と木棺墓が配され、墳丘斜面に造られるのは木棺墓のみである。木棺は、掘り幅2m前後の大型木棺と幅1m前後の小型木棺に分けられる。このうち墳丘平坦面では大型木棺が全体の約半数近くを占めるのに対し、墳丘斜面では大型木棺は10基のうち2基だけである。つまり墳丘平坦面上には石棺とおもに大型木棺を配置し、墳丘斜面にはおもに小型木棺を配置する傾向が認められる。したがって木棺規模からみれば墳丘上平坦面と墳丘斜面の間には階層的な差異が存在すると考えられる。

(4)田多地引谷墳墓群⁶⁾

カヤガ谷墳墓とおなじく六方川の北側に隣接する丘陵上に位置する。T字形の尾根上を階段状に削平・整地し、弥生時代末ごろから古墳時代全般にかけて墳墓を築いている。1988年に発掘調査が実施され、12基の墳墓を検出した。埋葬主体は箱形石棺墓10基、箱形木棺墓23基、土坑墓5基などである。墳丘上平坦面には、石棺および幅2m近い大型木棺と幅1m未満の小型木棺が併存するが、墳丘斜面に造

られた主体部はすべて幅1m未満の小型木棺または土坑墓である。このように木棺規模のみに注目するならば墳丘上平坦面の埋葬主体は墳丘斜面と比較して階層的に上位に位置づけることができる。

5. 主体部配置の諸類型とその意味

弥生後期から古墳時代の墳墓に配置された、墳丘上平坦面における中心的埋葬施設と、丘陵斜面の周辺埋葬の、それぞれの被葬者がどのような関係にあったのかについて検討してみたい。そのために墳墓内における墓域と埋葬主体の配置パターンを整理してみる。

カヤガ谷墳墓群において、平坦面と丘陵斜面における埋葬主体の位置の違いは、築造年代の差を表している。まず弥生後期に丘陵斜面に墓域を造成することなくいきなり木棺を埋葬している。その後、古墳時代前期には尾根筋を削平した平坦面上にのみ主体部を造る。古墳時代の埋葬主体のみに着目するならば、尾根上の平坦面のみに集団墓が築かれ、丘陵斜面に従属的な埋葬施設は造られなかったと言える。弥生時代の墳墓については、古墳時代の墳墓の造成により破壊されているため、全容は不明であるが、埋葬施設ごとに極端な格差を見出すことはできない。

土屋ヶ鼻遺跡および立石墳墓群は、弥生時代後期から古墳時代に属するが、墳丘上平坦面ごとに中心埋葬と周辺埋葬により構成され、まとまったグループを形成している。また傾斜地においても、比較的規模の大きな中心的木棺と、比較的小規模な従属的な木棺というセット関係が見出される。このことから平坦地と傾斜地のそれぞれの埋葬主体は異なる小集団に属し、その立地条件の違いは集団間の格差（たとえば主流派と非主流派、血族と姻族）などを示しているものと推測される。

大谷墳墓群は弥生時代後期後半に属するが、首長一族内の小集団ごとに平坦面を造り埋葬主体を築いていく。傾斜地などの周辺埋葬の状況は不明である。

田多地古墳群は古墳時代中期に属する。墳丘斜面の埋葬施設には規模・プランとも平坦面に遜色ないものがあるがその比率は小さい。さらに傾斜地においては規模の比較的大きな木棺と小さな木棺が入り乱れており、傾斜地の埋葬主体のみで一つの集団を抽出するのは困難のように思われる。従って田多地古墳群においては平坦地と傾斜地をまとめて一つの集団を構成しており、平坦面と傾斜地の差異は集団内における被葬者の格差を示しているものと考えたい。

坪井遺跡では古墳時代中期に墳墓が築かれる。尾根上に石棺、および平面プランの整った木棺が造られ、傾斜地に小規模で不定形な木棺が造られる。このような差異は階層差を示していると推測される。

田多地引谷墳墓群は弥生時代後期から古墳時代にかけて築かれた。尾根上に石棺および整った木棺が造られ、傾斜地に小規模で不定形な木棺や土坑墓が造られるという差異は、被葬者の階層差を示していると考えられる。

尾根上平坦面・丘陵斜面の双方に造られた埋葬施設の関係は、パターン別に整理すると以下のようになる。

集団間格差：大谷墳墓群（弥生後期）、立石墳墓群（弥生後期）、土屋ヶ鼻遺跡（弥生後期～古墳中期）

集団内格差：田多地引谷墳墓群（弥生後期～古墳後期）、田多地古墳群（古墳中期）、坪井遺跡（古墳中期）

差異なし：カヤガ谷墳墓群（弥生後期・古墳前期）、大谷墳墓群（弥生後期）

註

- 1) 福永伸哉「交易社会の光と影—時代のうねりと丹後弥生社会—」『青いガラスの輝き—丹後王国が見えてきた—』(大坂府立弥生文化博物館図録24) 大坂府立弥生文化博物館 (2002) pp.97
- 2) 小寺 誠「補2 カヤガ谷墳墓群」『出石町史』第四巻 補遺(考古資料編) 出石町史編集委員会 (1993) pp.8-10
- 3) 藤戸谷晴ほか「加陽土屋ヶ鼻遺跡群」(豊岡市文化財調査報告 29) 豊岡市教育委員会 (1994)
- 4) 藤戸谷晴ほか「北浦古墳群・立石墳墓群」(第1分冊) 豊岡市教育委員会 (1987)
- 5) 森内秀造ほか「田多地古墳群・田多地経塚群」(出石町文化財調査報告 第2冊) 出石町教育委員会 (1985)
- 6) 小寺 誠「補1 田多地引谷墳墓群」『出石町史』第四巻 補遺(考古資料編) 出石町史編集委員会 (1993) pp.2-7

第2節 カヤガ谷墳墓群出土の越前焼について

1. 調査での概要

カヤガタ二墳墓群では、弥生時代末～古墳時代の墳墓に切り込んで、中世墓を2基検出した。そのうち第1中世墓では、円形の深い土壇から完形の陶器壺が出土した。特徴から、鎌倉後期～南北朝時代に作られた越前焼と考えられ、但馬の中世土器を考える上でも、良好な資料といえる。

出土した遺物の位置づけとともに、但馬における越前焼の状況について警見する。

2. 出土遺物をめぐって

出土した越前焼の壺は、焼成が良好で肩部に「大」様のヘラ記号を持つ。所見は第3章でふれているが、田中編年¹⁾ Ⅲ期並行・中型の「壺C」に該当する。鎌倉後期～南北朝時代の所産と考えられる資料である。

六古窯の一つに数えられる越前焼は、12世紀後半に成立して以後、16世紀には北陸を中心として日本海沿岸に広い流通圏を成立した。成立当初、越前国周辺に限定された供給であったものが、13～14世紀には生産体制を確立して、広範な流通に向けた基盤をつくったと指摘²⁾ されている。今回出土した資料は、まさに生産体制の確立期の所産と位置づけることができる。

3. 但馬における越前焼の出土状況

カヤガ谷墳墓群の周辺では、出石町の宮内堀脇遺跡や入佐川遺跡、竹野町の見蔵岡遺跡などで出土しているのに加えて、但馬町歴史民俗資料館でも越前焼と考えられる収蔵品がある。

①宮内堀脇遺跡：出石町³⁾

兵庫県教育委員会が平成6年～10年度に調査を実施した。平成7年度の調査では、此隅山城の麓における武家屋敷跡を検出、越前焼の播鉢・壺が出土した。現在整理作業を進めている段階であり、詳細については今後の進展を待ちたい。

②入佐川遺跡：出石町⁴⁾

もっとも上流にあたるD区の包含層中から、16世紀代の播鉢が出土した。隣接する宮内堀脇遺跡と同

様、此隔山城の城下町に伴う整地層と考えられる。

③見蔵岡遺跡：竹野町¹⁾

12世紀末～14世紀に営まれた在地有力者の居住地が調査された。13世紀中ごろ以降の整地層と考えられるA地区包含層から、鉢・楕鉢・甕が出土している。出土遺物全体において越前焼が占める割合はわずかで、在地系の土器群が中心をなす。

④但東町歴史民俗資料館所蔵品（出土地不明）²⁾

越前焼と考えられる甕で、頸部を失う。「奥屋根出土」とされる表採品で、経塚の外容器として報告されている。厳密な出土状況等は不明。

但馬は、隣国の丹後・因幡とともに、越前焼の流通範囲にある³⁾が、出土した器種は楕鉢と甕が中心で、出土量に占める割合も少ない。また管見にかかる他の調査事例でも、まとまった出土は報告されておらず、搬入の事実は確認できるものの、現時点ではかなり限定された状況を見せている。

ただ中世遺跡の調査が少ない現状においては、実態を把握するに尙早といわざるをえない。今後、但馬における中世の土器様相が明らかになるなかで、当地における越前焼の流通や使用実態などが解明されるであろう。此隔山城の麓に位置し中世の但馬国における守護所と考えられる宮内堀脇遺跡の整理・解明と、今後の良好な資料の蓄積に期待を寄せたい。

註

1) 田中照久「越前焼の歴史」『越前古陶とその再現—九右衛門窯の記録』出光美術館（1994）

2) 吉岡康暢「中世類器の研究」吉川弘文館（1994）

【共同研究】中世食文化の基礎的研究 国立歴史民俗博物館研究報告 第71集（1997）

3) 『平成7年度 年報』兵庫県埋蔵文化財調査事務所（1996）

『ひょうごの遺跡』第21号 兵庫県埋蔵文化財調査事務所（1996）

4) 鈴木敬二「入佐川4区」『入佐川遺跡』兵庫県教育委員会（2002）

5) 鈴木敬代編『見蔵岡遺跡』竹野町教育委員会（1996）

6) 『但東町の埋蔵文化財（2）—調査の概要と町内の遺物—』但東町教育委員会 但馬考古学研究会（1985）

7) 註2)と同じ。

表10 出土土器 法量表

●カヤガ谷墳墓群

No	種別	器種	出土地区・遺構	口径	器高	底径	残存	備考
1	弥生	甕	2号墓 第1主体部	130	*20.8	*4.1	口縁～頸部完形、体部1/3、底部1/3弱残存	
2	弥生	甕	2号墓 第3主体部	*150	21.8	*5.1	口縁～頸部1/4、体～底部1/3残存	底部に穿孔
3	弥生	甕	2号墓 第5主体部	*150	*18.6	-	口縁～頸部3/8、体部1/3残存	
4	弥生	甕	2号墓 第6主体部	*155	*7.4	-	口縁～頸部1/2弱、体部1/10残存	
5	弥生?	小甕	2号墓 第7主体部	7.5	9.0	2.6	ほぼ完形	
6	弥生	甕	2号墓 第8主体部	*112	16.5	*4.1	口縁～頸部1/2弱、体部1/3、底部1/4残存	
7	弥生	甕	2号墓 第10主体部	-	*3.2	-	口縁～頸部1/6弱残存	
8	弥生	甕	3号墓 第1主体部	*15.6	*10.6	-	口縁～体部3/8残存	
9	土師器	甕	3号墓 第5主体部	180	18.9	-	口縁～体部は完形	土器枕
10	土師器	甕	3号墓 第8主体部	*14.1	*15.1	-	口縁～体部は完形	土器枕
11	陶器(越前焼)	甕	第1中世墓	12.8	28.7	12.6	完形	ヘラ記号あり
12	須恵器	甕?	包含層	-	*3.2	7.9	底部のみ完形	

●大谷墳墓群 第1・第2支群

No	種別	器種	出土地区・遺構	口径	器高	底径	残存	備考
13	弥生	台付鉢	第1支群 1号墓第1主体部	-	*3.2	4.5	底部のみ完形	墓域埋土
14	弥生	甕	第1支群 1号墓第1主体部	14.9	18.7	3.8	口縁～頸部完形、体部2/3、底部完形に残存	墓域内供献
15	弥生	底部	第1支群 2号墓(確認トレンチ)	-	*2.5	*6.5	底部1/4残存	
16	弥生	甕 or 鉢の底部	第1支群 2号墓第2主体部	-	*2.9	3.7	底部のみ完形	
17	弥生	鉢	第1支群 2号墓(確認トレンチ)	*10.1	7.4	2.9	口縁～頸部3/8、体部1/2、底部2/3残存	
18	弥生	甕	第1支群 2号墓	-	*18.1	5.7	体部2/3、底部完形に残存	
19	弥生	甕	第1支群	120	*8.0	-	口縁～頸部3/4残存	
20	弥生	鉢	第1支群	*11.7	*9.0	-	口縁～体部1/4残存	外面を赤彩か?
21	弥生	甕 or 鉢の底部	第1支群	-	*3.7	*7.0	底部1/4残存	流土
22	弥生	把手付鉢	第1支群	-	*10.5	4.1	体部1/2残存、底部ほぼ完形	外面を赤彩か?
23	弥生	甕	第1支群	*13.4	*5.4	-	口縁～頸部1/4残存	流土
24	弥生	底部	第1支群	-	*3.2	*9.0	底部1/4残存	流土
25	弥生	高杯	第2支群土器棺	21.2	*8.4	-	体部上部のみ完形に近く残存	土器棺(蓋)

26	弥生	甕	第2支群 土器棺	182	27.9	-	口縁～頸部完形、体部2/3、底部完形に残存	土器棺(身)
27	弥生	壺	第2支群 1号墓第1主体部	*124	19.8	2.8	口縁1/10、頸部完形、体部4/5、底部完形に残存	墓室内供献
28	土師器	小皿	第2支群 2号墓周辺	6.2	1.5	4.0	口縁1/4、体～底部1/2残存	底部に小孔あり。流土土
29	須恵器	高杯	第2支群 2号墓周辺	*11.0	*5.3	-	口縁1/4、体部1/2残存	流土土
30	須恵器	壺	第2支群 2号墓周辺	10.1	9.5	-	口縁部3/4、頸部以下は完形に残存	流土土

●大谷墳墓群 第3支群

報告No	種別	器種	出土地区・遺構	口径	器高	底径	残存	備考
31	弥生?	高杯	確認調査 トレンチ	-	*4.4	*5.9	杯部1/5、脚部1/4残存	
32	須恵器	杯	確認調査 トレンチ	*13.8	5.0	6.7	口縁1/2前、体部5/8、底部4/5残存	
33	弥生	甕	1号墓 第1主体部	12.8	*10.5	-	口縁～体部1/2残存	棺内
34	弥生	甕	2号墓 第1主体部	12.2	15.2	2.2	口縁～頸部完形、体部2/3、底部完形に残存	棺外(南側)
35	弥生	甕	2号墓 第4主体部	11.8	*16.8	*3.3	口縁～頸部完形、体部5/6、底部1/4残存	埋土
36	弥生	高杯	2号墓 第1主体部 北側供献土器	*22.4	21.7	*16.0	口縁3/4、体～底部3/4残存	
37	弥生	高杯	2号墓 第1主体部 北側供献土器	-	*5.0	-	脚部の付け根のみ残存	
38	弥生	器台	2号墓 第1主体部 北側供献土器	*21.6	19.0	*15.2	口縁1/8、体部1/4、下体～底部7/8残存	
39	弥生	器台	2号墓 第1主体部 北側供献土器	-	*16.0	15.6	底～脚部完形	
40	弥生	器台	2号墓 第1主体部 北側供献土器	22.7	*15.1	-	口縁部ほぼ完形、体部上部のみ残存	
41	弥生	高杯	2号墓 第1主体部 北側供献土器	-	*6.4	*8.5	脚部2/3残存	
42	弥生	器台	2号墓 第1主体部 北側供献土器	20.5	*15.5	-	口縁～体部完形に近く残存	
43	弥生	器台	2号墓 第1主体部 北側供献土器	-	*10.8	*12.8	脚部2/3、底部1/4残存	
44	弥生	器台	2号墓 第1主体部 北側供献土器	*19.8	*5.0	-	口縁部1/8残存	
45	弥生	高杯	2号墓 第1主体部 北側供献土器	*11.7	*3.9	-	口縁～体部1/4残存	
46	弥生	高杯	2号墓 第1主体部 北側供献土器	*10.6	*3.5	-	口縁部1/8、体部1/2残存	
47	弥生	甕	4号墓上段テラス	*16.5	*2.7	-	口縁部1/5残存	
48	弥生	甕	2号墓中段テラス付近	*16.3	*2.7	-	口縁部1/4残存	
49	弥生	壺	2号墓	*11.9	*13.1	-	口縁部1/2前、頸部完形、体部1/3残存	
50	土師器	甕	3号墓	18.6	*9.0	-	口縁～頸部1/2残存	
51	土師器	甕	3号墓	*19.6	*20.1	-	口縁～底部1/4残存	
52	弥生	高杯	4号墓	-	*7.3	-	口縁部・底部が欠損	
53	弥生	高杯	2号墓	-	*4.0	-	脚の一部残存	

54	弥生	高杯	4号墓	-	*120	*135	体部1/2残存、底部3/8残存	
55	弥生	器台	出土地点不明	-	*34	-	口縁部1/8残存	
56	弥生	器台	4号墓	-	*36	*126	底部1/2残存	
57	須恵器	杯	4号墓	*139	51	-	口縁部1/16、体部1/2弱残存	

●坪井遺跡

No	種別	器種	出土地区・遺構	口径	器高	底径	残存	備考
58	土師器	甕	9-1区拡張 2号墓第1主体	*138	*39	-	口縁部1/6残存	
59	土師器	甕	2号墓 第2主体部	*162	*33	-	口縁部1/12残存	
60	土師器	甕	2号墓 第2主体部 第2土器棺	21.3	40.3	-	完形に近い	第2土器棺内
61	土師器	甕	9-1区 2号墓 第2主体部	*23.3	*21.3	-	口縁～頸部1/2弱、体部1/4残存	
62	土師器	甕	9-1区 2号墓 第2主体部	-	*41.6	-	頸～体部完形に近い	
63	土師器	甕	2号墓 第2主体部 土器棺1	-	*25.0	-	体部1/3残存	
64	土師器	甕	2号墓 第3主体部 土器棺	-	*12.5	-	体部1/2残存	
65	土師器	甕	2号墓 第3主体部 土器棺	-	*20.4	24.4	体～底部完形に近い	東側の土器
66	土師器	甕	2号墓 第3主体部	-	*20.4	-	体～底部完形	西側の土器
67	土師器	高杯	8-3区	-	*4.9	-	杯体部1/6残存	
68	土師器	高杯	9-4区	-	*2.4	*16.9	底部1/4残存	
69	弥生	高杯	9-3区	-	*9.2	-	脚部のみ完形に近く残存	
70	土師器	高杯	9-3区	-	*2.4	4.9	底部完形に残存	
71	土師器	甕	7-3区	*31.1	*3.9	-	口縁～体部1/8残存	
72	土師器	甕	7-3区	*14.5	*4.3	-	口縁部1/5残存	
73	土師器	甕	7-3区	-	*3.2	2.0	底部完形に残存	
74	土師器	杯	8-2区	*13.9	*2.9	-	口縁～体部1/8残存	
75	白磁	碗	9-1区拡張 2号墓第1主体部	*15.5	*4.5	-	口縁～体部1/8残存	
76	白磁	碗	7-1区	*15.9	*5.4	-	口縁～体部1/8残存	
77	弥生	甕	2-2区 斜面	*14.8	*7.0	-	口縁～頸部1/4、体部1/8残存	
78	弥生	甕	1-1区 斜面	*13.1	*18.7	-	口縁～体部1/4残存	
79	弥生	甕	2-2区 斜面	-	*3.5	*7.2	底部1/4残存	
80	弥生	甕	3区南端部	-	*4.7	-	底部完形に近く残存	
81	弥生	甕	1-1区 斜面	-	*11.4	-	体部1/6、底部1/2残存	

82	弥生	高杯	1-1区 斜面	*21.4	*4.4	-	口縁～体部1/2残存	
83	須恵器	蓋	2-1区	*14.5	4.2	7.8	口縁～体部1/2残存	
84	須恵器	蓋	3-2区	*15.2	*3.8	-	口縁～体部1/4残存	
85	須恵器	杯身	2-1区	*13.4	*3.5	5.0	口縁部1/4残存	
86	須恵器	高杯	2-1区	-	*3.7	*9.5	底部1/4残存	
87	土師器	皿	2-2区	*9.5	2.7	5.4	口縁～体部1/2、底部完形に残存	
88	土師器	皿	2-2区 斜面	*10.0	2.7	5.8	口縁～体部1/2、底部完形に残存	
89	土師器	杯	2-1区	-	*1.3	*6.3	底部1/4残存	
90	土師器	杯	2-1区	-	*2.6	*6.2	底部1/4残存	
91	須恵器	杯	2-1区	-	*3.3	8.1	底部完形に近く残存	

注 法量に際した*記号は、口径が復元値/器高・底径が残存値であることを表す。

表11 出土金属器・石器・玉類 量表

●カヤガ谷墳墓 金属器

No	種別	器種	出土地区・遺構	全長	幅	厚み	残存	備考
F 1	鉄器	ヤリガンナ	3号墓 第1主体部	97	1.6	0.6		
F 2	鉄器	刀	3号墓 第8主体部	27.9	2.8	0.6	切先付近を欠損	木質付着
F 3	鉄器	刀	第2中黄墓	36.7	2.7	0.6		

●大谷墳墓群 金属器

No	種別	器種	出土地区・遺構	全長	幅	厚み	残存	備考
F 4	鉄器	劍	第1支群2号墓 第3主体部	—	—	—		確認調査時に出土。F7と同一か
F 5	鉄器	劍	第1支群2号墓 第3主体部	—	—	—		確認調査時に出土
F 6	鉄器	ヤリガンナ	第1支群1号墓 第3主体部	10.4	1.2	0.4		
F 7	鉄器	劍	第1支群2号墓 第3主体部	?	?	?	細片化して出土。本来の法量は不明	
F 8	鉄器	刀子状鉄製品	第2支群1号墓 第1主体部	14.5	1.3	0.2		糸巻き、布付着
F 9	鉄器	釘	第3支群1号墓 第1主体部	12.0	1.0	0.5	6本が束ねられた状態で出土	計測値は最大値
F 10	鉄器	劍	第3支群2号墓 第1主体部	6.1	2.0	0.5		木質付着
F 11	鉄器	劍	第3支群2号墓 第1主体部	9.8	1.1	0.4		
F 12	鉄器	劍	第3支群2号墓 第3主体部	6.5	1.8	0.5		木質付着
F 13	鉄器	ヤリガンナ	第3支群2号墓 第4主体部	—	—	—		同一と考えられる？個体が出土
F 14	鉄器	劍	第3支群4号墓 第2主体部	—	2.4	0.7		
F 15	銅製品	耳環	C地点包含層	3.2	2.9	0.8	銅芯に金箔をまいたもの	

●坪井遺跡 金属器・石器

No	種別	器種	出土地区・遺構	全長	幅	厚み	残存	備考
F 16	鉄器	ヤリガンナ	東区2号墓 第1主体部	—	1.1	0.5		
F 17	鉄器	ヤリガンナ	東区2号墓 第1主体部	—	1.1	0.4		
92	スラッグ	—	—	—	—	—		
93	スラッグ	—	—	—	—	—		
S 1	石製品	砥石	包含層	12.2	6.0	4.2		

●カヤガ谷墳墓群 2号墓第2主体部出土ガラス小玉

実測図版	写真図版	No.	径(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	巻頭図版	備 考
61	57上	T1	4.50	3.80	2.00	○	
		T2	3.80	1.60	1.25		
		T3	3.50	2.40	1.00		
		T4	4.75	4.10	0.75	○	気泡・不純物
		T5	3.40	1.70	1.00		不純物
		T6	3.35	1.50	1.50	○	
		T7	2.40	2.30	0.50		
		T8	4.30	4.05	1.00	○	気泡・不純物
		T9	2.70	3.15	0.75		気泡
		T10	5.70	2.90	2.50	○	不純物
		T11	3.50	2.30	1.50		
		T12	4.80	4.00	1.25		気泡
		T13	3.55	2.20	1.00		
		T14	3.40	2.30	0.75		
		T15	6.15	3.15	2.00	○	気泡
		T16	5.05	4.60	1.75	○	気泡・不純物
		T17	4.70	3.90	2.00		気泡
		T18	3.40	1.60	1.25		
		T19	3.05	2.10	1.25		
		T20	3.45	1.95	1.50	○	
		T21	3.80	2.60	1.25		気泡
		T22	3.25	1.65	1.50		不純物
		T23	4.85	4.70	1.00	○	気泡・不純物
		T24	2.80	2.25	0.50		
		T25	3.30	3.50	1.25	○	気泡
		T26	2.30	2.65	1.00		
		T27	3.70	2.00	1.00		気泡
		T28	3.50	2.90	1.00	○	
		T29	3.50	2.00	1.25		気泡
		T30	2.95	2.20	1.50		気泡・不純物
		T31	2.85	1.75	1.00	○	気泡
		T32	2.50	1.40	1.00		
		T33	2.70	2.50	0.75	○	
		T34	3.00	2.25	1.00		
		T35	5.55	3.70	1.75	○	気泡

実測図版	写真図版	No.	径(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	巻頭図版	備 考
61	57F	T36	4.70	3.15	1.50		気泡・不純物
		T37	4.70	4.05	2.00		不純物
		T38	4.55	4.30	1.25		気泡
		T39	3.50	2.00	1.25		
		T40	3.25	2.70	1.25		気泡・不純物
		T41	3.25	1.90	1.25		
		T42	3.35	1.90	1.00	○	気泡・不純物
		T43	3.20	2.10	1.25		気泡・不純物
		T44	3.00	2.30	1.25		気泡・不純物
		T45	3.20	2.60	1.00		気泡・不純物
		T46	2.55	2.40	0.75		
		T47	3.60	1.85	1.25	○	
		T48	3.80	2.80	1.00		不純物
		62	58上	T49	6.90	4.40	2.50
T50	4.50			4.80	1.25		気泡・不純物
T51	3.20			2.15	1.00	○	不純物
T52	3.25			1.50	1.25		不純物
T53	3.60			3.25	0.75		不純物
T54	3.45			1.65	0.75		
T55	3.05			2.55	1.25		
T56	6.90			5.35	1.25	○	気泡・筋状の痕跡
T57	3.70			2.85	0.75		気泡・不純物
T58	2.80			2.65	0.75		
T59	3.30			1.90	0.75		
T60	3.55			2.15	1.00	○	気泡
T61	3.60			2.25	1.00		気泡
T62	3.60			3.05	1.00		筋状の痕跡
T63	3.00			2.00	0.75		
T64	3.50			2.10	1.00	○	
T65	3.40			2.50	1.50		気泡
T66	6.00			3.60	1.50		気泡・不純物
T67	3.30			3.00	1.00		不純物
T68	3.30			1.45	1.25		
T69	5.15			3.55	1.50		気泡
T70	3.20			1.90	1.00	○	気泡
T71	3.30			2.45	1.00		不純物・筋状の痕跡

実測図版	写真図版	No.	径(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	巻頭図版	備 考		
62	58上	T72	3.20	1.85	1.00				
		T73	2.90	1.65	1.00		不純物		
		T74	3.00	2.35	0.75	○			
		T75	3.00	1.25	1.25				
		T76	5.00	2.55	1.50		気泡		
		T77	4.70	3.70	1.50		気泡		
		T78	3.65	2.65	1.00		不純物		
		T79	3.60	2.10	1.00				
		T80	3.50	2.20	1.00				
		T81	3.00	2.25	0.75				
		T82	3.00	2.50	0.75				
		T83	3.05	2.20	0.75	○	筋状の痕跡		
		T84	3.40	1.80	1.00				
		T85	2.95	2.00	1.00				
		T86	3.20	2.10	1.25				
		T87	3.25	2.45	1.00				
		T88	2.90	2.15	1.00				
		T89	7.35	5.40	1.50		気泡、脆弱		
		T90	6.95	4.95	3.00				
		T91	4.90	4.30	1.75		気泡		
		T92	6.80	5.85	1.50	○	気泡・不純物		
		T93	6.00	4.00	1.50				
		T94	5.30	3.50	1.75		気泡		
		T95	4.75	3.50	1.50		気泡		
		T96	5.35	3.50	1.75				
		63	58F	T97	7.50	5.50	2.25		気泡・不純物
				T98	4.50	2.75	1.50		
				T99	7.45	4.90	2.00		気泡・不純物
				T100	6.90	5.15	1.50	○	気泡・筋状の痕跡
				T101	5.95	4.10	1.75	○	
T102	4.70			3.60	1.50				
T103	4.60			2.65	1.50				
T104	4.60			3.20	1.50		気泡		
T105	4.80			3.65	1.00		不純物		
T106	4.55			3.60	1.50		気泡・不純物		
T107	4.60	4.50	1.00		気泡・不純物				

実測図版	写真図版	No.	径(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	巻頭図版	備 考
63	58 F	T108	4.60	4.70	1.00		気泡・不純物
		T109	5.20	4.45	0.75		
		T110	4.90	3.40	1.50	○	
		T111	4.15	3.15	1.00		
		T112	7.10	5.30	2.00		気泡・不純物・筋状の痕跡
		T113	6.30	4.05	2.00		気泡・不純物
		T114	5.70	4.30	1.75		気泡・不純物
		T115	8.05	5.35	1.00	○	不純物・筋状の痕跡
		T116	5.40	3.90	1.75		気泡
		T117	7.20	5.70	1.25		気泡・不純物
		T118	6.65	3.80	2.50		不純物
		T119	7.45	5.50	1.25		気泡・不純物・筋状の痕跡
		T120	6.85	3.75	1.50		気泡・筋状の痕跡
		T121	6.95	4.15	3.00	○	不純物、脆弱
		T122	6.55	4.30	1.75		不純物
		T123	7.00	4.00	2.00		不純物
		T124	6.15	3.80	2.00		不純物・筋状の痕跡
		T125	4.20	4.25	1.00	○	気泡・不純物
		T126	7.40	5.25	1.25		気泡・不純物・筋状の痕跡
		T127	4.20	4.70	1.25	○	
		T128	6.70	3.65	1.25		不純物
		T129	7.50	6.05	3.00		気泡
		T130	8.00	6.45	1.50	○	不純物・気泡
		T131	7.60	5.45	1.50		不純物
		T132	5.20	3.10	1.25		
		T133	7.35	5.10	1.25		気泡
		T134	5.30	3.05	2.00		不純物
		T135	6.20	4.85	1.50		不純物・筋状の痕跡
T136	4.60	4.20	1.25	○			
T137	4.65	3.10	1.75		不純物		
T138	4.75	3.50	1.75				
T139	4.75	3.05	2.00				
T140	4.70	4.55	1.75	○	気泡・不純物		

註 このほか、破片化して計測できなかったガラス小玉の小片が数点存在する。

第9章 出土木材の年輪年代

光谷拓実 (奈良文化財研究所)

砂入遺跡・袴伏遺跡・入佐川遺跡からは弥生時代後期～平安時代にかけての各種木製品が出土した。これらの多くは水田土壌層や流路からのもので、出土土器と層位との関係においては、個々の遺物の年代評価が難しい遺跡である。しかし、出土遺物のなかで、木製品の年輪年代が確定すれば、遺跡、遺物の年代評価につながることになる。そこで、今回は出土木製品の年輪年代法による年代測定をおこなうことにした。

現在、わが国で、年代測定が可能と思われる木製品は、樹種がヒノキ、スギ、コウヤマキに限られる。さらに年輪がおよそ100層以上刻まれているもので、均一なものがよい。

1. 試料と方法

選定した木製品は表に示したとおりである。砂入遺跡からは2点、袴伏遺跡からは6点、入佐川遺跡からは1点の総数9点を選んだ。このなかで、入佐川遺跡出土の扉板(試料No.9)は樹皮型(製品の一部に樹皮をはいだだけの面を残すもの)で、袴伏遺跡出土の田下駄A(試料No.4)と大型部材(試料No.6)は辺材型(製品の一部に辺材が残っているもの)、他の7点は心材型(心材部のみからなるもの)である。

樹種は砂入遺跡出土木製品(木皿)1点と、袴伏遺跡出土木製品(木皿)2点の総数3点がヒノキであった。あとの6点はすべてスギであった。

年輪幅の計測は、専用の年輪読取り器を使い、各年輪幅を10ミクロン単位で計測した。コンピュータによる暦年標準パターンと試料パターンとの照合は相関分析手法によった。

2. 結果

計測した年輪数と暦年標準パターンとの照合結果は表12に示したとおりである。年輪数はいずれも100層以上あったが、全体的に年輪数が少ない。暦年標準パターンとの照合によって年輪年代が確定したのは、9点のうち6点であった。つぎに得られた年輪年代と発掘現場の年代観が整合しているかどうかを見てみよう。

砂入遺跡出土の木製品は、奈良時代の祭祀具や曲物と一緒に出土した。試料No.2の田下駄Aの年輪年代は190年と確定した。これは心材型であるから、正確な伐採年代は求められないが、奈良時代のものではなく、古墳時代のものである可能性は大きい。

袴伏遺跡出土の木製品、No.4の年輪年代は辺材型で120年と判明、遺構、遺物の年代観は古墳時代～飛鳥時代までの時期を想定しているが、この木製品の年代は弥生時代のものとするのが妥当である。

表12 年代測定結果一覧表

No.	遺跡名	報告No.	遺物名	辺材	遺構・層の時期	樹種	年輪年代	年輪数	t値
1	砂入遺跡	354	木皿C	無	8世紀末～9世紀初頭	ヒノキ	-	101	-
2	砂入遺跡	2134	田下駄A	無	奈良?	スギ	A.D.190	253	8.0
3	袴伏遺跡	W785	木皿C	無	奈良～平安初頭?	ヒノキ	-	104	-
4	袴伏遺跡	W1543	田下駄A	有り	古墳～飛鳥	スギ	A.D.120	110	7.6
5	袴伏遺跡	W1874	大型部材	無	古墳～飛鳥	スギ	A.D.635	230	5.2
6	袴伏遺跡	W1880	大型部材	有り	古墳～飛鳥	スギ	A.D.106	140	8.0
7	袴伏遺跡	非掲載	円形曲物底板	無	奈良	スギ	A.D.602	179	7.5
8	袴伏遺跡	非掲載	円形曲物底板	無	奈良～平安初頭?	ヒノキ	-	108	-
9	入佐川遺跡	W331	扉板	有り	古墳初頭	スギ	A.D.289	190	5.0

袴狭遺跡出土の木製品、No 5 は、古墳時代～飛鳥時代までの時期を想定している第2遺構面の上面から出土した大型の板である。これの年輪年代は心材型で635年である。この木製品は、古墳時代ではなく、飛鳥時代以降のものである。

袴狭遺跡出土木製品、No 6 は、No 4 の田下駄と同じ層から出土した大型の部材である。この地層は古墳時代～飛鳥時代までの長期にわたる時期を想定している。この年輪年代は辺材型で106年と確定した。この年代は、原木の伐採年に比較的近い年代とみなすことができるので、古墳時代前期の遺物とみて間違いない。

袴狭遺跡出土木製品、No 7 は、層位的に奈良時代のもものと推定されるものである。この年輪年代は心材型で602年である。この曲物底板の外側（樹皮方向）がどの程度削除されているのかは不明であるが、原木の中心に近いところで木取りしたものであれば、奈良時代のものであっても不思議はない。

入佐川遺跡出土の木製品、No 9 の扉板は、一列に打ち込まれた板材列に転用されていたものである。この溝底からは、布留期の土器器が出土している。この扉板の年輪年代は、樹皮型で289年と確定した。この場合転用材であることを考えると、溝の年代と直接結びつけて考えるにはやや無理があるため、出土土器の型式幅年にこの年輪年代を直ちに当てはめるべきではないかもしれない。しかし、この年輪年代は出土土器の年代を考慮するうえで、貴重な年代情報となりうる。

以上、発掘所見による年代観と年輪年代との関係を概観した。年代的に整合性のとれたものもあれば、一方で、古墳時代～飛鳥時代にわたって、長期間のあいだ機能していた遺構からの遺物は、出土土器との整合性がとりにくい点も生じた。しかし、年代情報を示す遺物が何もないような遺跡では、出土木製品の年輪年代情報は、大変貴重である。

年輪年代測定結果に対するコメント

砂入遺跡出土木製品では、田下駄A（No 2）が出土層よりかなり古い年代が得られた。これは、袴狭遺跡における田下駄の形態からみても、妥当性が高いものである。

袴狭遺跡出土木製品では、No 4（A.D.120年）とNo 6（A.D.106年）が出土した層（第2遺構面ベース層）の最下部から船団線刻画のある板が、直下の溝からサケやシカの絵が線刻された箱形木製品が出土している。試料はともに辺材型である。この層は出土遺物から古墳時代を中心に飛鳥時代までの時期を想定しているが、弥生時代中期後葉～後期の土器も出土している。年輪年代測定によって木製品にも弥生時代に遡る遺物が存在することが明らかとなった意義は大きい。箱形木製品や船団線刻画のある板は福氣時期の判断が難しい遺物であるが、箱形木製品については鳥根帳下で弥生時代中期～後期に属する類品が発見されている。年輪年代の結果は箱形木製品を弥生時代後期に位置づける一つの材料となろう。また、船団線刻画のある板についても弥生時代後期までを視野に入れて検討する必要がある。

入佐川遺跡出土木製品では、扉板（No 9）は軸部が方形のままで摩耗していないことから、扉として使用されずに転用されている。伐採年と転用の間にそれほど時間差を考慮しなくてよいかもしれない。No 9 が打ち込まれていた溝からは定形に近い土器器が出土している。報告書で実測図が掲載された2点（16・17）のうち、16は布留0式、17は布留I～II式に相当する資料と考えられる¹⁾。いわゆる古式土器器の実年代を考える重要な情報になると思われるが、土器に時期幅があることと、流路という遺構の性格上厳密な共時性が保証されない点が惜しまれる。

（藤田）

1) 土器に関しては京都府埋蔵文化財センター高野陽子氏にご教示を得た。

第10章 袴狭遺跡出土木製品の樹種

伊東隆夫（京都大学木質科学研究所）

藤田 淳（兵庫県埋蔵文化財調査事務所）

袴狭遺跡は兵庫県出石郡出石町に所在し、兵庫県の北東部、出石町の市街地から北西約1.5kmの水田地帯にある。丸山川の支流である出石川に注ぐ小支流、袴狭川の右岸に広がる弥生時代後期～中世の複合遺跡である。調査範囲のうち、袴狭川の下流域では古墳～平安時代の水田跡が分布する。水路や畦畔が発見されており、田下駄をはじめ多種多様な木製品が出土している。上流では奈良～平安時代の掘立柱建物群や礎石建物とこれらを区画する溝が発見されており、木簡・墨書土器・緑輪陶器・円面硯・帯金具・石帯・木製祭祀具など官衙に伴う遺物が出土している。

第1節 遺物の時期について

袴狭遺跡では、出土した土器から、弥生時代中期後葉～鎌倉時代初期、室町時代（戦国時代）、近世の各時代の遺物が存在すると考えられる。このうち、量が最も多いのは奈良～平安時代前半である。木器の場合、それ自体で時期が決定できるものが少なく、同じ遺構や層から出土した土器をもとに時期を決定するのが通例である。袴狭遺跡では、出土状況から考えて厳密に時期区分することは困難であるため、おおまかに時期を以下の4つに区分している。

- 1) 古墳時代（弥生時代中期後葉～弥生時代末までを含む）…………… 49点
- 2) 古代1（主に奈良時代～平安時代前半で、飛鳥時代も含む）…………… 500点
- 3) 古代2（主に平安時代後半で、鎌倉時代初めも含む）…………… 25点
- 4) 中世（主に室町時代後期の戦国時代で、一部近世も含む）…………… 19点

このほか、1)～4)の2つ以上にまたがるものが42点ある。

器種によって、特定の時期にしか存在しないもの（例えば、櫛柄具や例物桶）、いくつかの時期を通じて存在するもの（例えば田下駄や火鑪板、曲物）がある。後者では、時期によって使用される樹種に違いが認められる可能性があるもの（例えば柱）もあるが、大半は大きな変化が認められないと考えられる。したがって、集計表（表15）は一部を除いて時期による細分を行わなかった。

第2節 樹種同定について

樹種同定をおこなった試料の総数は前述の時代ごとの点数を合計した635点にのぼる。定法にしたがって、安全カミソリで木片から木口面、柃目面、板目面の3断面の薄い切片を切り取り、スライドガラスに載せ、ガムクロラルールで封入して顕微鏡観察用プレパラートを作製した。つぎに、以下の樹種ごとの顕微鏡的特徴を観察して樹種を同定した。

カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）

樹脂道および樹脂細胞を欠く。仮道管に対になつたらせん肥厚がみられる。

イヌガヤ（*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura）

樹脂道を欠く。樹脂細胞は木部にまばらにかつ一様に分布する。仮道管にならん肥厚がみられる。

モミ（*Abies firma* Sieb. et Zucc.）

樹脂道および樹脂細胞を欠く。放射柔細胞壁は厚く、末端壁は鼓珠状となる。放射仮道管を欠く。

二葉マツ (*Pinus* spp. *Diploxylo*)

樹脂道が存在する。樹脂細胞はみられない。分野壁孔は典型的な形状。放射仮道管が存在し、仮道管内壁に鋸歯状突起がみられる。

スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

樹脂道を欠く。樹脂細胞は晩材部にまばらにかつ接線状にならぶ。分野壁孔は典型的なスギ型。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* Endlicher)

樹脂道を欠く。樹脂細胞は晩材部にまばらにかつ接線状にならぶ。分野壁孔は典型的なヒノキ型。

ヤナギ属 (*Salix* spp.)

散孔材。道管の大きさは中庸で多くが放射方向に2-3個複合する。放射組織は単列異性。道管と異性放射柔細胞間の壁孔はふるい状となる。

アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.)

散孔材。道管の大きさは中庸。道管は単独ないし2個放射状に複合する。単穿孔。放射組織は同性で、1-4列。

ブナ属 (*Fagus* L.)

散孔材。年輪内境の道管は大きく、年輪外境で小さくなる。単穿孔、ときに階段穿孔。道管にチロースが詰まる。放射組織の幅は変化する。ときに、複合放射組織並のみみられる。

シイ属 (*Castanopsis* Spach)

環孔材。年輪内境の道管は大きく、接線方向に不連続となる。孔圏外道管は小さく放射方向に分布する。放射組織は単列。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

環孔材。孔圏道管は非常に大きく、複列となる。単穿孔。孔圏外道管は火炎状となる。放射組織は単列。

アカガシ属 (*Quercus* L. *Cyclobalanopsis*)

放射孔材。やや大型の道管が放射状に配列する。単穿孔。単列放射組織と複合放射組織がみられる。

クヌギ属 (*Quercus* L. *Sect. Cerris*)

環孔材。孔圏道管は大きく、単穿孔を有する。孔圏外道管は小さく、壁が厚く、単独で放射状に並ぶ。単列放射組織と複合放射組織が存在する。

ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

環孔材。孔圏道管は一列で単穿孔を有する。孔圏外道管は花綱状にならぶ。放射組織は異性で1-5列。放射組織縁辺の細胞にしばしば結晶を含む。

エノキ (*Celtis sinensis* Persoon)

環孔材。孔圏道管は大きく、単穿孔を有する。孔圏外道管は多数が集合する。放射組織は異性で、1-5列となり、さや細胞がみられる。

ヤマグワ (*Morus australis* Poiret)

環孔材。孔圏道管は大きく、単穿孔を有する。道管にチロースがみられる。孔圏外道管は多数が集合する。放射組織は異性で1-5列となる。

ホオノキ (*Magnolia obovata* Thunb.)

散孔材。道管は中庸で2-数个放射状に複合し、単穿孔を有する。道管にチロースがみられる。隔壁木繊維がみられる。放射組織は異性で、1-2列。

カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.)

散孔材。やや小型の道管が多数分布する。階段数が多い階段穿孔を有する。放射組織は異性で、1-2列。

サルナシ (*Actinidia arguta* Planch. ex Miq.)

環孔材。道管は非常に大型のものと中型のものが混ざる。単穿孔を有する。道管にらせん肥厚がみられる。放射組織は異性で、1-2列。

サクラ属 (*Prunus* spp.)

散孔材。やや小さい道管が斜線状にならぶ傾向がある。単穿孔。道管にらせん肥厚がみられ、着色物質が詰まる。放射組織は同性ないし異性で1-5列。

バラ亜科 (*Rosoideae*)

散孔材。極めて小さい道管が2-5個、ときに5個以上斜線状、接線状、放射状、塊状など不規則に複合する。単穿孔。放射組織は同性ないし異性で、直立細胞はほとんどみられず、方形細胞が多い。

ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.)

環孔材。孔圏外道管は小集団をなす。単穿孔。小道管にらせん肥厚。輪方向柔細胞は周囲状、翼状、連合翼状、帯状となる。木繊維に隔壁。放射組織は同性で、1-3列。

ヤマハゼ (*Rhus sylvestris* Sieb. et Zucc.)

環孔材。本種は年輪幅が狭く、孔圏道管は1-2層で、孔圏外道管は小さく、ほぼ単独で分布する。単穿孔。放射組織は異性で、1-2列。単列部は方形細胞となり、しばしば長く連なる。

ツゲ (*Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica*)

散孔材。極めて小さい道管が一様に分布する。階段穿孔。木繊維の壁は厚く、隔壁がみられる。放射組織は異性で、1-2列。

キブシ (*Stachyurus praecox* Sieb. et Zucc.)

散孔材。小さい道管がほぼ単独、ときに2個複合して多数分布する。階段穿孔。らせん肥厚が存在する。放射組織は異性で、1-2列。

リョウブ (*Clethra barbinervis* Sieb. et Zucc.)

散孔材。小さい道管がほぼ単独で分布する。年輪界での分布はやや粗。階段穿孔。放射組織は異性で、1-4列。

トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume)

散孔材。小さい道管が、単独ないし、1-6個放射状に複合して、多数分布する。単穿孔。放射組織は単列同性。放射組織は典型的な層状構造。

シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum* Thunberg)

散孔材。小さい道管がほぼ単独、ときに2-3個複合して分布する。単穿孔と階段穿孔がみられる。道管と木繊維にらせん肥厚が存在する。放射組織は異性で、1-8列となり、高さは著しく高い。

カキノキ (*Diospyros kaki* Thunb.)

散孔材。やや大型の道管がやや粗に分布する。道管の壁は厚い。単穿孔。放射組織は異性で、層状構造となる。

エゴノキ (*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.)

散孔材。道管の大きさは中庸で、2-5個ときにそれ以上複合する。年輪外縁に道管の分布は少ない。階段穿孔。放射組織は異性で、1-3列。

ムラサキシキブ (*Callicarpa japonica* Thunb.)

散孔材。小さい道管が単独ないし、放射状に2-3個、ときに5個複合して分布する。単穿孔。道管放射組織間壁孔は極めて小さく多数。放射組織は異性で、1-3列。

ヒョウタン (*Lagenaria siceraria* Stanley var. *gourda* Hara)

無数の柔細胞からなり、ところどころに維管束がみられる。

第3節 各遺物について

袴狭遺跡の樹種同定の結果は表14に示す通りである。この表から、時代や遺物名ごとに木器に使用された樹種を集計したものが表15である。この表に基づいて用途ごとに整理した。なお、木器に使用された樹種を多い順に並べたものが表16である。

全般的な傾向として、但馬地域を含む山陰地方の特色であるスギの多用傾向が顕著に表れている。試料数に占める割合では約半数であるが、実際のスギの使用率はこれより更に高くなることは言うまでもない。ヒノキもスギに次いで多く使用される樹種であるが、後述のように木皿、木鉢、独楽、柱など特定の遺物に集中する傾向が認められる。スギ、ヒノキを除いた針葉樹ではカヤ、イヌガヤ、二葉マツ、モミが1-4点と樹種も点数もわずかである。

広葉樹ではクリとケヤキが多く、アカガシ亜属、トチノキ、ムラサキシキブなど26種が確認された。クリは様々な用途の木器に使用されるが、ケヤキは容器に集中している。袴狭遺跡に隣接する入佐川遺跡の樹種同定結果ではケヤキ製の容器は確認されていないのと対照的である。樹種同定された入佐川遺跡の容器は主に漆棺で、時期はすべて中世以降なのに対して、袴狭遺跡のケヤキ製容器は主に古代に属する。遺跡の性格を考慮する必要があるが、古代と中世の木製容器の生産と流通を比較する上で注目する必要がある。

1. 木筒類 (9点)

公文書あるいは荷札など狭義の木筒に限定した。木筒を人形に転用したものは木筒に含めているが、木皿や曲物などに文字を記したものは報告書では広義の木筒として扱ったが、ここではそれぞれの遺物に含めた。角柱材に「鬼」の一字を記したもの (№19) も同様で、「その他」に含めている。樹種の内訳はスギ7点、ヒノキ2点。

2. 祭祀具 (64点)

袴狭遺跡出土木器の半数近く (約5500点) を占める。人形・馬形・斎串がその中心で、それぞれ複数のタイプに細分できる。他に、船形・刀形・鳥形などがある。出土数に対して試料数は少ない。

①斎 串：平面形によってA-E類に細分されるが、特に樹種の差は無いように思われる。袴狭遺跡では砂入遺跡のような広葉樹 (ウルシ属) の斎串はみられなかった。スギ12点、ヒノキ2点。

②人 形：手の切掛けの有無と肩の形態などによってA-E類に細分される。大半は奈良~平安時代前半のものであるが、人形Eは平安時代後半まで下る。スギ16点、ヒノキ4点の他、カヤとイヌガヤが各1点ある。カヤとイヌガヤの人形は、長さ10cmほどの小径木を半截して作ったもの (№21・68) で、こうした特殊な用材の人形は小型の人形Eに特徴的である。

③馬形：鞍の有無によってA～C類に細分されるが、用材に差は無いようである。スギ16点、ヒノキ5点。

④舟形：舟形の大半は針葉樹製であるが、他の祭祀具に比べ広葉樹と思われるものが目についたため、それを特に選んで試料とした。樹種の内訳はスギ、クリ、シイノキ、ヤマウルシが各1点である。

⑤このほか、刀形（スギ）、鼠形（スギ）、不明形代（ヒノキ）各1点を同定した。

祭祀具に用いられた樹種の内訳はスギ47点、ヒノキ12点、その他5点。

3. 農具（田下駄125点、田下駄以外34点）

袴狭遺跡の大部分は水田、それも未分解の腐植物混じりシルトを土壌層とする溼田で占められるため、田下駄を中心とする農具も多数出土している。農具のほとんどは田下駄の足板と杵部材で、1000点以上出土し、次いで木鍬がやや多く出土しているが、その他の農具は鋤鎌類を含め各10点以下である。遺物の量のある程度反映して、田下駄の試料数も多くなっている。

①田下駄：足板単独で使用するものと、足板の下に杵が付くものがある。緑肥の踏み込みや代かきに用いる大足（田下駄D）も後者に含める。足板では、田下駄A（単体使用）と田下駄B（環状の杵がつくもの）がすべてスギであるが、田下駄C（台状の杵が付くもの）と田下駄Dではヒノキも見られる。樹種の内訳はスギ75点、ヒノキ5点。

田下駄の杵部材には、円形杵（田下駄Bの杵）、十字杵歯・台状杵歯と台状杵支軸（田下駄Cの杵部材）、方形杵支柱と方形杵横枝（田下駄Dの杵部材）がある。このうち円形杵のみが枝状の材を曲げたもので、板材や角材を用いる他の杵とは材の使い方が異なる。また、1例であるが方形杵の引手（大足を持ち上げるために取り付けられた細い枝椽のもの、通常は榎を用いる）にサルナシが使用されている（No46）。引手にサルナシを使用する例は入佐川遺跡でも確認されている。なお、方形杵部材のうちヒノキと同定された6点（No188～190、192～194）は同じ杵の支柱と横枝である。樹種の内訳はスギ34点、ヒノキ10点。

②木鍬：灰堀みなどの鍬として使用されたもので、いわゆる「つちのこ」である。一般的には、芯持ちの円柱材の中ほどを細く削ったもの（木鍬A）がよく知られているが、袴狭遺跡では、半截した芯持ちの円柱材に方形の孔を穿ったもの（木鍬B）が主体で、現在でも但馬地域で見かけることができる。木鍬Bはほとんどが針葉樹（ヒノキ）であるが、年輪が緻密で重量感のある材が使用されている。顕微鏡観察の結果、細胞壁の厚い皮層材組織が含まれていることが判明した。樹種の内訳はヒノキ12点、アカガシ亜属2点、不明2点。

③鍬：溼田であるせいかな鍬の出土は極めて少なく、出土総数は10点に満たない。試料はこのうちの直柄平鍬2点であるが、鍬に一般的なアカガシ亜属ではなく、アサダが使用されている。なお、砂入遺跡での1点の鍬の同定結果もムクロジで、アカガシ亜属ではなかった。

④鋤鎌具：弥生時代の農具として著名な木廩丁であるが、山陰地方では古墳時代初頭まで下るものがあり、袴狭遺跡の鋤鎌具もその可能性が高い。同定結果は鋤鎌具として一般的な環孔材（ケヤキやヤマグワ）であった。

⑤手鍬：長方形の薄板に角状の突起が両端につくもので、手鍬あるいは麻などの繊維をほぐす「お引き金」に類似する木器である。アカガシ亜属。

⑥えぶり、臼、整件、小型整件、横槌、横槌未製品、鋤柄、初掬い：白がトチノキ、整件3点がアカガシ亜属、横槌の1点がクスギ節で、これ以外はスギかヒノキが使用されている。

4. 容器（曲物74点、視物37点、例物21点、指物4点、漆器11点、他20点）

製作技法では、曲物、挽物、割物、指物の4種と漆器がある。祭祀具、農具に次いで多く出土しており、曲物が500点以上、挽物も約150点出土している。

また、容器とは言えないが、円形の薄板（円板）や円形曲物底板や木皿の中央に孔を穿ったもの（有孔曲物底板、有孔木皿、有孔円板）もここでとりあげる。

①曲物：底板の平面形態によって円形、楕円形、長方形の3種があり、さらに長方形曲物のうち四隅が直角を成すものを折敷として呼び分けている。また、三宝や曲物柄杓子（ひしゃく）も含む。圓板が残っているものはできる限り両方の試料を作成した。一覧表で「円形曲物（底板）」「円形曲物（圓板）」などの表現は同一の曲物で底板と圓板の両方から切片を採取したことを示す。

同定結果をみると、底板ではスギとヒノキがほぼ同数であるのに対して、圓板はすべてヒノキである。試料No524・525では、底板はスギであるのに圓板にはヒノキが使用されている。

円形曲物底板では、表1に示すようにスギとヒノキで結合方法や木取りに明確な差が認められる。即ち、スギの底板では本釘結合されるものが多く、木取りは径目が半数以上となるのに対して、ヒノキの底板では榫皮結合されるものが多く、木取りはすべて板目取りとなる。

また、同じくスギが多用される田下駄と比較すると、田下駄では年輪幅の大きい材が使用されているのに対して、曲物では年輪幅の緻密な材が使用されている。

曲物の樹種の内訳はスギ27点、ヒノキ47点。なお、砂入遺跡ではすべてヒノキであった。

②挽物：ほとんどは木皿だが、高杯や蓋などもごく僅かに存在する。木皿には高台の無い「平底の皿」（木皿A）、「高台の付きの皿」（木皿B）、高台はあるが内括りの無い「疑高台付きの皿」（木皿C類）の3種がある。畿内周辺の遺跡では木皿Aが一般的であるが、但馬地域では木皿Cが主体を占める。

木皿の大半はヒノキと同定され、スギとヒノキがほぼ同数であった曲物底板とは対照的である。ヒノキとスギ以外では木皿Aと木皿Bにケヤキが各1例あった。砂入遺跡でも木皿Aにケヤキが1例確認されている。また、兵庫県内では山原遺跡（水上郡春日町）で木皿Aが7点出土しており、樹種同定された4点はすべてケヤキであった。

樹種の内訳はスギ4点、ヒノキ30点、ケヤキ3点。

③割物：割物では槽が最も多く53点出土している。他に桶、鉢、筒形容器、高杯、片口、脚付き盤、脚付き鉢と多様なものがあるが、出土数は僅かである。

槽はスギ8点に対しヒノキ1点と、スギが多用される。桶と高杯は弥生時代後期～古墳時代に属し、桶は3点ともスギ、高杯はカヤであった。また、鉢などでは古代の4点はケヤキであるのに対して、中世の1点はトチノキであった。

④指物：箱の部材と想定したものであるが、多様な形態がある。スギ3点とヒノキ1点。

⑤漆器：椀、蓋、皿、台脚、箸がある。樹種の内訳はケヤキ・トチノキ各3点、カヅラ・ブナ属各1点。皿（No515）と蓋（No473）はいわゆる黒色漆器で、塗りの厚い良品である。樹種は両方ともケヤキ。

表1 曲物の樹種と結合方法、木取りの比較（有孔曲物底板も含む）

樹種	点数	結合方法	点数	木取り	点数	樹種	点数	結合方法	点数	木取り	点数
スギ	23	榫皮結合	9	径目	7	ヒノキ	22	榫皮結合	17	径目	0
				板目	2					板目	17
		本釘結合	14	径目	9			本釘結合	5	径目	0
				板目	5					板目	5

⑥有孔曲物底板・有孔曲物・有孔木皿・有孔円板：丸い板の中央に孔を穿ったもので、曲物底板や木皿の転用品が多い。「木器集成図録（近畿古代篇）」では蓋に分類されている。木皿Cでは高台部分を削って薄くしている。樹種は曲物や木皿と同様にヒノキが多く、ヒノキ12点対しスギ4点。

⑦円板：丸くかたどった板で、蓋あるいは俵物桶の底板などの用途が考えられる。ヒノキ3点とスギ1点。

5. 食事具（9点）

杓子形木器と箸がある。

杓子形木器は、極端に大きいものを除いて、平らな身に細い柄が付く木器を総称している。「しゃもじ」と呼んでよいような形のもの、「へら」「匙」に近いものがあり、用途が食事に限定できるものではない。スギ5点、ヒノキ3点。

6. 工具（1点）

工具の出土は極めて少ない。確実なものとして銚柄が1点（ヒノキ）ある。

7. 紡績具（13点）

かせ、かせかけ、たたり（台と軸）、糸巻、糸枠がある。いずれも出土数は少ない。

たたりの台ではスギ2点の他、ケヤキとクリが各1点ある。糸枠では腕木の2点がヒノキに対して、支え木2点（この2点はおそらく同一個体）はスギであった。

8. 服飾具（27点）

木履、連南下駄、連南下駄未製品、下駄、横櫓がある。

連南下駄は100点以上出土しているが、他は数点である。完成品の連南下駄が広葉樹2点（クリ、エノキ）を除いて、ヒノキ（12点）かスギ（6点）であるのに対して、未製品は3点とも広葉樹（クリ、エノキ、カキノキ）である。ヒノキ製・スギ製の下駄と広葉樹製の下駄では、生産と流通のありかたが異なるのかもしれない。木履は2点ともヒノキ、横櫓にはツゲとシャシャンボが用いられた。

9. 運搬具・楽器（8点）

独楽、ささら、琴がある。独楽が12点とやや多く出土しているが、他は数点である。

独楽は木鍾と同様に木目が緻密で重量感のある芯持ち材が使用され、すべてヒノキと同定された。顕微鏡で詳細に調べた結果、独楽の多くがあて材組織を含んでいた。

10. 発火具（14点）

火燧板のみで、杵は確認できなかった。出土数は65点で比較的多いほうである。14点のうち13点がスギで、1例のみ広葉樹（エノキ）があった。エノキの例は火種受けをもつため断面が「L」字状となる小型品である。

11. 馬具・武器（3点）

鎧と鞘、把木？がある。鎧はケヤキ、鞘はスギ、把木？はヒノキである。

12. 運搬具（6点）

天秤棒、船材の一部と思われるもの、櫓、櫓状木器がある。櫓の1点にヤマガワがある以外は、スギかヒノキである。

13. 雑具（21点）

自在、栓、有孔の栓、机の天板、腰掛け、脚がある。

腰掛けは一本を例り抜いたもの2点と、天板に二本の脚を差し込み、楔で固定したもの1点（W1186）

を同定した。後者では部材のすべてから試料を作成した (№423～427)。これら7点はすべてスギであった。これに対し、机や案などの脚はヒノキが多用される傾向がある。他では、有孔の柱にリョウブが1点ある以外は、スギかヒノキである。

14. 建築部材 (45点)

柱、梯子、扉の藏敷し、楔がある。

① 柱 : 内田1区で発見された奈良時代～平安時代前半の獨立柱建物の柱32点 (試料№592～609、622～635) と、下坂地区で発見された戦国時代の三間堂の柱と考えられるもの2点 (試料№99・100) がある。前者では、ヒノキ、スギ、クリの3樹種でそれぞれ25点、1点、6点である。S B304の柱には径約25cm以上の円柱材を面取りしたものと1辺15cm以下の方形の柱がある。また、クリ6点中4点は同じ建物 (S B506) に使用されており、この建物ではクリ以外の柱は確認されていない。

戦国時代の柱2点は二葉マツと同定された。

② 横 : クリと同定された4点は戦国時代の三間堂周辺から出土したもので、同じ形態をしており、三間堂の部材の固定に使用されたものと思われる。他はスギあるいはヒノキである。

15. その他 (72点)

柄の頭、曲卓状木器、柄、木像、紐掛けのある棒状材、孔あきの板、部材、用途不明、棒状材、墨書のある角柱材がある。

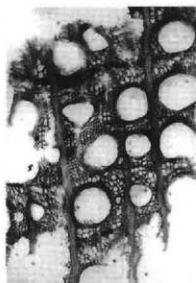
スギ、ヒノキの他、ホオノキ、アカガシ亜属、クリ、ヤマグワ、エノキ、二葉マツ、ムクロジがみられる。

16. 自然本など (17点)

ヒョウタンと思われる小片と平安時代の水田の畦畔に使用された樹皮のついた小枝がある。後者は長い板材と共に水田上に並べていたもので、任意に抽出した16点を試料とした。この試料は遺跡周辺の自然植生の一部を反映しているものと考えられる。16点の内訳はムラサキシキブ5点、クリ3点、シイ属・エゴノキ各2点、キブシ・サクラ属・バラ亜科・ヤナギ属各1点であった。なお、砂入遺跡の平安時代の道路状遺構に使用された枕15点を同定した結果では、クリ、アカガシ亜属、コナラ節、エゴノキ、シイ属、サカキ、ブナ、クマシデ属、カエデ属の9種が認められている。

参考文献

- 兵庫県教育委員会編『山垣遺跡』 兵庫県文化財調査報告 第197冊 (1990)
- 兵庫県教育委員会編『砂入遺跡』 兵庫県文化財調査報告 第161冊 (1997)
- 兵庫県教育委員会編『袴伏遺跡』 兵庫県文化財調査報告 第197冊 (2000)
- 兵庫県教育委員会編『入佐川遺跡』 兵庫県文化財調査報告 第197冊 (2002)
- 奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿古代篇』 (1985)



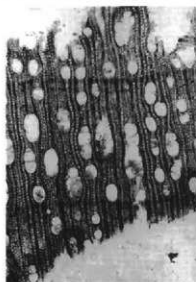
1. 18 浅物容器 ケヤキ ×30



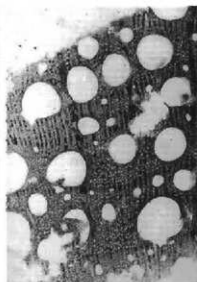
2. 19 角柱 ムクロジ ×30



3. 28 有孔の栓 リョウブ ×60



4. 43 平紙 アサゲ ×60



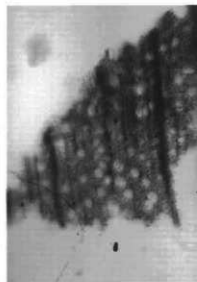
5. 46 方形枠支柱(引手) サルナシ ×30



6. 62 円形曲物 ヒノキ ×250



7. 68 人形 イメガキ ×250



8. 69 横脚 フゲ ×60

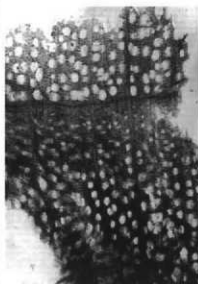


9. 75 壱弁 アカガシ組属 ×60

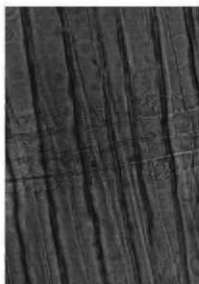
第31図 博狭遺跡出土木製品の顕微鏡写真(1)



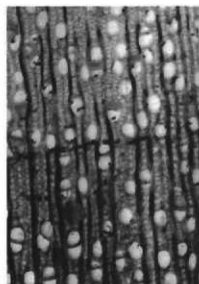
10. 80 横 スギ ×250



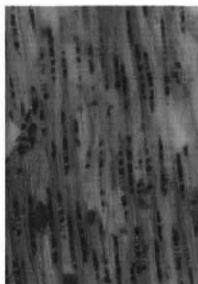
11. 98 径断 横 プナ ×30



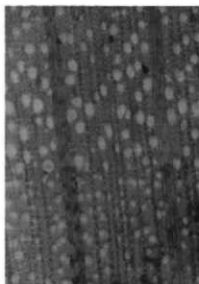
12. 99 柱 二葉マツ ×250



13. 103 径断 横 トチノキ ×60



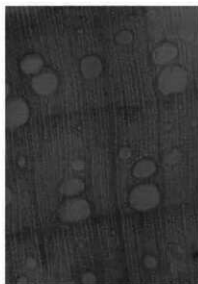
14. 104 径断 横 トチノキ ×60



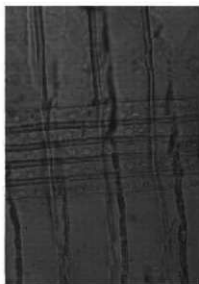
15. 105 横断 横 シャシヤンゴ ×60



16. 121 火断 横 スギ ×250



17. 153 径断 横 ヤマハゼ ×60

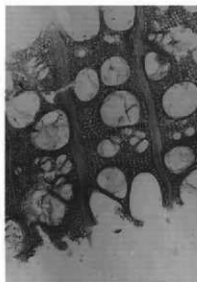


18. 175 柱下駄 横 スギ ×250

第32回 神奈川遺跡出土木製品の顕微鏡写真(2)



19. 206 大樹板 エノキ ×60



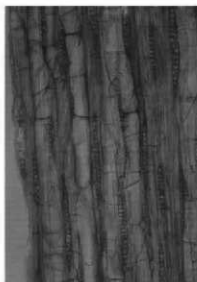
20. 229 梗 ヤマグワ ×30



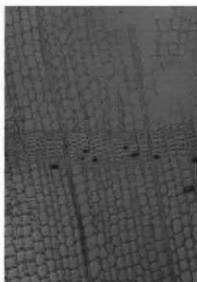
21. 240 白トチノキ ×30



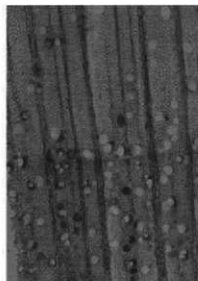
22. 246 例物高杯 カヤ ×250



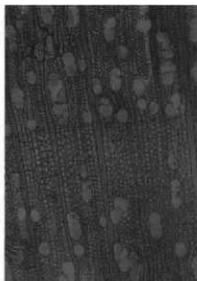
23. 247 曲草軟木器 ホオノキ ×60



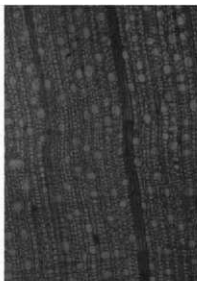
24. 268 種掛けのある棒状材 スギ ×60



25. 299 枝 サクラ属 ×60



26. 301 枝 エゴノキ ×60



27. 302 枝 キブシ ×60

第138 博狭遺跡出土木製品の顕微鏡写真(3)